

---

# 『最高世界の台本』はどこの本屋にあるか

N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『最高世界の台本』はどこの本屋にあるか

### 【Nコード】

N9522U

### 【作者名】

N

### 【あらすじ】

ブスとおれの、ひと夏のイリュージョンのような関係。美人の生徒会長、釣り友達の中学生、そして、「世界支配者」を自称する少女……！ 普通のように、普通じゃない、けどやっぱりこの世界は普通なのか？ 青春ファンタジーライトノベル。

## プロローグ（前書き）

ブスとおれの、ひと夏のイリュージョンのような関係。美人の生徒会長、釣り友達の中学生、そして、「世界支配者」を自称する少女……！ 普通のように、普通じゃない、けどやっぱりこの世界は普通なのか？ 青春ファンタジーライトノベル。

とりあえず書きだしてみました。完結までは載せようと思います。書きながら上げる形なので、改稿や設定変更がしばしばあると思います。ご了解をおねがいします。

タイトル変更等、重要な情報はなるべく明記しようと思います。  
7月25日、タイトルを変更しました。ですがまだ（仮題）。

## プロローグ

この世界は巨大な秘密結社に支配されている。

結社の名称は、Guardians Of Mankind。

略称・GOM。

「エネルギー、食糧、医療、情報、軍事」を裏から掌握するのがGOMの支配方法だ。

なにより、「金」<sup>マネー</sup>の流通を掌握することで世界の支配をやりやすくしている。

金こそはGOMの誇る武器である。

世界人類を支配する上でのGOMの合言葉はこうだ。

「市民どもに金と暇を与えてはならない。貧乏にさせれば嫌でも目のパンのために働く」

戦争事業でもGOMは儲ける。

国境を超えるネットワークをもつGOMは、世界の紛争の裏で暗躍する。極端な話をすれば、多国間の戦争において、どの国にも武器を売って利益を得る。どの国が戦争に勝っても儲かる仕組みである。

エネルギーや食糧についても、GOMが流通量を統制し、儲けていることは言うまでもない。どんな国の有力企業であろうと、裏をたどっていくと最終的にはGOMの人脈にぶつかる。GOMは、世界中から吸い上げた金を、傘下の金融機関に入れる。こうして、国家とは関係なくGOMは富と力を増す。

GOMは世界中に無数の下部組織と配下を置く。知らないうちに

GOMの一部に組み込まれている有力者も多い。教育、福祉、医療、法律、多くの理念の裏で糸を引くのはGOMである。理念を支える世論や常識を誘導するのもGOMである。社会のための事業が結果的にGOMを利することは多い。貧困を無くす活動すらも回り回ってGOMに金が入るようになっていく。

GOMの内部事情は、一部の幹部だけが独占する秘密だ。幹部は圧倒的なパワーを持つため、自らは表に出ず、無数の各国首脳や高官を意のままに動かすことができる。

そして、首脳や高官たちは政財界に大きな支配力を持っている。さらに、政財界の有力者も一人で多くの取り巻きを従える。このような構造を考えれば、首脳でさえもGOMの内部事情を知ることが難しい。まして一般市民が知ることなど、まず無いと言っていいだろう。

GOMの存在が陰謀論的なトンデモ話として語られることはしばしばある。だが、そのトンデモ話さえ、おおもとはGOMが意図的に流しているのだ。言うまでもなく、GOMは各国の諜報機関の裏に存在し、マスコミを通じた情報操作や世論形成にかけてはお手のものであるからだ。

じつはGOMがトンデモでも何でもないどころか、予想以上に世界を牛耳っていることを分かる者は稀だ。市民の予想の範囲さえ、GOMの工作により作られてきた。

金の集約。情報の統制。法律による規制。やり方は単純なのだ。それが現実に行われているとは誰も考えないだけだ。

この社会が巨大なままごとのセットであることを、市民は気付かない。

以上が、この世界の根幹の設定である。

では、グッドラック。

――

という文面が、少女の携帯端末に流れた。

「世界としては中の下というところだな。そうは思わないか？」

彼女は大人びた声で呟いた。

「そうだな」

という声だし、隣に彼女の相棒が立った。いま現れたところだ。

「ところで、世界の批評よりも、自分の『顔』は分かっているかな？」

「だいたいはね。そういえば、何と言ったかな？ わたしの敵の名前は」

「分かっているじゃないか。『カミカミ』だよ。あっちに十キロの所に居を構えている」

相棒は少女の頭越しに向こうを指差す。

「ああそう。『カミカミ』ね。覚えやすすぎて忘れてしまった」

「一応言っておくけど、『カミカミ』はGOMの一部分だからね、強敵だと思うよ？」

「うむ、そうだね、しっかり殺すことにするよ。だけど、きみにはもっと詳しく調べてほしいな。この薄汚い世界の情報を端末に送ってくれたようにね」

「ならばそうしよう。引き続き調べるつもりだ。また送る」

相棒は音もなくガラスを突き抜け、去った。

ここはビルの45階。最上階にあるガラス張りの展望台フロアだ。残った少女は、厚いガラスに小さい手を触れる。彼女が「薄汚い」と形容した夜景が下界には散りばめられている。室内の非常口の明かりを受け、ガラスには少女の顔がうつすらと映る。

「自分の『顔』か……。とても美しい」

実際、ガラスに映った顔は、とても美しかった。夜の闇が適度な陰影を与え、怪しげな魅力を演出した。少女は屈託なく笑ってみせた。

忙しい足音が近付いてきた。

警備員だろう。カメラに撮られたか、相棒との会話を録音されていたか。両方かもしれない。

ピーー、ガチャガチャ、外からのカードキーと手動のカギが開けられ、青い制服を着た警備員たちが駆け込む。

「こら、何やってるんだ！」

少女は振り向いた。

「おま、いや、君……。どこから入ったんだ？」

警備員は戸惑っていた。とてもわざと侵入しそうにない、少女のあどけない風貌。

だが、今日は定期点検日である。ビルの展望フロアは休業しているのだ。

「閉じ込められてしまったの」

少女は幼い声色で言った。

「え？ 本当かい？ それじゃあ昨日から？」

「なんてことだ。昨日の当番は誰だ」

口々に驚きが上がった。警備員達は目の前のあどけない少女の言葉ですっかり信じ込んでしまった。

「……なんてね。冗談だ。わたしはここに堂々と侵入したのだよ。不法侵入者というわけだ」

少女の声が深みと艶を帯びたものに変わった。警備員達は呆気に取られたように少女を見詰めた。

「というか、迎え入れられたと言ってもいい。わたしは君達以上の存在……いわば『絶対的存在』だからね。おっと、君達をくさすつもりは無いのだよ。ビルを警備するのはとても立派な仕事だ」

「な、何を言ってる？ 怪しいやつめ」

警備員達は近づく。しかし、少女の眼光や声といったものに何処か気圧されたのか、おっかなびっくり近付いた。

「GOMという言葉を知っているか？ 知らないだろう。知ったとしても、君達は夜食のコンビニ弁当を食べ、仮眠などするうちに、忘れてしまっただろう。そして展望台で見た不思議な美少女のことを仲間に語り継ぐ。幽霊話といった類のものは、そうして語られていくのさ」

少女は後方の手をガラスにくっつけた。

「君達の仕事がビルの警備なら、わたしの仕事は世界の警備だよ」

瞬間、弾き出されたように、少女はガラスの向こうに消えた。

消えた時、一瞬の閃光が辺りを包み、あとには何も無かった。

「!？」

警備員達は、少女が去った途端、堰を切ってガラスに突進した。

もちろん、分厚いガラスのほか、手応えは残らなかった。

丁池の入り口にはバラ線が付いたフェンスが設けられている。

さらに、フェンスには「立入禁止」系の看板が三つほど取り付けられている。

だが、フェンスの下部には大人が這って通れるくらいの穴があいていた。フェンスの針金をニッパーのようなもので一本ずつ丁寧に破断したような穴だ。こういう穴は誰があけるのか謎だが、池に用がある人間には都合がいい。

紳はフェンスの前に自転車を止めた。

一回り小さい新しい自転車がすでに停まっていた。

「今日は来てんのか」

紳は呟き、針金にリュックを擦らないよう気をつけ、フェンスの穴をくぐった。

堰堤えんていに立って池を見渡す。

水面には涼しげなさざ波が立っていて、鮎か鯉の小さいやつが遠くでポシャリと跳ねた。早朝の空気はひんやりと爽やかで、徹夜明けの肺にも優しい。

紳の趣味はブラックバス釣りだ。中学の頃から、もう五年も続けている。

ブラックバス釣りはテレビやPTAからよく叩かれる。バス釣りが趣味だと大人に言うだけで、犯罪者扱いされることもあるほどだ。だが紳は別に気にしていなかった。この丁池で、今まで文句を言われたことはなかった。というか、今の時代、立入禁止や釣り禁止でない池はほぼ無い。だから、釣りをする場合、ある意味で開き直るしかない。池のフェンスをくぐると、いつも無言の説教をされているような感じがしたが、それを敢えて無視し釣りするおれカッコ

イイよな、みたいな優越感を感じた。

結局、残念ながら、面白いものは面白いのだ。

パシヤ。

やや硬質な水音がした。遠くの水面に疑似餌ルアーが着水した。

白地に赤い模様の、土管型のルアーだ。ルアーのお尻には銀色の金属板ブレードが付いている。

「おっ、バドだな」と、紳はルアーの名前を言う。釣り人以外にはどうでもいい情報だ。

ルアーに結ばれている糸ラインは、戯れるような線を水面に描き、向こうの茂みへと隠れている。釣り人の姿は見えない。しかし、たぶん掠しよっであるう。あの自転車は掠のだし、最近「バド」を小遣いで買ったと言っていた。

ツツツ、糸が巻き取られ、ルアーが水面上を動く。「トップウオーター」というタイプの、水に浮くルアーだ。ルアーには丸い目が描かれ、チャージングともグロテスクとも言える顔をしている。

ルアーは波を立て、首を振りながら動く。尾部のブレードが本体とぶつかり金属音を出す。カカカカカ。

ゴボ！

食った。魚だ。なめらかなプラチナ色の腹部が、にゆるりとルアーを巻き込む。ずいぶん調子よく出るものだった？ いや、逆だ。ルアーを食う魚はイキがいい。だから早いタイミングで食ってくるものなのだ。

それより、見た感じ、いいサイズの魚だ。白いルアーと黒い魚体が連結され、派手に波しぶきを立てる。糸はピンと貼られ、弦のようにピンピンと震えている。釣り人は茂みの向こうで懸命にリールを巻いていることだろう。心拍数も上昇中だな。

がんばれ、バラすな、ちゃんと取り込め。紳も自然に拳を握る。が、ゴボツと魚がローリングした後、水を打ったように静まった。

水面には、白い「バド」がプカリと浮いていた。  
あーあ。バラしたな。

堰堤の奥は茂みになっており、そこから池を囲むように林道が続いている。

紳は泥つばい道に滑りそうになりながら、急いで駆けつける。釣り人の馬鹿な習性だ。急いでも魚はハリから外れているのに。

「……紳くん」

棕はハツと紳を見た。驚いた顔、というか、どう表情を作ればいいか分からないといった様子である。

見たところ35センチぐらいのブラックバスだったが、棕には初めて見る大物だったろう。棕は釣りを始めて三ヶ月、20センチ前後の小バスを二匹しか釣ったことがない。ちなみに、小バス二匹という記録は、紳が釣りを始めてから二年間の記録と同じである。

「惜しかったな」

「うわゝ、大きかったあゝ」

めずらしく棕は叫んだ。すると悔しさと興奮が湧いたらしく、心底から残念そうにまた「うわゝ」と言った。泣き付くような顔で紳を見た。

棕は中学一年だ。中性的なあどけなさがまだある。

棕は魚の重さを思い出すように、竿を上げたり下げたりした。

紳が棕と会ったのは春のことだ。

棕は中学の男友達のグループに誘われ、数人でT池に来ていた。紳が目の前でさりげなく小バスを釣り上げると、グループは横目で興味を示した。金髪をバリバリに立てている紳の風貌にビビり、正面から見ることは無かった。

結局、その日、棕だけがグループの中でブラックバスを釣った。

棕は、初めての釣りで魚を釣り上げたのだ。

じつは棕だけ釣れたのは偶然ではなかった。紳が「これを使ってみな」と言い、「スピナー」というルアーを渡していたのだ。まあ、棕だけに渡したのは、棕が偶然に紳の近くで釣っていたからだっただが。

スピナーは丁池のシークレット兵器だ。大きい魚は釣れないが、小さい魚は良く釣れる。初心者が投げて巻くだけでもわりと釣れる。あとは、岸沿いに投げるんだと教えてやった。初心者は池の真ん中にルアーを投げたがるが、魚は岸沿いの物陰に潜むことが多いからだ。

結果、棕は「自分で魚を釣る」ことができた。

小バスではあったが、釣りに目覚めるには充分な刺激だったようだ。それから棕はしばしば来るようになった。池の近くにある寮に住んでいるので、ちよつとした時間に来ることができそうだ。

紳の家も池から少し登った所の宅地である。

お互いに意外と近かった。

今日みたいに朝釣りで会ったのは二回目だ。夏の釣りは朝と夕方がいいと、このあいだ棕に教えた。人間と同じで、ブラックバスだって夏の昼間は暑さで参っている。

まあ、健康的に早起きであるう棕と違い、紳は徹夜明けだが。

と言っても、べつに何かに打ち込んでいたわけではない。漫然と部屋に居たら夜が明けるとはよくある。

朝に魚を一本出し、そのまま学校に行くつもりだ。だから、制服で来ている。眠くなったら学校で寝る。いつも学校で寝ているから特別ではない。

紳はリュックから釣り道具を出した。竿はパックロッドと言い、四つのピースをつなぎ一本にする物だ。リュックに仕舞えるから重宝する。

椋が水面を泳ぐルアーを使っていたので、紳は少し潜るルアーを使うことにした。

紳の隣の場所を借り、とりあえずルアーを投げる。

このエリアは池の水の吐き出し口が近く、池の角にあたる部分でもある。水の動きがある所や、地形の変化がある所には、魚が集まりやすい。さつき椋がバラした魚を釣ることは無理だろうが、似たサイズの魚が釣れる可能性はある。加えて、早朝はブラックバスがエサのザリガニや小魚を追い掛ける時間でもある。

ルアーを投げ、巻いていると、水中の障害物に引っ掛かった。

障害物が多いのは、ポイントが多いことなので、いいことではある。しかし、引っ掛かるのは御免だ。糸が切れると、またルアーに結ばなくてはならない。意外と面倒な作業だ。

紳は舌打ちした。何とか回収できないものか。

竿をゆっくりと引くと、障害物もくつついてくる手応えがあった。動かないので、魚ではない。水を吸ったビニール袋とか、木の枝のかたまりとか、そういった類だろう。それにしても、重い。

岸まで寄せて来ると人間だった。

白いシャツと、チェックの入った紺色のスカート。

夏服を着た少女が、岸辺の浅場に横たわっていた。

ルアーの針はシャツの袖に引っ掛かっており、今にも生地が裂けそうである。

だが、水深がなく、糸をこれ以上巻くことはできない。

え、えええ。紳は自問自答し、椋と顔を見合わせ、また少女を見る。なぜか覚える犯罪意識。というか、あの制服は紳が通っている高校のものである。大柄な肢体がつつぶせになり、腰まである長髪が水面に広がっている。ピクリとも動かない。いや、動いたら動いたで怖いのだが。

すると、椋がズボンを捲り上げ、バシバシと駆けて行った。

十五歩ぐらいで少女の所までたどり着き、自分よりも大きな少女を抱え上げ、おぶって岸まで連れて来た。

紳はポカンと眺めていた。……と、とりあえず、グツジョブ。紳は親指を立てた。コミカルな動作が出る自分に笑える。

それから、二人で少女を持ち、堰堤の上に寝かせた。

「どうすればいいんだ。人工呼吸か」

と言ってみるが、やりかたが分からない。というか、生きているのか？

「僕がやってみるよ。人工呼吸なら学校で習ったんだ。明日、プール開きだから」

と棕は言った。目は真剣そのものだ。まだ棕は異性を意識するよくな時期ではないだろう。紳よりは随分しっかりした中学一年生だ。そういえば、大慌てで運んだものだから、少女の顔もまともに見ていない。紳は動転していたのだ。

濡れた少女の長髪を掻き分け、顔を見ようとした時、

「ゴ……ホッ！ ガハッ！」

少女は水を吐き、壮絶に咳き込んだ。野獣のような野太い声だった。まあ当然だろう。窒息しかけた、あるいはしていたのだから。しばらく少女は咳き込んでいたが、数分ほど経つと呼吸が落ち着いた。

少女はムクリと上半身を起こした。

紳と棕は思わず体を引いた。

観察するような目で、少女は周囲を見回す。

紳は信じられなかった。恐らく少女は二人が釣りに来る前から沈んでいた。よく無事でいたものだ。というかなぜ水中に居たのか。あるいは誰かに沈められてもしたのか。いや、無事で良かったとは思うが、怖いくらいに謎だらけだ。

少女は無言で立ち上がった。

大きく息を吸い、顔をゆがめ、大きな溜め息をついた。

そして、幽霊のような長い髪から水をしたたらせ、ゆっくり歩い

て行った。

二人に何も言わず、少女は立ち去った。

紳は堰堤に座り込んでいた。やや放心していた。

少女の姿が脳裏に焼きついていて、あの少女は、およそ女と言っには似つかわしくない顔を持っていた。

極めて怪異な容貌。

この地方に住む河童の末裔だと言われたら信じたらう。思い出したら吐いてしまいそうな面相であった。シャキツとした制服との対照が最高だ。いや最低だ。

つまり、最高にブスだったのだ。

\*

紳はただちに池を離れた。椋にも「何も見なかったことにしろよ」と口止めし、家に帰した。責任はおれが持つから、と言っておいた。もちろん出まかせである。

事件の二オイがした。めんどろは嫌だった。

いや、殺人事件でもなければ、傷害事件でもない。少女は見たところ無傷で歩き去った。

とはいえ、池に人が沈んでいたわけだ。少女が何か事件に巻き込まれている可能性は大いにある。警察に事情を聴かれたりするのはめんどろだ。あらぬ疑いを掛けられても困る。

それにしても、少女という言葉で呼ぶのが憚られるような不細工な女だった。濡れたブラウスから透けていた肌色のブラジャーが頭から離れない。スーパーで売ってるオバサンの下着かよ。

朝から冷や汗をかいたが、学校に着く頃には太陽がギンギンに照り付け、ふつうに汗がダラダラと流れる。

灼熱の針金が皮膚に刺さるかのようだ。梅雨は完全に明けたらしい。

下駄箱の前で靴を履き替えていると、ちょうど登校してきた櫛棗しじょうに会った。

「や、おはよう」

櫛棗は紳に声を掛け、自分も上靴を履く。かがんだ胸元から奥が見えないかと紳は期待するが、首もとのリボンのせいで見えなかった。つやつやしたミドルの黒髪を二つに結っている。ツインテールと言っほど長くはない。

「おはよう会長」  
「うん」

櫟棗は紳を一瞥し、水が流れるように階段へと消えた。いつものように動作がスマートである。折り目正しい靴下と、ほっそりしたふくらはぎが目に見えなかった。

櫟棗は隣の班の美人で、生徒会長もしている。紳の悪友の小山とは幼馴染みらしい。

小山が言うには「あいつは見たとおりの奴だよ」らしいが、とすると二人の接点がどこにあったのか謎すぎる。小山はスケベでギャングル好きの優男であるが、櫟棗は全く文句のつけどころも無い人物だ。美人だとは思うが、付き合いたいなどは想像したこともない。てか、付き合うとか、紳自身失笑するレベルだ。住んでいる世界が違う。

ちなみに、櫟棗は、紳の宅地から自転車で降りて行った麓の石窯パン屋でアルバイトをしている。先日夕方、腹が減ったのでパン屋に入ったら、トングを持った櫟棗に「お、いらっしやい」と言われた。紳は、本当は苺とホイップクリームのパンにしたかったが、食べもしないサランをレジに持って行った。櫟棗は、学校と同じ乾いた空気のような態度でレジを打った。紳は名札の「いちい」という文字を見ながら、この割合バランスの悪い字を書いたのは誰だろうとか、どうでもいいことを考えた。

それから、このパン屋のバイトの子は全体的にレベルが高い気がした。別の日に友人の大川と一緒に覗いたところ、大川も紳の見解に同意した。

現在、櫟棗の仲介でバイトの子たちと合コンできないか、小山に頼んでいるところだ。小山・大川・紳の三人は、合コン等の活動を中心として日頃からつるんでいる仲である。

今まで紳は彼女が居たことがない。

中学三年の、ちょうど今頃、なにかの委員会の活動を通して仲良くなった女子に告白し、付き合ったことはある。しかし何をやった

らしいか分からず、いや、最終的に工口的方面に行こうとは思っていたが、そこに至る手順が下手すぎて十日で別れた。というか、向こうから「もうつまんないからやめよう」とダメ出しされたほどだ。たしかに、毎日一緒に帰ったり電話したりメールしたりしたが、決まりきった話題ばかりで面白くなかった。さすがに十日で別れた相手は彼女とは思わないと思う。

そんなわけで、今年こそは彼女を作りたい。もうすぐ夏休みだから、できればそれまでに作りたい。返す返すも、今思えば、二年前の「十日間の彼女」の時に無理して襲っていればよかった。今度彼女ができたらしょうと思う。

てか、女なんて外見と肉体以外に価値あるのか？ 紳が合コンで出会った女子といえ、あれ買いたい、これ食べたい、私の話聞いてよ、みたいな奴ばかりだった。女運が悪いのかもしれない。だが、紳達三人組の総意としては、女はビャービャーうるさい欲望の塊だ。樂乗みたいなできた女はあくまでも例外だ。欲望には欲望で迎え撃つしかないのだ。溜まりに溜まった欲望を今年の夏こそは開放してみせる。

紳の席は教室の末尾だ。窓際が一番後方である。しかも、五人の班の五個目の席なので、隣は誰も居ない。景色を見るには最高であり、文字通り末尾の席である。

今日は机の並びがいつもと違った。

なぜか紳の隣に机があった。

班の座席が六個になっているのだ。

掃除当番が机を並べる時に間違えたと思われた。おそらく前の班の机を持って来たのだろう。たぶん、前の班の席数が五つになっているはずだ。

そう思って前の班を見ると、机は普通に六個並んでいた。

？

ということとは、前の班は六人で、こっこの班も六人。妙である。いつもは六人＋五人で十一人のはずだ。だがふと前方を見た瞬間、疑問は氷解した。

前の班の一番前の席。

見たことがない女が座っていた。

見たことがない、それは学校での話だ。紳はさつきその女を見た。というか、あの透けていた薄気味悪いブラジャーを忘れるわけがない！今はブラウスは乾いており、公害は比較的抑えられていた。紳は恐る恐る女を覗き見る。威風堂々たる座高。無味乾燥にゴムで縛っただけの、ポリウレームのあるくすんだロン毛。骨ばった顔面とお岩さんのような目元。

やはり、T池に沈んでいたあの女だ。

それは間違いなかったが、新しい疑問が生まれた。

なんであいつがうちの教室に居るんだ？ 転校生か？ 今日転入して来たのか？ だとしても、T池から学校に直行するもんか？ 何か、色々とおかしい。

しかも、クラスの生徒達が違和感を持っていないのが更におかしかった。

何食わぬ顔で小山は宿題を写しているし、今入ってきた大川は確かに女を見たが普通に自分の椅子に座った。

どうやら、知らない間にクラスの人数は一人増えているらしい。

しかも誰も増えたことに気づいていなかった。または最初からこの人数だと思っている様子だった。

「……何だ、こりゃ」

紳は間抜けに呟いた。内心では肌寒かった。サーツと汗が引く気がした。ただ、女の席が増えたために、前の班だった櫟棗が押し出され、こちらの班に加わる形となっていた。それは嬉しかった。

櫟棗の背中は綺麗だといつもどおり思った。

授業が始まる直前、紳は小山の肩を叩いた。

「なんだよ」

小山はシャープペンを握ったまま、面倒そうに振り向く。一時間目のリーダーの授業では宿題を集めることになっている。小山は意外とまめである。誰かのノートを写させてもらっても、宿題は毎回出す。ちなみに紳は、毎回誰かに頼むのも面倒だし、三回に一回くらい出している。今回は出すつもりは無い。こういう習慣の積み重ねにより、通知表は見事なオール3である。

「おい、変なこと訊くけど、あいつって元々ウチのクラスに居たか？」

紳は女に向けて顎をしゃくった。

「は？ 何を言ってるんだ？」

小山は目をぱちくりさせた。いつも飄々としている男にしては、わりあい驚いたと見える。

「ははあ、分かったよ。紳、萌映もえちゃんが気になっているんだな」

小山は優男の爽やかな微笑を浮かべた。「萌映ちゃん」という発音がじつに軽快である。

「はあ？ ちげえよ」

本当に違う。いや、気になっているが、小山が言ったような意味ではない。ていうか、女の名前は萌映というのか。ひでえ名前だな。全然萌えねえよ。

「瞬時に否定するあたりが怪しいね」

「お前が見掛けに反して意外とダークなユーモアを秘めているのは否定しないが、おれは言葉通り、あの女がウチのクラスに居たかどうかを訊いているだけだぞ」

「居たか居ないかで言うと、居たと思うな。このクラスが集団催眠に掛かっている、クラス全員が幻影を見ているんじゃないとしたら」

小山はつまらなそうに答えた。まめな性格なので、くだらない質問にも真面目に答えてくれるのだ。

つまり、小山は「くだらない質問」だと思っている。

集団催眠。まさにそれだ。いや、催眠で片付けるには生ぬるい。洗脳と言えるほどの現実が目の前にある。小山は思ってもいないだろうが、まさにクラス全員が幻覚に囚われているのだ。

紳は周りをキョロキョロと見回した。誰かがチラ見していないだろうか。クラス全員で自分をハメているんじゃないだろうか。だが、残念ながら、そんな様子は無い。

小山、大川、櫛棗、みんな、集団催眠に掛かっていることにすら気付いていない。

なんていうことだ。これならおれ一人の頭が狂ったことにした方が気が楽だ。紳はそう思った。だが自分の判断力は健全だと思えて仕方がない。どうすればいいのか。

さすがに小山が訝しげに紳を見た。前方の席に居る櫛棗も、なにげない顔で二人を見る。

紳は自分の主張をブチ撒きたい衝動に駆られた。おかしいよ。萌映なんていう女、ウチに居なかつたじゃん。ほぼ言いかけたくらいだが、唸り声とともにノドに封じ込めた。

考え直したのだ。

ブスが元々クラスに存在しないことを釈明して、何の得があるのか。ブスな女子なんて、居るとしても居ないほうがいいのだ。男のおれにとってはそうだ。むきになって釈明すればするほど、小山たちに変な誤解をされかねない。ブス専という噂を立てられる日も遠くはなくなってしまう。

ところで、ブス専ですら敬遠するような風貌の女を形容する言葉ってあるのか？

というわけで、紳は萌映という女の闖入というか混入については気にしないことにした。曖昧に頷き、黙って座り直した。

どうも妙なことになっているが、無理に周りと衝突することもない。ブスというのは、居ても居ないように扱いたくなるものだ。クラスにブスが居ると認めるだけで不快指数が1%上がる、ブスとはそのような存在だ。萌映とやらのことをいちいち気にかけるだけで、

生活の損失と言える。

なんなら自分の中の事実を改変してもいいくらいである。ブスカ  
ら受ける不快感を消すため、おれは無意識の嫌悪から萌映とやらを  
居ないように扱ってきたのだと。そんなふうに考えをまとめ、紳は  
疑問にひとまずの折り合いをつけた。

「ああ、つまらない、毎日つまんない。最近の生活には刺激が足り  
ないよ」

シャープペンをクルクル回しながら、小山は呟いた。

この男はいつも退屈している。何に退屈しているのかは知らない  
が、そんなに退屈することはかなりなら、逆に退屈しないようにも思  
う。しかし小山なりの悩みではあるのだろう。

紳としては、毎日の生活を楽しいとも思わないが、そこまで退屈  
だと思つたこともない。

「嘘でもいいから、紳、萌映ちゃんに告<sup>こ</sup>らないか？ そしたら少し  
は楽しいんだけど」

「なにを言ってる。冗談はよせ」

「だから、嘘でいいって言ってるじゃないか」

「おれはお前を楽しませるボランティアじゃねえぞ」

だが、小山は話を聞いている様子はない。

「なるほど、どうして今まで気付かなかつたのかね。借金という概  
念があるように、女も美人だけが使いであるわけじゃない。いい  
札<sup>ふだ</sup>があつたじゃないか」

と、一人呟いた。

実に爽やかな笑顔であつた。

紳は、午前中の休み時間を使い、同じ班の男友達に萌映という女のことをそれとなく訊いた。小山には冷やかされるので訊かなかった。

萌映の存在が気になっていたのは事実だった。悪い意味で気になっていた。知らないうちに胃の中に異物が入っているような気分であつた。

情報収集の結果、女のフルネームは戸沢萌映とくさわもへいといい、クラスの前つまみ者であることが分かった。というか、鼻つまみ者を通り越してもはや話し掛ける者すらおらず、クラスに固着したしつこいカビのように見られているようだ。

メンヘル的傾向もあるらしい。机や壁に向かってブツブツ呟いたり、具合を悪くして早退するといったことがしょっちゅうある。

班の男友達が言うには、「嫌われ始めた理由は明らかではない」そうだが、紳からすれば何よりも明らかだった。顔を見れば分かる縛っているにもかかわらずボサボサの長髪。顔面上に二つの山のように突き出た頬骨。圧ぼつたい一重まぶた、ゴマ粒のように小さい黒目。板のような扁平な胸。気色悪い点を挙げればきりが無い。おまけに背がでかく、嫌でも視界に入ってくる始末だ。

ただ、情報は集まったが、今朝池に沈んでいた女がどうしてクラスの一員になつているのか、その謎は解けない。

結局、紳の違和感は解消されなかった。

そこで紳は今度こそ戸沢萌映について考えるのをやめた。もういい、さしあたり無視だ。釣りに行きたびに池で釣れるとかいうのなら困るが、そうじゃないなら、これ以上考えても意味はない。

それよりも、夏までに彼女を作る具体的なプランを練ったりするほうが、ずっと生産的だと思つた。

昼休み、紳は小山と大川と三人で学食を訪れた。

三人とも弁当を持って来ていない時など、たまに学食と一緒に食う。

「ゲームしないか」

と、小山が言った。

三人はゲーム好きだ。特に賭け要素のあるゲームが好きだ。賭け将棋、賭けポーカー、徹夜で賭けマージャン、体育の授業でこっそり賭けバドミントン。

しばしば現金を賭けてゲームをやる。賭ける単位は千円からと、高校生にしてはガチだ。ゲームは合コンとともに三人を結び付ける中心的イベントとなっている。

もちろん、いつも金を賭けてゲームをするわけではない。金を賭けるのは、ゲームにスリルを与える手早い方法だからだ。面白い罰ゲームがあれば、そっちが採用されることもある。

たとえば小山が両耳にピアスの穴を空けているのは先日の賭け将棋の罰ゲームだし、大川が昔の書生のような黒縁の伊達メガネをしているのも罰ゲームの結果である。小山は三年間穴を塞がないこと、大川は一年間メガネを着用すること、と決められている。

ちなみに紳が金髪に染めたのも賭け柔道の罰ゲームであった。金色よりも奇抜な色に染める場合以外、卒業まで色を変えられないことになっている。

「なんのゲームをするんや？」

大川が訊いた。

「ああ、簡単なゲームだよ。ジャンケンさ」

小山は割り箸をパチリと割り、きつねそばの揚げに汁を染み込ませる。

「ただし、ジャンケンで負けた奴は萌映ちゃんに告るというゲームだ」

「なんだと」

紳は大川の「なんやて」というツッコミより先に反応した。

「おいおい、冗談きついで。なんでそんなアホくさいゲームやらなきゃいかんのや」

大川は似非関西弁で言った。いつも似非関西弁を使う。なぜなのかは誰も訊こうともしない。本人が良さそうだからいいのだろう。

小山は何食わぬ顔でゲームの説明を続ける。

「告っただけでは不十分だな。うん、そうだ、告ってデートに誘う、そこまですよう。デートの場所は何処がいいかな。セントラルタワーで景色を見て、食事をして、そのあとは流れっという感じかな。それでいいだろう」

「いいだろうって、おま……」

紳は絶句した。

唐突に思いがけないことを言うのは小山の得意技だ。友達ながら、何を考えているのか、たまに分からない。確かに朝に萌映の話をしたし、そのとき小山は何か思いついたような笑みを浮かべていたが。「そ、そいつは、おめえもジャンケンで負けたら告るんか?」

「もちろんさ」

大川の問いに小山は余裕で答える。

「いや、せやけど、さすがにそのゲームはねえやろ。ジャンケンで勝つても、告らなくてええってだけなんやろ? 金が儲かるんでもないんやろ?」

「そうだな。だけど、萌映ちゃんが誘いに乗ってきた場合、勝った二人はデート現場を目撃できるぞ。面白くないか」

「あの卑屈なブスに乗ってくるわけないやろ。きつと『あたしをかかって楽しいのかこいつ』って目で見るで。で、ふられたワシらはみんなの笑い者になるって寸法や。無理ゲーすぎるわ」

「罰ゲームとしては強力だね。たまらないね」

紳は会話を聞きながら、小山に若干の畏怖を覚えた。

毎日が退屈だという小山は、反動で生活への強力な刺激剤を求めのかもしれない。本能的にゲームやギャンブルが好きな種族なの

だと思える瞬間があった。「不真面目な高校生っぽくて格好いいじやん」みたいなノリで賭けマージャンに付き合っている紳とは、根本アティテュードの生存律が違う。

まずい、と紳は思った。食い付き方からすると、大川はゲームに乗ってしまいかもしれない。

二人は会話を続ける。

「せやけど、万一本気にされたら困るやろ。付きまとわれたりしたらウザいで」

「まあ、いいところでネタばらしをして、『はいゲームでした。面白かったね、最高だベイビー、今夜やるうぜ、ロクンロール！』でいいじゃん」

「おめえ、悪趣味やな。あんな女やが、他人ひとがあることやで。ワシは気が進まんけどなあ」

ここだと思つたので、すかさず紳も言った。

「おれも反対だ。大川の言う通り、あちらさんに迷惑が掛かる。やんないほうがいい」

もちろん、戸沢萌映の迷惑など知つたことではない。とにかくやりたくない。

紳は嫌な予感がした。第六感的に、ゲームに乗つたらやばい気がした。根拠は無いが、今朝からの流れ的に嫌な感じがするのだ。というか、池で戸沢萌映を釣り上げたこと自体、非常に悪い予兆のような気がしている。

「迷惑というなら、こつちも二人から迷惑を被っているんだけどな」

小山は揚げをムシャムシャと頬張る。

「大川が六万円。紳が三万五千元。二人に貸している計算だ。今までの賭けポーカーとか賭けマージャンの負けが溜まっているわけだが、今すぐ返す？」

「勘弁してください」

大川は手を合わせた。

「……」

紳も回答に窮した。三万五千円は高級リールと同じくらいの金だ。すぐには準備できない。

現状、三人のゲームの勝敗は、小山の一人勝ち状態だった。紳や大川がギャンブルに弱いわけではなかった。回数で言えば二人の方が勝っているくらいだ。ただ、大きなゲームで勝つのは小山のほうだった。ポーカーやマージャンが長時間に及んだ時の粘りも小山に分があった。つまり、どちらかというところ、小山の方が二人よりもギャンブルが強い」と言うのが正しかった。

負けが込んでくると現金なんか賭けなければよかったと実感するが、真剣に現金を賭けることがゲームを面白くしているのは間違いない。やっぱり賭けるのは良くない、とか言うのは敗者の言い訳に過ぎないと実感する。

「金はゆつくりでいいよ。それより、いま、楽しいゲームがやりたいただけなんだ。『萌映ちゃんに告るゲーム』をやるぞ。夏の話題作りにちようどいいや。合コンの席でも話せるぞ。夏を楽しもう」「そういえば、紳は夏までに彼女を作りたいとか言っとったわなあ」「いや、そうだけど戸沢萌映以外で頼む」

「大丈夫だよ。パン屋の子との合コンの件、櫛に頼んでいたけど、近いうちに実現できそうだ。そこで彼女を作るもよしだ」

反発する気力がなくなってきた。大川が割合乗り気なのもまずい。このエセ大阪人め。自分が吠え面かいても知らないぞ。そして、合コンと抱き合わせでゲームがついてくるような話の流れもまずい。こうして、反論の余地がだんだん消えていき、なし崩しにゲームが行われる運びになった。

ジャンケンは二度のあいこが続いた。三回目に紳は負けた。

小山の微笑と大川のガッツポーズを、心底うらやましいと思った。

「何か用」

目の前に戸沢萌映の顔がある。

「ああ、まあ」

当たり前だ。用がなければ放課後に人気ひとけの無い中庭にお前を呼び出したりするか。というかこれはネタなんだ。罰ゲームなんだよ。分かれよ。分かるわけないよな。

近くで見る戸沢萌映の顔は、まるでサッカーボールに描かれた下手な絵のようだった。紳は誤解を恐れず言いたい。こんなグロテスクなものが存在していいのかと。

距離の二乗に反比例する吐き気が襲ってくる。得体の知れないもの前で呼吸を止めるのは、人間の本能なのだろう。

今頃、小山と大川は何処かから見ているのは間違いない。中庭を指定してきたのは二人だ。たぶん駐輪場の塀の裏とかに隠れているだろう。

軽く世間話から始めよう。……と考え、紳は告白を無意味に引き伸ばそうとしている自分に気づいた。早く罰ゲームを終え、立ち去りたい。そのためにはこの怪物のような女に告白しなければならぬという屈辱。

もういい。くそ。どうにでもなれ。

「えっと、お前さあ、今朝なんで池に沈んでたんだよ？」

もう後戻りはできない。告白までの地獄の秒読みのスタートだ。「沈んでたっていうか、感触的には、水面の下ぐらいに浮いてる感じだったけど。つうか、全部沈んでたら、さすがに引っ張れなかつたと思うし。だから、まだ半分浮いてたっていうか、沈んだばかりっていう感じだったけどな。つうか、あんな所で沈んでたら危ねえだろ。顔に針が刺さったらどうすんだよ？」

どうでもいいことばかり口走った。紳はテンパっていた。そうい

えば、この顔に針が刺さっても、殆ど変化はない。

「あなた、誰？」

戸沢萌映はお岩さんのような腫れぼったい目でジトリと紳を睨んだ。初対面の相手に対してはしごくもつともな質問だ。目の高さからすると、戸沢萌映のほうが少しだけ背が高いのが分かった。1〜2センチというところだろう。すこし悔しい。ノツポ女め。

「おれは笠井紳かさいしんっていうんだよ」

渋々自己紹介した。なぜか最低限の情報しか与えたくない。

「あなたのプロフィールには興味は無いんだけど。あたしは、なんで池に沈んでたのをあなたが知ってんのかって言うってんの」

一蹴された。なんでだろう。こいつに「興味は無い」と言われるとものすごくむかつく。

「なんで知ってるもなにも、お前を釣り上げたのはおれだぞ」

「そうじゃないわ。はつきり言っただけあげるわ。『なんで、この世界で、あなたなのか』ってことなのよ」

と、戸沢萌映は言った。

はつきり言った、らしいが、何を言っているのかサッパリわからなかった。

が、次のセリフで、少女は確信を突いた。

「たぶん、クラスであたしに違和感を感じているのは、あなただけでしょ。あたしを当たり前の存在と思っっているほかの生徒たちとは違っつてことよね。それに、時間が経つても、あたしが池に沈んでいたのを忘れたわけでもない」

違和感なら、顔面偏差値的な点では、誰もが感じているだろうな。まあ、それは置いて、言われた通りだった。戸沢萌映は一聴すると精神病的な妄想じみたことを言った。普段の紳なら切り捨てるジャンルの話だが、今の紳は当事者であり、しかも事実でもあった。

「それが、どうかしたのか？」

思わず訊いた。話に乗っている自分が馬鹿くさい。

「べつつに。なんでもないわ」

戸沢萌映はブスツとした顔で言った。一層腹が立った。紳は、平常心平常心、と自分に言い聞かせる。これから告白しなければならぬ。怒りにとらわれては罰ゲームが遂行できない。

「それより、あなたこそ、あたしを呼び出して何か用？ まさか告白とか？」

戸沢萌映は嘲笑を浮かべ言った。

ブスはどんな表情をしてもブスだな。

「その、まさかだ」

紳は息を吸い、酸素を取り入れる。

一気にやっつてしまおう。もう相手の目を見てはいない。直視したら心が折れそうだ。

「今度の日曜、デートしようぜ。ここらへんだと遊ぶ場所も無いから、A駅の改札を降りた所で待ち合わせはどうだ？」

やった、言ったぞ、くそつたれ。もう怖いものはない。小山と大川が提示した条件、「好きだと声明する」「A駅待ち合わせでデートに誘う」のうち、一つはクリアした。

「何を言っているんですか？」

冷たい語調で戸沢萌映は言った。丁寧な言い回しは、わざとだろ。う。

「からかっているわけ？」

軽蔑に満ちたブスの眼差し。セリフから判断するに、自分の顔を分かつてはいるようだ。その通りだ。からかっているんだ。だが今それを明かすことはできない。ゲームだからな。

さすがに、嘘の告白は多少良心がとがめた。今のおれって鬼畜じやね？ と感じた。将来、自分たち三人組の一人ぐらいは、ヤクザやサギ師になるかもしれないと思う。

「からかっつてねえよお前が好きなんだ」

はいオツケ。条件二つ目クリア。これでいいんだろちくしょうめ。怒るなら怒れ。振るなら振れ。とにかく早く終わってくれ。

居心地が悪くて仕方がなかった。

だが、紳は解放されなかった。

戸沢萌映が質問してきた。

「あたしのことを好きだって言ったわね」

「アアイツタ」

「ふざけてるの？」

「フザケテネエヨ」

「本気なの？」

「アア」

紳は答える。棒読みもいいところだ。なにより、恥ずかしい。さらに、嘘がバレる気がして、ますます直視できない。

気恥ずかしさと冷や汗を感じた。耐えがたい沈黙の時間が流れた。

やがて、一歩、二歩、戸沢萌映が近付いて来た。平常時よりも、般若のような顔面の険しさが増していた。キレているに違いない。まもなくビンタが飛んでくるだろう。

戸沢萌映は、紳のそばで言った。

「キスしてよ」

紳は不審者のように周囲を見回した。遠くで見ているだろう小山と大川に、戸沢萌映の一言が聞こえたとは思えない。しかし、思わず指示を仰ぎたくなつた。プロンプター出て来い。当たり前だが、応答は無い。

マジか。こつくるのか。こいつ、品種改良に失敗した金魚のような顔をして、異性に興味があるのか。予想外すぎる。

「あたしのこと好きなんでしょ？」

戸沢萌映は紳を凝視した。紳はピントをぼかし、水中に居るような相手の像を目に映す。どう答えればいいんだ？ 文脈的には、「はい」って言うしかない。

詰んでいる。

紳は自分の人生が軽々と弄ばれている場面に立ち会っていた。

「罰」ゲームという言葉の意味を本当に理解した。

「ああ、まあ」

演技する自分を笑う余裕も無くなっている。脳をフルに回転させるが、なにも浮かんで来ない。もう逃れる術は無い気がする。こんな時、小山ならどうする。想像してみると、小山は動揺しそうには思えなかった。白々しく演劇を進め、しばらくしたら、白々しくタネ明かしをする。そういう気がした。あいつ、狂ってるんじゃないかね。

「好きなら、キスしてみせて。そしたら日曜日、付き合っであげるわよ」

「今、ここでか」

紳は無意味に引き延ばす。いやまで、べつに日曜日、付き合ってもらふ必要は無い。ていうか、却下したい。日曜日まで戸沢萌映の顔を見るといふのか。キスは拒否するしかない。キス自体したくないし、日曜も行きたくない。

「誰も見てないわ」

紳は確認する。

本当だ。不運にも誰も見ていない。

「早く」

戸沢萌映が言った。こいつ、せがんでいるのか？ 紳は思わず相手の目を見てしまった。

その顔は相変わらず見るに耐えなかった。しかし、顔の深い場所に埋没した小さい瞳は、一抹の、というか百抹くらいの、激しい不安感を放っていた。紳がキスを辞退して去れば、この女の「なにか」を踏みにじるだろう。それは想像に難くなかった。

こいつがブスのくせに「なにか」を期待をしていると思うと、醜い顔が何倍も醜く見えた。

ああ、めんどくさい。どうしてこんな面倒な目に遭わなきゃならない。紳は、とにかく早く、この場面を終了したかった。それにはどうしたらいいだろう。一番早いのは、キスしてしまうことだ。他に方法があるかもしれないが思いつかない。それに、めんどくさい。もう、これ以上、考えたり迷ったりするのはめんどくさい。

よくわからないが、しかたないのでキスすることにした。大丈夫だ。どうせこいつも、肉のかたまりだ。美人と同じく、肉のかたまりだ。なんとかなる。

紳は投げやりに接近した。戸沢萌映が目を閉じた。ちようどいい、というか、今しかない。小山、大川。見てるんだろ。ちゃんとネタにしるよ。おれを称えるんだ。いくぞ。このブスめ。

キスを実行した。

戸沢萌映の唇は、コンクリートのように硬かった。たぶん緊張しているんだろう。デーブキスでないだけかもしれませんが、紳は自分に言い聞かせた。そして、永劫にも思える数秒間が流れた。

「じゃあ、日曜日」

キスが終わるや否や、萌映は唐突に言い、立ち去った。

「お、おい」

紳は反射的に呼び止めた。日曜とは言ったが、具体的な時間は決まっていなかった。

だが、萌映は既に遠くを走っていた。

股関節が類人猿のものなんじゃないかと思うような、不恰好な走り方だった。

「……マジかよ」

中庭の静けさが一気に降ってきた。いや、かすかにラジオの甲子園予選が聞こえてきた。どこかの窓が開いているんだろう。うちの高校はたしか負けていた気がする。

「やっちまったな」

自己嫌悪がひどい。ここから先の見通しが全く無い。あえて言えば、黒々とした闇しか感じない。

二人が付き合っているという疑惑は、当然起こるだろう。なによりも計算外だったのは、あっちがデートの誘いに乗ってきたことだ。あまつさえ、「キスして」ときた。自分は戸沢萌映の寵愛を受けることに成功したのだろうか。

よし、切り替えて行こう！ 紳は心中で号令をかけた。バスケットで負けているチームが、タイムの時間にやる円陣のイメージだ。とりあえず、ゲームは終わった。あとはどう処理するかだ。

紳は頭を切り替え、今後どのように戸沢萌映を「切っていくか」を考え始めていた。

「おつかれやなあ」

聞きなれたエセ大阪弁が響いた。

大川と小山が立っていた。

「ホンマ、大変やったなあ」

申し訳なげなセリフとは裏腹に、大川はニタニタしていた。

「きひひっ」

小山は裏声のようなかすれた声を出し、とても軽やかに笑った。

人の落胆とか不幸感とか、ネガティブなものを主食にする悪魔みたいな声だった。

たぶん、おれと戸沢萌映が喋っている間、こいつはずっとことうい笑いを漏らしていたのだろう。

お前ら、大層楽しんだらうな。

で、今後のおれには公害処理の仕事が残ったわけなんだが。

二人の楽しみぶりと、おれの落ち込みぶりは、比べるにつけ笑いしか起こらない。人間が理解しあうことは難しい。友人間とはいえないようなものである。

「日曜日、行くからな」

二人は声を合わせて言った。来るな。暇人どもめ。

学校からの帰り道、紳は大川と小山にマシンガンのように言葉を投げた。

遅ればせながら実況、解説、恨み言、そして自分という愚かなキヤラの戯画化。

二人は、意地悪く笑いながら、面白がって聴いてくれた。

喋り続けていないと、紳は、あの馬鹿なイベントをシリアスに捉えてしまいそうだった。紳は戸沢萌映をなじり、自分を笑った。夕方でもまだ三十度はあったが、暑さを跳ね返すような勢いで愚痴を吐き出した。少しは楽になった。

学校から1.5キロほどの駅で二人と別れた。二人は電車通学なのでここまでだ。

遠い蝉の声に包まれた紳は、よろよると自転車を漕ぐのを再開した。今日はもう、気力がない。

駅から少し行くと、ポストが立っているのが見えた。

今時めずらしい、昔ながらの円筒状のポストだ。

その陰から、ポストのような赤い顔をした萌映が現れた。

紳は、つけてたのかこのブスは、と思った。

すると萌映は先回りするように言った。

「つけてないわよ」

「じゃあ、ポストに何か用でもあったわけか」

「……」

萌映は、赤い顔のまま、ふてくされた。

紳は黙って歩き出した。暑さで判断力がマヒしていた。なかば故意に無視していた。この暑い中、戸沢萌映に関わりたくもない。

「日曜日、何時？」

萌映はダッシュをかけ、紳に追いついた。

「何時でもいいけど」

紳は顔をしかめた。

「じゃあ、ちよつと遅いけど、午前九時にする」

遅いのかよ、と思わず独白する。しかも勝手に決めやがった。

「ちよつと早いから、昼ごろにしないか」

「なによ。何時でもいいって言ったじゃん。うぜえ」

うぜえじゃねえよ！ それはこっちのセリフだよ！

紳は、今更にひどい女と関わりを持ったと実感した。小山の罪は重いやわらざるを得ない。借金を帳消しにしてくれるよう掛け合ってみよう。この罰ゲームはそれほどのものである。

しばらく二人で黙って歩いた。

紳はふと、これは萌映と一緒に帰っているのだろうか、と思った。「一緒に帰っている」と意識すると、戸沢萌映と付き合っているとか、そういう概念がどうしても込み上げる。そう思うと気色悪さがゾワゾワくる。

そもそも、一緒に帰っているわけではない。たまたま方向が一緒なのか知らないが、戸沢萌映が勝手についてきているのだ。そう思い込みたいが距離が近い。大柄な隣の女の肩が、たまに紳にぶつかった。虫のように追い払えたら楽だがそうもいかない。

「あたしたち、付き合うことになるの？」

萌映は紳に訊いた。

紳は刃物を突き刺されたようなダメージを受けた。

どう答えればいいのか。「告白」したのは紳からだ。付き合わないと言われることは、まず萌映の予想には無いだろう。萌映の口調もそういうものだった。「付き合っただけあげるのはこっちだから、リードするのは当然そっち」という調子が含まれている。

付き合うわけねえだろバカ、生ゴミのポリバケツの中にも入っ  
ていやがれ。と、啖呵を切れたらどんなにいいだろう。紳は、幼少  
の頃から、周りに合わせたり流されたりする習性を身に付けてきた。  
無意識のうちに調和を大事にしてしまう。習性がストッパーとなり、  
キレることは滅多にない。

紳は適当に「あー」とか「うん」とか唸ってやりすごした。

「そうかー。あなたは特別ってわけかー。ふーん。あなたがね」

萌映は一人ぼやき、舌打ちした。

紳は萌映の言動がいちいちイラツとくる。「あなたは特別」とか、セリフ回しが芝居がかっているのが気持ち悪い。しかも意味がわからない。

紳は一つの仮説に到達する。

ひよっとして、ブスのくせに戸沢萌映はとんでもない勘違い女なんじゃないだろうか。

萌映はポケットから長方形のアルミのケースを出した。百貨で買ったような安っぽいものだ。アルミケースの蓋を開けると、中には薬のようなものがぎっしりと入っていた。カプセルもあるし、タブレットもある。色も、白や緑やピンクがあった。萌映は口の中で舌をぐちゃぐちゃとやって唾液を出し、カプセルやタブレットを二、三個口に入れ、水を使わずに飲んだ。

「これなら食えるんだ」

独り言のように言った。

萌映は歩きながら十個以上は飲んだ。

紳は全く興味が無かったので、何の薬なのかは訊かなかった。

ていうか、日曜日を前にして、すでにデート（笑）みたいになつてるじゃねえか。何の悪夢だよ。

萌映がいつまでも磁石みたいに後をついてくるので、さすがに紳も忍耐の限界に達した。

自分の家に帰るよう、言おう言おうと思っていたが、とうとう言おうと思う。

が、その時、

「おなかすいたなー」

と萌映が言った。

そしてちょうど二人は石窯パン屋の前を通過しようというところだった。クリーム色の塗り壁と、波打つ茶色や焦茶色のレンガ屋根。ポコツと立った煙突は飾りなのか知らないが、うまそうなパン生地のおいが、どこからか漂ってくる。

「なにか食べる？」

萌映は押し付けがましい疑問文を唱えた。言い方がいかにも厚かましく、「寄るんでしょ？」としか聞こえない。紳が迷っているそばから、「ああ、おなかすいたわー」と繰り返す。

なになが「おなか」だ。下剤とか除草剤でも腹に突っ込んでいやがれ。

「じゃあ、おれがなんかパン買ってくつから」

紳は萌映と一緒に店に行きたくなかった。詳しいシフトは知らないが、中には櫟棗が居る可能性がある。小山や大川は仕方ないとしても、ほかの知り合いからは、あらぬ誤解を受けたくない。

「あたしも行くー。この、苺とホイップクリームをシューサンドしたやつ、食べたい」

萌映は言った。店の前に掲示してある手書きの「できたてのパン一覧」を見て、興味を引かれたもようだ。好みがかぶっているのが判明し、紳はショックを受ける。

さらにショックだったのは、櫟棗が働いている日だったことだ。

店に入った途端ばつちり見られた。

「やあ笠井。きょうは戸沢も一緒なんだね。珍しいことだ。ゆっくり見て行ってください」

櫛棗は売り場と調理場を往復し、出来上がったパンを並べる作業をしていた。通りすがりつつ、二人にニコリと営業スマイルを置いていった。麻製のゆつたりした三角巾とチェック柄のエプロンがかわいい。完璧にチャーミングだ。

紳は櫛棗に感心した。おれはまだ見れる顔だからいいとして、隣のブスにもよく平等に営業スマイルができると思う。さすがだ生徒会長。強靱な精神力。

紳は、萌映と特別な関係でないことを説明したかったが、訊かれてもいないのに喋るのは不自然だ。早いところ買って店を出たい。貼り付くようにパンを物色する萌映から距離を置き、自分もパンを選ぶ。

と、棚の角のほうで一個だけ残っているパンがあるのに気付いた。ピンク色というか、桜色というか、目を引く色のパンだ。ラグビーボールのような楕円形をしているが、全体がドリアンのようにトゲトゲで覆われている。

なんだあれは？

一個だけあると、とりあえずトレーに載せたい誘惑にかられる。あとで戻してもいい。紳は何気なくトングを伸ばした。

カチン。トングがぶつかった。

紳の背後、ちょうど死角からトングを伸ばした客がいた。

紳は振り返った。客の姿は見えなかった。

しかし、あいかわらずトングはパンにくっついたままだ。小さい手をたどっていき、腰をひねるように振り向く。紳の胸元に、少女の顔があった。

「んむう」

大きいメガネをかけた少女だった。見たところ小学生か、せいぜい中学生になっただけだろうか。あどけない瞳が真面目に紳を見上

げた。

だが、なにより目を引くのは、もふもふとしたゴージャスなロングヘアだった。クロワツサンのようなふわふわの巻き毛はプラチナ色をしていて、光の加減で銀色にも変わった。

ほっぺたや首筋の肌は恐ろしいほど綺麗な真っ白をしていた。紳は思わずホクロを探したほどだった。そして、パツと見ではホクロは無かった。

「ぐううううう……」

少女は真剣な顔をしながら、紳を押し退けるように Tongue を伸ばした。だが、少女にとっては、紳はトーテムポールのような邪魔者だろう。少女の Tongue はこつこつとパンの表面をつつくが、しっかりと掴むには至らない。

一方、紳の Tongue は、さっきからパンをほぼ掴みかけている。

二人がパンを触ったのはほとんど同時だった。少女は眉根を寄せ、必死な目で紳を見上げていた。溶けたカラメルのような色の瞳には、だんだん涙がにじんできた。力を入れているらしいが、紙一枚くらい、パンに届かない。

紳はハツとして、Tongue から手を離し、その場をどけてやった。

このパンを独占したいわけでは全然ない。少女はすぐさま Tongue を投げ出し、飛びつくようにパンを両手で掴んだ。レジを済ませてないのにいいのだろうか。少女は愛できるようにパンを頬に押し付けた。「ありがとうっ」

笑顔で紳に首を傾けた。目も口も見事な半円状となり、メロンパンのような円満さを感じさせる。まさに喜色満面という感じだ。紳もつられてニヤリとした。子どもの笑顔というのは、相手を巻き込んでしまう自然な魅力があるのだろうか。

ついでに、少女はとても愛くるしい顔立ちでもあった。あと三年もすれば、驚くような美人になるだろう。

ところで、服のセンスは頂けない。というか奇抜すぎる。少女は、赤ピーマンと青ピーマンの着ぐるみのような、ビビッドなドレスを

着ていた。袖や裾がブワリと膨らみ、どこかの民族衣装のようでもある。なかなかお目にかかれぬファッションセンスだと思う。

「よかったわねえ、りえちゃん」

バイトの女の子が来て、少女に言った。彼女はパンを譲ったのを感謝するように紳にお辞儀した。こちらは、今まさに紳のストライクゾーンに入っている可愛い女の子である。

今度合コンがある時は、この子も来るのだろうか。楽しみすぎる。紳は胸が高鳴る。

「りえちゃんは、いつも『初恋はレモンの味メロンクリームパン』だけ買いに来るもんねー？」

「うん、よかった。この優しいおにいちゃんが譲ってくれた。わたしは、うれしい」

二人の会話が聞こえる。女って、いい歳して堂々と恥ずかしいネーミング言えるよな、と思う。

ていうか、このパンは一体どういう代物なのだろう。生地がレモンの味のメロンクリームパンなのか。それとも、メロンパンの中にレモンクリームなのか。意表をついて純粹なメロンクリームパンで初恋とかレモン味とかは単なる枕詞なのか。そんな意味不明なパンを取ろうとしたおれもおれだが。しかし、人生で一度はこのパンを買おうと紳は思った。得体の知れないものは確かめてみたい。女のスカートの中と同じである。

ところで幼……いや、少女に「おにいちゃん」と発音されるのは「まずい」と感じた。

初めて聴いたが、予想外に心地よい！ おそらく、無力な存在が頼ってくるかのような響きが、男の自尊心を刺激するのだろう。だが、こんなにしょうもない分析もないと思った。

ゴージャスな髪メガネ少女は、レジで会計を済ませ、店から出て行く。

「りえちゃん、またね」

と櫟棗たちは言っていた。

去り際に少女は振り返った。紳は、もう一回「おにいちゃん」と言わないものかと少々期待した。だが言わなかった。

店には客が頻繁に出入りし、入り口のドアに付けられた鈴は、ひっきりなしに鳴っている。その鈴の音にまぎれ、少女は立ち去った。そういえば、「りえちゃん」と呼ばれていたが、少女は日本人だろうか。もふもふとした白金色の髪は、異国人の気配を感じさせなくもなかった。

ところで、萌映の姿がなかった。

紳は萌映という文字列すら思い出さなくもなかったが、はらがへったと言っていた張本人だ。厚かましくも金を持っておらず、紳にたかるといふことも考えられる。

先にパンを買い、帰ったのだろうか。それならいいが、あまり期待はしないほうがいいと思う。帰っておらず、唐突にあの顔を見た時は、ショックがすごいだろう。

だが、店内には確実に居ないようだ。迷った末、紳は苺とホイップクリームのパンをひとつ買った。自分の食欲も勘案した結果だ。万一萌映に会ったら、「お前が食いたいって言ったんだろ」と渡してやればいい。萌映に会わなければ、自分で食おうと思う。それにしても、このパンの味については毎度文句ないが、『ストロベリー・ラブ・オン・ザ・ヒル』という相当微妙な名前はどうにかならないのか。

「ちよつと」

店から出た紳は、萌映が居ないので安堵しかけたが、背後から糊のように粘着的な独特の声を聞いた。

ああいた。

落胆し振り返るが、車の停まっていないう具置き場のようなガレージがあるだけだ。人の姿は無い。

「ちよつと、ここなんだけど」

大きな青いポリバケツの蓋が持ち上がった。生ゴミのような顔をした女が、中に居た。紳は理解不能な行動に眉をひそめかけたが、一転、吹き出してしまった。

萌映に生ゴミのバケツはお似合いだと思ったのだ。

「何をやっているんだ」

「……」

萌映は辺りを観察し、無言でノソリと立ち上がる。しかつめらしい顔をしているが、視線を下に転じるとポリバケツである。非常に滑稽だ。

突然、萌映は叫んだ。

「もう、やだよお！」

ガレージの壁によりかかり、「うえ〜」とか「ひ〜ん」とか、嗚咽を出し始める。

泣いているらしい。

紳は戸惑ったが、何もしなかったしする気もなかった。こっちに落ち度はない。なぜ急に泣くのか理解不能だ。「ひ〜ん」とかいう呻き声は、まるで馬の出産である。暑さも手伝って不快だった。ふだんはなんでもない蝉の声すら耳障りだ。

なるほど。これが「メンヘル的な一面」ということか。

だが、それが分かったからどうしろというわけだ。  
手に負えん。

「よくわかんねえけど、パン、ここ置くぞ」

泣いている萌映の足元にパンの袋を置き、紳は踵を返した。

「ちよつと」

萌映が後ろで叫んだ。

嫌だが、振り向いた。

萌映は、何か言いたげに口をぱくぱくしていた。

ふと、足元に置かれた袋を見付けると、虫のように素早くしゃがみ確保した。

やがて、

「日曜日、忘れないで、九時」

涙を拭きながら言った。

紳は、了解とも拒否ともつかない溜め息をつき、また歩き出した。帰り道、萌映の不細工な泣き顔が繰り返し浮かび、何回も地面を蹴り上げた。

紳は、だらだらとパン屋からつづく坂をのぼった。

車通りもない信号を渡る。ここから、紳の家がある宅地に入る。

登りは一段ときつくなる。とくに、家の直前にある、長いコンクリートの階段が苦しい。

ジワジワジワ、蝉の声がする。宅地の何処で鳴いているのか不思議だ。

コンクリートが暑くて眩しい。人はほとんど歩いていない。家の隙間とか側溝とかで野良猫が丸くなっている。ランニングシャツに団扇うちわを持ち、日干しになりかけといった感じのおじいさんが、なめくじ蛞蝓のようにゆっくりと歩いている。

紳は、長いコンクリートの階段を登りはじめた。道端には、町内の誰かが四季の植物を育てている花壇がある。今は、幽霊みたいに大きく育った向日葵ひまわりが並んでいた。ぎゅっと詰まった蕾の何割かは内側から割れるように開き始め、目が覚める黄色の花びらをぎらりと覗かせていた。紳は大きいパイのような花を見上げ、この前見た時は腰ぐら이었다よなあ、と思った。

疲れた。すこし立ち止まった。ふと下の景色を眺めた。ここで涼しい風でも吹いてほしいところだが吹かなかった。むしろ、うだるような熱風がもわつと吹いてきた。

そして階段の下に萌映が居た。

大きな白い棒のようなシルエツトが、かげろくに漂いながら登ってきている。

自分の目を疑う。別れたと思ったたら、なんでついてくるんだ。ふと振り返らなければよかった。

萌映は追いついて来て、紳をジーツと見た。いまだに梅雨をひきずっているような、情念に満ちた湿っぽい目だった。汗だくの脂ぎった額が光っている。

「あのね」

萌映は言った。

「あたし、家、無いんだけど」

ジトツとした目で紳を見た。

あからさまに、施しを狙っている目だった。

「おれの家にいきなり来られても、正直、困るんだが」

「あたしたち、つきあってるんだよね」

また、脅迫まがいの疑問文である。つきあっているから何でも施せというのだ。面の皮が厚いにもほどがある。

「つきあうのは、まず日曜日のデートをやって、それ以降にしないか」

と紳は言った。遠回しに振ったつもりだ。正直、関係を切れるなら、今すぐ切ってしまいたい。

「なんで。日曜じゃなく、今でいいじゃん」

萌映は真意を理解しない。こういう機微が分からないから、自分の面相を客観的に見ることもできず、厚顔無恥が極まるのであろう。というか、紳は今更突っ込むが、

「家が無いって、どういうことだよ」

まさか、本当に家が無いわけはなかるう。あれか、いきなり泊めるというわけか。男の家に泊まるための口実か。

冗談じゃねえ。お断りだ。

紳にとつて、萌映は痴女とさえ見れない。ブスという、男でも女でもない、より下層の種族だった。こういう人間は虐げられてしかるべきだ。そして、そういう感情が湧くのが仕方ないと思えるのだ。

「紳の家に泊まりたいんだけど」

紳の靴あたりを見ながら、萌映は、もじもじ言う。両手の指をこねくり回している。恥じらっているつもりだろうか。そして、前触れもなく名前を呼ばれた不快感。

「いやいや、それはやめようぜ」

紳は即答した。即答しなければ沽券に関わるという気概さえ感じ

ていた。多少怒りが込もっていたかもしれないが、紳は自分を許した。

「わかった」

さすがに望みがないと踏んだのか、萌映はポツリと言った。

「のどかわいた」

と、すぐ切り替えるのは憎たらしい。

紳の家はすぐそこである。というか、すでに斜め上に見えていた。自販機で買え、なければ公園の水でも飲め、と言いたいが、近辺には自販機も公園もない。

「あー、すごいのだかわいた」

萌映は大きな声で繰り返した。

「……うち、近くだから、お茶だけ出してやるから。そしたら、とりあえず帰れ」

「お茶いいね。お茶菓子ある？」

萌映は待つていたように食い付いてきた。

紳は枯れた向日葵のようにゲンナリした。

二階の部屋には絶対に上げず、玄関先で茶だけ出して済ませようと思っただ。

「あらあらあら、紳のお友達？ 学校のお知り会いですか？ それとも、彼女さんかしら？ まあまあまあ。どうぞあがってください、いまお茶いれるからね、あら、でもいま散らかってるんだけど、いまかたづけますから」

紳の母は、ニコニコとほていさんのような笑顔をふりまき、べらべらまくしたてた。

台所のほうから、鼻を突く生暖かい空気が流れてくる。五目寿司でも作っていたのだらう。

ていうか、今日に限ってなぜ家に居る。ショッピングセンターのパートはどうした。

「いや、ここでいいから。いま麦茶持って来るから」

紳は萌映と母の間で挙動不審になる。

「いえ彼女じゃありません。紳君が一方的にあたしに迫ってきているだけで、あたしは紳君を認めたくもりはありませんから」

萌映は淡々と答える。

本人からすれば、そういうことらしい。

思ったままを言っているのかもしれないが、もっと言いようがあるだろうと思う。体面というものを考えてほしい。心までブスなやつだと思う。

ともかく、紳は萌映を玄関に待たせ、母を台所に帰らせた。

「ちよつと」

と、太った母は言った。

「おまえ、女の子を連れて来たと思ったら、なんで、よりによってあんな……」

「ちがうんだ。話すと長くなるけど、あとでちゃんと話すからとりあえず待て。落ち着け。おれは何も落ち度は無く、恥じることもしていない」

「だってあんだ」

太った母は、しゃもじにくつついた酢飯をベロリと舐めた。やはり五目寿司だ。桶が無いのでボウルを使っている。「とにかく構うな」と二十回ぐらい繰り返すと、やっと母は納得した。紳は冷蔵庫から麦茶クーラーを出し、玄関に戻った。

「遅かったね。あたしの悪口とか言ってた？」

萌映は首をかしげ、「ふん」と軽蔑の溜め息をついた。

台所の手前のドアは閉めておいた。母との話を聞かれているはずはない。

「いちいち勘繰られちゃ堪らねえな」

紳は呟いた。よっぽど「告白ゲーム」のタネを暴露してやるうと思っただが、なんとか自制した。告白が罰ゲームだと宣言したところで、そのゲームに紳が悪ノリで参加したのは事実だ。自身の低劣さ

を晒すだけでしかない。

「飲ませて」

萌映は麦茶の入ったグラスを差し出した。

「なんでだ。おれは彼氏でも何でもないんだろ？」

紳は皮肉を言った。もちろん彼氏になりたくなどない。萌映の身勝手さに腹が立ったただけだ。

「じゃあ、いいわよ、もう帰る」

萌映は紳を罵り、玄関を開け放し、出て行った。

「おい」

紳は舌打ちし、自分も外へ出た。追いかけるつもりはなかったのに、どうして出たのかは分からない。

萌映は既に階段のたいふ先を駆け下りていた。白い小さな影がひよこひよこ揺れていた。

紳は玄関に座り込んだ。

……なんなんだよ！

色々なことがあった一日だ。萌映を釣り上げたことから始まり、いま、やっと一段落した。おぞましいイベントが目白押しであった。滝のような疲れに押し潰された。玄関から入ってくるヒグラシの聲が骨にしみた。

これでまだ日曜日もあるんだよな。あるってのか？

最悪だぜ。

日曜の朝、部屋の蒸し暑さで目を覚ましたら、すでに11時前だった。もう昼に近い。携帯電話を探すと、布団と壁のあいだに沈んでおり、八時にかけていたアラームを「誰か」が止めた形跡があった。

ああ、たしか、きょうはアレとのデート（笑）の日だったな、と紳は思い出した。ゴミの日の朝、ゴミを出し忘れたような、微妙な搔痒感そっ痒を覚える。なによりも、部屋が暑すぎるので、すかさず扇風機をつける。

紳の部屋にはエアコンは無い。エアコンを導入しても電気代はそれほど違わないと思うが、長年扇風機だけでやってきた愛着と意地がある。トランクスとタンクトップだけの格好であぐらをかき、扇風機のぬるい空気を浴びる。この温風を冬に回すような技術は発明されないものか。

さて、どうすっかなあ。

待ち合わせ（笑）は九時とかなかったが、もう過ぎている。今からでも行ったほうがいいだろうか。どうせ大遅刻なのだから行くのをやめるか。心底、どっちでもよかった。だが、どっちかに決めなければ、いつまでも寝起きの醜怪な格好であぐらをかいていることになる。

「これが美人なら、行ったよね」

紳はひとりごちた。人間の本能にまつわる冷徹な事実を確認したのだ。相手が思わず背筋の伸びるような美人なら、寝坊すらしていないだろう。

正直、もはやほぼ行く気はない。今更行ったら、萌映にねちねちとなじられるだろう。そういえば、あのブスツとした顔が嘲笑以外で笑ったことは一度も無い。根拠は無いが、萌映は二時間が過ぎた今も、A駅の改札で待っている気がした。思わず紳は、ユルめのチ

ユニツクとか、涼しげなワンピースとか、私服姿の萌映を想像した。胃液が口から出そうになった。朝から危険な想像をしてしまった。

「まあ、おれが寝坊したのは、ちよっと……」

紳は立ち上がった。

窓辺に行き、なにげなくレースのカーテンを開けると、真下から萌映が見上げていた。

「うげえ!!」

紳は叫んだ。インパクトありすぎる不意打ちだ。小山や大川が見ていたら、取り乱した紳を見て笑うだろう。それでも、叫ばざるを得なかった。

「待つても来ないから、来たわよ」

萌映は不機嫌そうに言った。スタイル的には痩せているはずだが、顔はまるで膨らんだフグがオタフク風邪をひいたかのような。これが平常の顔なのだから手の施しようがない。

もう、この世に存在している間じゅう、モザイクをかけてほしい。

せつかくだから、というか、萌映が「デートだから町まで行くんでしょ」と言うから、町に出ないと駄目な空気になった。なにより、二日連続で家まで来られてはうんざりであった。

紳は適当な古着のシャツを羽織り、下に降りて行った。

「で、どこにいくんだ」

「どこでもいいんじゃない。どうせどこでも同じようなもんでしょ」  
萌映は蛸のような口をしてばやいた。

町に行くと言いながら、どこでもいいと言う。あいかわらず紳に丸投げだ。

とりあえず、紳は町に向かう電車に萌映を乗せることにした。休日在地元にだらだらしては、誰に見られるか分からない。この、新たに所持してしまった壮大な恥を、どこかに運搬しなければならぬ。

紳は切符を買った。萌映が金を持っていないなら出さなければならぬと思ひ、ちらと萌映を見たら、薄汚れた小銭入れから券売機に金を投入していた。金は多少は持っているらしい。自分の茶色の小銭入れと少し似ているのがイラツときた。

町に向かう電車はすいていた。が、紳はわざと立った。萌映と隣同士で座るのが嫌だったからだ。上に冷房の吹き出し口があり、風が冷たかった。隣に立っている萌映からは微妙な臭いがした。泥と汗の溶け合った臭いだった。萌映は学校に居る時の服装のままだった。スカートはエプロンのように長く履き、長袖のブラウスを腕まくりして、七分袖にして着ていた。ブラウスは何となくすんだ感じがする。ほかに服が無いのだろうか？ 腕や額は玉の汗で濡れ、しきりに袖で汗を拭いている。顔色は青白かった。自律神経の調整がうまくいっていないようだ。

紳と萌映はA駅の改札を出た。

休日だけあって、パチンコ玉のように人間がひしめいている。紳は喧騒の中に紛れられることにホツとした。けれど、万一誰かに見られたらどうしようと恐れてもいた。夏らしく、まわりの人間はカラフルで露出の多い服を着ていたが、紳は自分の真上だけ梅雨の湿り気が残っている気がした。

デートと言っても、どこに行けばいいか思いつかない。萌映が相手のため、デートプランを練るモチベーションも蝋燭一本分くらいしか燃えていない。

昼飯は食ったのか、と訊いてみようかと思ったがやめた。仮にもデート（笑）となれば、牛丼屋とか立ち食いそば屋でワンコインというわけにはいくまい。カップル向きの、ちょっとしたオシャレな店でくつろぎのヒトトキ（笑）、ということになる。つまり萌映と差し向かいになる可能性が高い。食欲もなくなるうというものだ。

紳は迷ったが、萌映のために迷うのは腹立たしいので早く行く場所を決めたかった。すると、アウトレットモールの存在を思い出した。いろんなブランドの店が集まっている、お子様向けの盛り場といった感じのエリアだ。幸か不幸か飲食店が集まっている建物もあったはずだ。ちょっととした遊園地のかわりにもなるだろう。

紳はアウトレットモールで時間を経過させることに決めた。一番の理由は、駅から連絡通路一本で行けたからだ。

アウトレットモールの周囲は、手入れされた植え込みと、いかめしい鉄柵で囲まれていた。入り口には写真撮影ポイントであろう大きな門があり、店が集まっている棟は西洋建築風に統一されていた。紳の記憶では、売っているものによって建物が分かれていたはずだ。生活雑貨を売る棟、スポーツ用品を売る棟、高級ブランドの棟、そして食事をする棟などだ。それぞれの建物は空中回廊でつながれ、

集まった人間たちがオートメーションのように回廊をうろついていた。

萌映は、入り口の門の時点で、なぜか立ち竦んでいた。門の大きさに圧倒されている様子だ。紳は「キメエ」と思った。初めてラブホテルに入る女でもあるまいし。まあ、自分も入った経験は無いけれど。

紳は早く時間が過ぎることだけを願いながら、園内をぶらぶら見て回った。あっちを見れば値札やPOP、こっちを見れば服屋の店員が客引きしている。過剰な照明が建物の白い壁に反射してまぶしい。非日常感を演出する一手であろう石畳も、歩いていると膝が痛い。

こつという場所は美女と来るべきだとしみじみ思った。

紳は隣に居る忌まわしいモノをつとめて見ないようにした。だが、見ないようにしても、モノが消えてくれるわけではない。紳は時間が経つほどに自分の活力が奪われる感じがした。

萌映は実につまらなそうだった。最初の数分こそ、ウィンドウの向こうに展示されたブランドの服を見て回ったりしていたが、すぐ行動をやめた。飽きたらしい。

買いたいものは無いのかと訊いても「別に無い」と言い、あつちの建物に行くかと訊いても「行きたくない」と言い、結局「もういい」とか言って中庭のベンチに座ってしまった。わがままな子どもみたいだ。しかもブスな子どもというわけだ。

紳はベンチの前で立っていた。隣に腰掛けたくないのもある。

ほとんど匙を投げる気分になってきた。

「お前、なんかやりたいこととか、行きたい場所とか、無いのか」  
答えを期待せずに訊く。

「……」

萌映は黙っていた。

紳はさすがに苛立った。「シカトかよ」と、わざと聞こえるように言った。

「……ハア」

萌映は溜め息をついた。

「あのね」

唐突に言い、紳の顔を見た。

「なんだよ」

紳は訊き返す。

やっぱりおぞましい顔だな。

異常に蒼白な顔面。よどんでキラキラした、有害物質の池のような目。左目に泣きぼくろがある。……って、余計な細部に気付くじゃない、おれ。

だが、次に萌映が言った言葉で、紳の頭の中は真っ白になった。

「あたしはね、違う世界の住人なの！ まちがってこの世界に来てるの！ だから、戻りたいんだよね。帰りたいんだよ。いつまでもこんな世界に居るわけにはいかないのよ」

「おまえ、なに言ってるんだ？」

紳は首をかしげ、結構強い口調で言った。そういう話は、もう、するな。そう思った。強く思った。

世界、とか言い出しやがった。

ふたたび萌映のメンヘルな性格が顔を出したらしい。しかも、たちが悪いことに、やや宗教がかった雰囲気を感じなくもない。紳は自宅に来た宗教勧誘員の相手をしたことがあるが、追いつ返すのに一時間くらいかかった。この手の人間の扱いは大変なのだ。

なにより、単純に、萌映の話は全然説得力がなかった。

だが萌映は、紳が訊いてもいないのに、勝手に喋りだした。

「あたしは、気付いたら、この世界に居た。どろどろして、もやもやして、はつきりしない場所。それがあの池の中だった。おかしな場所に来たと思ったら、まもなく、あなたに釣り上げられた。そして、意識がハッキリしてくるにつれて、あたしの頭には情報がどんどん流れてきて、いろいろなことに瞬間的に目覚めた。だけど、それは最悪の目覚めだった」

萌映はべらべらと喋った。中庭を歩いている客がしばしば振り返った。おいやめると突っ込む隙もなく、萌映は喋り続ける。息継ぎもせず、まるで溺れているように、喋った。

「あたしは突然、この世界に来た。時空のはざまから落とされてしまった。まるで、宴会の途中でトイレに行ったら、扉の向こうは崖で、そこから落ちてしまったように。理由は分からない。でも、あたしは帰ることはできなくなり、この世界で暮らさなければならなくなつた。この世界はひどいよね。あたしが今まで居た世界とは別物だよ。なにもかもおかしすぎる。なんていう劣悪な世界なの？」

「あたしが今まで居たIWとは完全に分断されているわ」

「ちよ、ちよっと待て」

紳は耐え切れず嘴を入れた。もちろん、ちよつと待ったのち、再び話してほしくはない。完全に話についていけない。なにやらIWとかいう用語的なものまで出てきている。

「あたしは、来た瞬間にこの世界は最悪な世界だと分かった。言うなれば、この世界はEWエクスペリメンタルワールドだわ。すべてが適当で、しかも不快だわ。不自由だし、不適材・不適所な場所だわ。この錆を吸い込んでいるような劣化した空気はなんなの？　なんて汚れた世界よ。こんな世界で価値があることと言えば、懐かしいIWの空気に思いを馳せることぐらいしかないに決まっているわね。溜め息をついても、ついても、ぜんぜんきりが無い！」

また道行く人々が振り返る。紳はもはや、石柱のように硬直しているほかない。

「さてよ、宴会だと？」

「少し引つ掛かる。」

「たぶん、ものたたとえばで言ったのだと思うが、一応訊いてみる。話を逸らせるかもしれない。」

「おまえ、宴会と言ったが、高校生のくせに酒を飲んでいるのか？　「違うわよこの世界では飲んでないわよ。IWではあたしは立派な大人だった。いえ、子供でもあつたし、時には空想上の生物でさえあつたわ。それは憶えてるわ。記憶の深い所にある。IWでの人間は必ずしも肉体を持っていないのよ。だって、好きな時に、好きな肉体に入れるんだから。肉体なんて、希望する性質や能力によって脱ぎ着するものなの」

「ああ、もういい、わかつたから、しらねえけど」

「それが、なによ！　この低級なEWじゃあ、なんて結び付きが強いわけ？　一個の肉体からは離れられなくて、こんなんじゃ、にっちもさつちもいかにないじゃない。『肉体レセプター』の縛りが強すぎるんだわ。EWの有害情報が一日じゅう脳に流れてくるわ。本当に不自由だよ。IWの情報が、どんどん、頭から離れちゃうよう」「まずいな」

紳は舌打ちとともに呟く。

「いかん。完全に、メンヘル気質のド真ん中がパカッと割れ、不可視なキチガイ物質が飛散している。突然暴走するから困るんだ。というか、もう暴走とか生易しいレベルじゃない気がする。」

「みて、各種、ココロの薬。この世界に來た時から準備されてたんだ」

萌映はポケットから百均のアルミケースを見せた。振ってみせ、ジャラジャラと音を出す。

「これを食べてないと、息もできないわ。あなたはよく普通に呼吸して普通に生きてるよね。狂ってるんじゃないの」

鼻で嗤った。

この笑顔がまた、パンの焼き崩れのように不細工であった。

紳は、心から疲れた。

「ああ、なんていうか、いろいろと訊きたいことはあるが、まあ別に訊こうとは思わねえが、場所を移るか。いつまでもここに居てもグダグダだからな。ちょっとややこしくなってきたんで、整理の意味でもな」

「生理の意味？ 不潔な男だね」

萌映は嫌らしく笑い、立ち上がった。

紳は一瞬意味が分からなかったが、遅れて気付いた。だが言い返す余力はもはや無い。セクハラっていうか、女の立場を利用したパワハラか？ しょうがねえと言っしかない。

そもそも、ブス自体がハラスメントだからだ。

萌映は、アルミケースを傾け、薬をラッパ飲みしていた。

半分死んだように歩きながら、紳は、萌映の話を脳内で検討した。検討したくはなかった。だが、萌映がああ顔面で必死に力説したので、否応なく頭に残り、フラッシュバックしてしまったのだ。

萌映の話には、一応の一貫性はあると思ったが、具体性と現実性

が全く感じられなかった。ただの絵空事、論理ゲームだと思った。

だから、おれは、どう応答すればいいのか。

頭のおかしいブスが即興で語った夢想としては、綻びが無い程度に作り込まれているとでも言ってやればいいのか。

てか、わけわかんねえし。

「すげえ不快だ」と紳は感じた。

何処に行くかは決まっていなかったが、アウトレットモールを出ると、駅を挟み逆方向に高いビルが見えた。

まるで一枚絵のような現実感の無い大きさ。

あれはセントラルタワーだ。45階建て、190メートル。青っぽい鼠色に輝く駅前のランドマークである。

一昔前、自治体が中心となり、駅前の開発計画の目玉として建てた。市民が知ったら目玉が飛び出るくらいの税金が投入されたそうだ。当時はエレベーターの速度や耐震性の高さが話題になっていた。ちなみに、一度も目立った地震には襲われず、自慢の耐震性を示す機会はやってきていない。

ビルの中には、展望台や飲食店のフロアがあるほか、市民が利用できるイベントホール、会社やクリニック、予備校、本屋や服屋も入っている。

マイナーなデートスポットの一つでもある、らしい。

行くところもないので、紳は足をセントラルタワーへと向けた。罰ゲームの時、小山が口にした仮想のデートプランで挙げられた場所でもある。行ったことはないが、空中楼阁のように堂々と聳えているので、まずは迷わないだろう。太陽は冬の時の百倍ぐらいの明かりで真上から照らしている。空気がうだる。そういえばおれは独自性がねえなあ、と紳は思った。雑誌に載るような小粋なデートスポット（笑）は考え付かず、結局、小山の提示したプランに沿っている自分が居る。もっとも、萌映と一緒に回るスポットを考える必要なんてないのだが、彼女ができた時も思い付かなかったらさすがにまずい。

「あああ、暑いわね」

萌映は、リボンの無いだらしない胸元から手を入れ、ぼりぼりとブラウスの中を掻いた。色気も何も無い。むしろ、グロ気だ。ビシ

ヨビシヨの額から瞼へと汗が垂れ、お岩さんのような目が無残なほどに細くなる。

途中、汚れた裏路地に迷い込んだ。飲み屋のシャッターが両側に並んでいる。大きなデパートの影となっていたし、一帯が屋根で覆われており、太陽は当たらなかった。

路地のコンクリートは、シミやツバだらけだ。犬のフンとか、猫の餌の食べ残しとか、なぜか鳩の羽根なども落ちている。

萌映はそういう様子を見て顔をしかめた。そして自分も、粘度の高い白いツバを吐き出した。で、また顔をしかめた。

「最悪よこの世界。最低よ。生ゴミ袋を引つかき回して皿にあけたような世界ね」

お前がそれを言うか。紳は寒気がするほど感心した。

萌映の歩き方は、あいかわらずグラグラしていた。頻繁に体が接触する。まっすぐ歩くバランス感覚が無いのだろうか。紳は何とか自然に萌映との間隔をあげようとするが、そのたびに引力のように萌映が擦り寄ってくるのだ。「来るな」と大声で言うわけにもいかず、ストレスばかりがたまった。心に立った鳥肌を懸命になだめる。

「のどかわいた」

「なんか」

買えばいいだろ、自販機で。

そう言いかけたが、さすがに飲み込んだ。

「なんか飯でも食うか、じゃあ」

「水が飲みたい」

「わかった」

紳はものすごい適当に返事をしている。ほぼ脳を使っていない。まじめにコミュニケーションしても、いちいちムカつくだけだ。

セントラルタワーに着いた。

何枚もあるドアを、たくさん人間が出入りしている。

大きな吹き抜けのエントランス。それなりに居る人の流れに沿いつつ、歩いてみる。

向こうは一段と明るい。本屋があるのが見えた。人がいっぱい居て、本を立ち読みしている。

「本屋があるんだね」

萌映は呟いた。

紳は、このビルの構造はよくわからない。というか来たのは初めてだ。

花崗岩の立派な階段があったので登ってみた。二階に上がると、海外資本のコーヒーショップが見えた。

「コーヒー屋があるね、入ろう」

萌映が持ち掛けた。「カフェ」とか言ってみたらどうだ。言ったら言っただでイラツとするけどな。

「めしを食うんじゃないのか？」

「聞いてないんだね。ごはんの前に水が飲みたいって言わなかった？」

紳は事実を指摘されたので言い返せなかった。たしかにそう言っていた。それより、このあとにめしを食うということは、二軒回ることになるわけで、面倒くささが増す。ウンザリだ。

「お水を五つください」

いきなり萌映は引く注文を繰り返した。

「Lサイズのグラスで」

続けざまに補足。紳は他人のふりをしたい。消え入るような声で、萌映の隣でアイスコーヒーを頼む。

紳にとって不運にも、窓際のソファの席があいていた。大きな一枚ガラスが何枚も連なり、駅前がきれいに見渡せる。萌映はいち早く座り、おしぼりで顔をゴシゴシと磨いた。

「あのさあ、飲ませて」

「いきなり何を言うんだ」

さすがに声に出る。

水滴の滴る氷水のグラスを、萌映が差し出している。

またか。家に来た時も同じことを言っていた。そんなに飲ませて欲しいのか。

それなら、こっちも、同じくらい飲ませてやりたくない。

「あたし、この世界に来てから、もう三日、水も飲んでいない」

「またその、世界とかいう話かよっ。何なんだ？」

紳は叱るように言った。公共の空間で非常識な話をしないでほしい。

「あたしは、この世界では、自発的に飲食する能力を与えられていない、……の」

「だから、何言ってるんだよ」

「飲ませてくれないと飲めないって言ってるの！」

萌映は叫んだ。

「自分でも、やってみた、けど、ダメなのよ。食べたり飲んだりしても、口に入っていないの。全部こぼれちゃうの。池の水さえ、飲めなかった」

萌映は力無くグラスをテーブルに置く。

腕が震えている。

顔は青白い、いや、通り越して青黒い。

そつえば、声も震えていた。

まさか本当なのかと、紳は一瞬思った。

いや、あるわけない。嘘っぱちだ。勝手な設定の檻に自分を閉じ込め、同情を買おうとしているのだ。メンヘラーというのは、そういうものである。

「お前、薬は普通に飲んでいたけどな」

エクスペリメンタルワールド

「薬は食べれるの。これも、あたしを苦しめようとするEWの策略なんだろうね。だって、この下等な世界では薬がないとわたしは自意識を保てないもの。自意識を持たない発狂した人間には、世界の苦しさを感じさせてやることもできない。だから薬は飲むように

させて、すっかり意識は持てるように仕向けてる。でも、食べ物や飲み物はムリ。なんとなく、このEWに来た時から、そういう『習性』は分かっていたわ。やってみたら、やっぱり飲食はできなかった」

「お前、拒食症か？」

「ちがうっていつてるでしょう！」

萌映はまた叫び、咳き込んだ。

「わかんないの？ 『習性』だって言ってるじゃん。べつに不思議じゃないでしょ。虫が飛び方を教わったり、魚が泳ぎ方を習ったりするわけ？ 虫は二足歩行することもなし、魚が陸に上がることもないよ。できることとできないことなんて、生まれつき弁えているのよ。それと同じなの。どうせ、このEWは下等で劣等で単純な世界なんだから、あたしのプログラムを飲食できないように記述することは簡単に決まっているわよ」

「お前、何を言ってるんだ」

紳は自分が馬鹿に思えてきた。「何言ってるんだ」ばかり繰り返している。

「さつきから、世界だの、『習性』だの、わけがわからねえよ」

紳は苛立ち、自分の膝を叩いた。まず意味不明な話をやめる。それができないなら、せめてこっちに分かる言葉を使え。話が通じない相手に対し、怒るような祈るような気持ちだ。

「なんで、EWとIWのことが、分からないのよ。だから、この世界は、所詮、EWなのよ……！」

萌映は呟いた。もはや理屈すら無い。まるで鳴き声だ。

ぐったりと椅子に背を預けた。だいぶ弱っているようだ。

さすがに水を摂取したほうがいいような気がする。

しかし萌映は、飲ませなければ飲めない、と言っ。それはできない。飲ませるわけには、まだいかない。言っていることが、何もかも、納得できない。

徐々に話題をずらしていく意図で、紳は萌映の意味不明な用語に

ついて訊いてみる。

「お前が言うには、この世界？が、EWとかいうんだったな。それじゃあ、IWっていうのは、いったい何だ？」

「あたしが居た世界よ……。最高の世界だったなあ」

「IWってのは、何の略なんだ？」

「教える必要ない。IWの世界観が汚れる」

萌映は軽蔑し切って言った。外観的には歩く汚物のような萌映から「汚れる」と言われるとはお笑いである。だが、あまりにもギスギスしているし、かつグダグダなので、笑う気力すら無かった。もう勝手に何とでも言えよと思う。紳はアイスコーヒーのグラスをジャラジャラと乱暴にまぜた。

ここで、紳はある意味観念したように、考えを切り替えた。

もう、めんどろくさいので、表面では萌映の話をつ分かったことにしてやるうと思ったのだ。

口先だけでハイハイ言っていれば、ギスギスしないし、こっちが苛立つことも少ないだろう。

ブスと喧嘩などすることほど非生産的なことはない。

いつもニコニコしているが実はあまり聞いていない小山あたりを見習うのだ。風のように受け流す訓練だ。そう思えばいい。ハイハイ、ハイハイと発音すればいいんだ。

そうすることにしよう。

「早く飲ませてよ」

「ハイハイ」

ん？ ちょっとまで。

迂闊だった。発音練習のつもりで言ったら、うっかり承諾しちゃったじゃないか。

くそつたれ。

萌映がアヒルのような口を開けている。

紳は、なるべく見ないように、グラスを相手の口に押し当てた。

グラスを傾け、中身を流し込む。ちらりと横目で見る。萌映は貪っている。まるで食道が太い一本のストローのように、そのまま胃に落ちて行っている。勢い余って、わきから水がもれる。ソファにこぼれる。萌映は小さい目を剥き、今生の最後の飲み物のように飲んだ。グラスは五つとも空になった。

ハアーツ……

深く、萌映は溜め息をついた。

すぐにキツと顔を上げ、

「で、分かったわね？ あたしがIWからこの世界に来てしまったことは」

「ああ、はい、そうだな」

「本当に分かったんでしょね」

「分かったから」

まともにお前の相手をして意味がないってことがな。

「それなら、いい」

萌映は立ち上がった。

水分を補給し、ここでの用事は済んだらしい。

「おなががすいた。ごはん食べにいこう」

「あー」

紳はレジに向かう。萌映は影法師のように紳にピッタリとついてきたが、財布すら出そうとはしなかった。金を払えと催促するのも浅ましい気がして、紳は押し黙り、自分の財布を出した。

「あ、ちよつと待って。この、苺が載ってるチョコケーキ、持ち帰りたいな」

萌映はレジの脇にある洋菓子のショーケースを指差し、「持ち帰

りで」と店員にただちに指示した。紳は啞然としたがどうにもならなかった。

店を出るとラウンジになっていて、ビル全体の案内板があった。「つぎはどこいくの？ エレベーターで上にのぼるの？ あたし高い所で外を見ながら食べたい」

萌映は案内板を眺め饒舌である。水を飲んで機嫌が良くなったのか。

この女が機嫌がいいのは初めてだな、どうでもいいことだが、と紳は呟いた。だが、もともと紳は気分屋が大嫌いだ。今までの合コンでは、往々にして、ブスな女ほど気分屋だったからだ。気分屋でも許されるのは美人だけだ。

「たべさせてよ」

萌映は店から渡された箱を開け、ケーキの側面のフィルムを持ち、紳の前に差し出した。

紳はイラツとした。案内板を見ているところだ。

「めしの前にケーキかよ」

「あたしはこの三日間にも食べてなかったのよ。おなががすいてるの。食べたいの」

「チツ」

「うわー、チツとか、むかつくわー」

紳は怒りを抑え、黙ってフィルムをはがす。ここではなく女子トイレとかでやるべき行為だと思う。赤ん坊のおむつ換えと変わらない。女子トイレに入るわけにはいけないので、素早くやってしまおう。

こいつと関わる時は表面上は黙るのが大事だと学習した。

要は、ブスと関わる最もましなやりかたとは、関わる時間を最低限に留めることなのだ。ハイハイと聞いているのが、一番早く終わる。

紳は萌映にチョコレートケーキを食わせた。ポリバケツとか、生ゴミから肥料を作る機械とか、そういうものに食べ物を押し込む感

覚だ。萌映の方は見ない。ムシャムシャという感触が手に伝わってくる。……ふう、そろそろ終わりか？

「これあげる」

萌映が言った。

「食事介助してもらった駄賃」

萌映は苺をつまみ、紳に渡してきた。チョコケーキの上に載っていたやつだ。

紳は、そのままポケットに入れ、あとで捨てたかった。萌映が触った物は食べたくなかった。

萌映は口のまわりのチョコレートを舐め、紳が苺を食べるのを見ている。

食欲よりも吐き気がやばい。

紳は覚悟を決め、息を止めて苺を口に入れ、一気に飲み込んだ。

「展望台行きたいなー。だけどやっぱり最初はごはんだなー。どこにしようかなー。あつ、43階に中華料理の店があるじゃん。いいじゃん。ここにしよう」

「好きなところにしろ」

紳は上の空でぼやいた。脳の中が不味さまずでいっぱいだ。苺の味なんかしない。戸沢萌映という概念の味がした。気が遠くなりかけた。店を決めたなら好都合だ。なんの料理でもいいから早く終わろうじゃないか。

「また介助してもらおうつと」

遠く、エレベーターを待っている萌映の声がした。ああ、そうだった。というか、介助って、本当にネタではないのか。いつまで引っ張るんだろうか。面白くないからやめろよ。

いや、だが、メンヘラーには思い込みこそ真実なのかもしれない。手首を切ったりするメンヘラーが居るが、あれもよっぽど強い思い込みが無ければできない。その意味では、ネタではなく本気なのだ。紳は亀のような足取りでエレベーターに向かった。

そして、ふと気付いた。

すっかり萌映に引つ張り回されている自分に。  
相手にするつもりもなかったのに、強制的に相手をさせられていた。

女は計算のようにはいかないうだ。たとえブスであつてもだ。そして、ブスだから余計に腹に据えかねるのだった。紳は、触れるだけで明かりがつくエレベーターのボタンを押した。なかなか来ない。二階まで来るのに何分かかるんだ。

十人近い客で賑わっているエレベーターに乗り、一気にビルの上方にのぼった。

紳と萌映は中華料理店のある43階で降りた。ほかの三分の二ぐらいの客は乗ったままだった。45階の展望台に行くのが目当てだろう。

中華料理屋は、いかめしい外観だった。黒い大きい扉に、金の崩し文字で店の名前が書かれてあつた。入り口には椅子が並べてあり、座って待っている客も居た。観光案内の本を持った人も居たりして、意外と有名な店なのかもしれない。

二人は五分くらいで中に案内された。今度も窓際の席。下界をばつちり見渡せる。無駄に運がいい。

「意外と高いビルね。こういう『見下ろす感じ』、ちょっと懐かしいわね。EWではいつも味わっていたものだわ。けど、EWの景色って最悪ね。ごみごみしてるし、虫の巣が集まっているみたい」

萌映は、店員から渡されたおしぼりで手をゴシゴシと拭きながら、窓の外を見ている。チラリと横目で紳を見たりするが、紳は見えないようにした。ココロの薬を飲んでいる奴の世迷い言に付き合う気はない。

紳はメニューを見る。漢字の料理名が羅列され、驚くような値段がついていた。尻ポケットの財布に思わず手をやった。一応お金はあるだけ持って来たが、何品頼めるだろうか。

「このエビソバ。あとエビチリ。水ギョーザ」

萌映は次々と料理を決める。日本語でメニューを言えるのは、漢

字の下に日本名が書いてあるからだ。

「お前、金あんのか？」

そう訊くと、萌映は意外そうな顔をした。

「あるよほら、見る？ こっちで気付いた時、スカートのポケットの中に入ってたの。食べ物も飲み物も意味ないから、ほとんど使う機会が無いだけ」

例の薄汚れた小銭入れを見せる。

「ああ、もういい、しまつていいから」

いくらあるのか知らないが、そんなに持つてはいないだろう。それに、萌映の言動的に、当然のように紳に払わせることもあり得る。最悪、こっちで全部持つ覚悟をしなければならぬ。

「さて。場所を変えたから話の続きをする」

萌映は改まり、テーブルに両手を置いた。

話の続きをするとか、断言かよ。もういいよ。

紳は無言で窓を見る。

「つまらないものね。この世界の行事は。これがデートっていうわけ？ EWの人間達は、こういうことをして満足する生物なの？

……くだらない。くつだらぬ。でも、まんざらでもなさそうだよ。ここに居る人達の顔を見ると、えへらえへらと、脳が溶け切っているような締まらない顔付きをしているものね。もちろんあなたもその一人だけだね。みんな溶けているわ。ただのゴミよ。カスの集まりよ」

と、大声で演説モード突入。「わー」と紳は慌て、身を乗り出し、萌映を制止する。

「おい、もっと音量をしばってくれ。頼むから」

小声で願う。

「……気が小さいわね。そうやってまわりのことばかり気にするから、足元も見えないのよ。気が付かないうちに足が溶けて幽霊みたいになつてるじゃないの」

思わず紳は下を見た。もちろん足はちゃんとあった。なぜか見て

しまった。

「あんたたち、こんな世界で暮らしてるのに、誰も不思議に思わないんだね。なんで『で？』って思わないの？ あたし不思議」

「……？」

紳は何も言わなかった。話の意味が分からなかったからだ。

が、とりあえず、波風は立てない。

はーっ。萌映は溜め息をつき、苛立っているように腕を組み替える。

「あたしね」

萌映は言葉を切り、遠い目で窓の外を眺めた。いや、簡単に遠い目と言うようなものではなかったかもしれない。遠いというより、半分死んでいるような濁った目だった。末期の老人のような目だ。

「あたし、こんな世界があるなんて、ついぞ今まで一回も考えたこともなかった。EWに來なかつたら、絶対にこれからも、こんな世界の存在自体、考えなかつた。こんな世界のこと、考えるのも嫌だ。でもこの世界に居る限り、あたし……。あたし、は……」

息が荒くなり、呼吸が速くなる。吸い上げるような異常な息。過

呼吸の発作だ。青い顔で、震える唇で、呟く。

「あたしは永遠に帰れないのかな。死んだら、IWに帰れるのかな。死ぬの怖いよう。死にたくないよ」

「……何の話だ」

紳は吐き捨てるように呟いた。なぜか、萌映のこういふ話を聴くと、心の奥の襷が剥がされるような不快な疼きを感じた。

ちよつとごめん、お薬、トイレ、と言い、萌映は席を立った。ハア、ハア、と乱れる息で、ふらふらと歩いて行った。

……何なんだ。

紳は腕を組み、ハーツと溜め息をついた。

萌映と同じことをしている自分に気付いた。

十五分ほどして、萌映は席に戻ってきた。  
テーブルの上では、来たばかりのエビソバや水ギョーザが湯気をたてている。

萌映は別人のように落ち着きを取り戻していた。掻いていた汗は引き、ブス特有のふてぶてしい微笑さえ浮かんでいた。「お薬」を服用してきたのだろう。紳は地味に安心するところであるが、あいかわらず地雷を懐に抱えたような気分には変わらない。

「あ、料理きてる。たべよう。のびちやう」  
おれのはまだきてないぞ。内心で呟く。どうせ言っても無駄だろう。

このメンヘラーは徹頭徹尾自分のセカイしか関心がないのだ。

萌映は黙って紳に箸を差し出す。ほらな。てか、この衆人環視のレストランでも介助しろというのか。そこまで曲げられない「ジブンのルール」がどうやれば出来るのか、完全に紳は理解できない。露骨にイヤな顔を試みるが、萌映は料理が来たことでご機嫌の様子だ。ビー玉みたいな小さい目をクリクリさせ、カラカラと快活な顔をしている。どれぐらい薬を飲んだのか。飲み合わせの禁忌を犯したのではないか。今までにないような興奮<sup>ドライヴ</sup>具合だ。

「どうしたの、具合悪いの、しわ寄ってるよ」

萌映は二本の指でハサミの真似をし、紳の眉間を触った。

さわんな！ だしぬけに、何しやがる！

ああ、しまった、見ないように決めていたのに、うっかりこいつの顔を見ちゃった。

「アーン」

「言いながら口を開けるな。あと、また言うが、声を絞れ。そうしないと帰る」

紳はピシリと言った。

萌映はジワリと涙ぐんだ。ふてくされた目で紳に抗議を示す。

「……わかつたわよ。はやくして。いま食べておかないと、背に腹は変えられないし」

萌映は黙って口を開けた。

紳にとつて業苦の時間がスタートした。当然周囲からは観察の的になった。二人の若者が食べさせ合っていたら気になるものである。実は紳が一方的に介助していただけだが、恥と緊張で、肩がコンクリート化したような気分だった。井から萌映の口へ、肅々と箸を動かした。店員が白い目をして何回二人のテーブルを通り過ぎたことか。

「でさー、あたし、心残りなのよね。IWのこと。あ、勘違いしないで。もちろん帰ることを諦めたわけじゃないよ。あたしは帰れるわ。帰れるに決まってる。帰る帰る帰る。でも、EWに居ると、気が気じゃないのよ。あたしはIWに思い残していることがあるんだよ」

唐突だった。

エビソバの最後の一口が終わった途端、萌映は喋りだした。だが紳は慣れつつあった。「ああ」「うん」を駆使して聞き流そう。

「あたしは、IWでは別のキャラだったの。こんな、あなたなんかと時間を潰すような、低劣な存在じゃなかった。ねえ聴いてる？ そうなの。別の世界で別の物語を生きていたの。その素晴らしい世界こそIWなの。わたしはIWという物語の主役だった。ううん、主役じゃないかもしれないけど、主役級というか、メインキャラだったのは確かなの。男だったか、女だったか忘れちゃったけど、とにかく充実していて、ステキな仲間にも恵まれて、IWでの『物語』を謳歌していたの。今でもその充実感がハッキリ残ってる。『物語』の世界がどういう感じだったか、今はほとんど頭に残ってないんだけど、『物語』が佳境に入っていたのは覚えてる。仲間のみんなの顔も覚えてないけど、ステキな仲間なのは間違いないの。『物語』はもうちょっとで完結しそうだった。みんなで頑張って、最高の結

末を迎えようとしていたし、『物語』のダイナミックな流れもまさに結末に向かつて動き出していたの。でも突然、あたしだけが、『物語』の世界から弾き出されてしまった。予想もしてなかったアクシデントが起こった。どうしてこんなことになっちゃったんだろうって」

「……」

紳は黙っているほかなかった。「ああ」「うん」と発音する気力さえ打ち砕かれた。黙る以外、どんな返答があるというのか。

なるほど、とりあえず、萌映が迫真の態度で喋っていることは分かった。

だが、内容は一から十まで空疎だった。正確に造ってはあるが、吹けば倒れる紙工作のような薄さ。現実味の無さ。

「あのさ、その、IWとかいうのはどこにあるんだよ？」

気になって思わず訊いてしまった。

いったい何が、こういう奇妙な夢想を作らせるのだろう。

「IWはIWに決まってるじゃない。ここはEW。IWじゃない。分かりきったことじゃない」

「分からねえんだけどなあ」

話が空転する。徒労。苛立ちが込み上げる。

「あたしは、残してきた『物語』が気になっているの。あの世界からあたしが居なくなったら、『物語』に狂いが生まれるのは間違いない。『物語』がバッドエンドになっちゃうかもしれない。バッドエンドどころか、完結もできなくて、途中で世界が崩壊してしまうかもしれない。『物語』が立ち消えしてしまったら、仲間たちも消えちゃう。消滅してしまう。あたしが居なくなったらせいで、仲間い物凄い迷惑を掛けちゃう。かけがえのない仲間なんだよ。最高の仲間たちなのよ。どうすればいいの。嫌だよ。この世界で、一人だけ閉じ込められてるの、嫌だよ……」

萌映は俯いて泣く。ブスのくせに、おままごのような妙にカワイイ動作で涙を拭いているのが、ブス度を倍増しにしている。

「……まあまで。話は分かった。分かったから」と、紳は言った。

だが、それは嘘だ。正確に言うと、分かったのか分からないのか分かっていないことが分かった。

つまり、紳は、めんどろで、やけくそで、なげやりになっていた。自分のことながら現状を良く把握できなかった。そして、そういう状況に流されているのを感じた。

ハツと気付いたら「分かった」と言ってしまった。なぜだか分からない。萌映の勢いに引きずられたのか。それとも萌映が泣いたからか。男は女の涙に弱いという通説を、紳は身をもって知ったのか。しかし、いかんせん、こんな女だ。泣いても涙が効果的とは思えない。

もしかすると「足し算」だろうか。萌映が泣くのは、これが初めてではない。何回も泣いたために、ポイントカードのように積みも積もって、今効力が発生したのか。

ていうか、こいつはなんで、こんなに思いっきり、わけのわからない問題で悩んでいるのかわからない！ 理解できない。それが苛立つ。

まあ、仕方がないか。言葉のアヤで「分かった」と言ったただけだ。ここで泣かれても困るから巧みにあしらっただけだ。萌映の話の本気で聴き、EWに来た事情等について詳しく聴取したりする気は、髪の毛一本もない。

そう結論した。

そして、紳は、ふと思った。

今の場面は、美人な女が相手なら、おれ的に相当テンションが上がる場面ではないか。美しい女に泣かれて、突き放したり戸惑ったりする奴は、健全な若い男子の風上にも置けない。

それなのにどうして、美人ではなく戸沢おまえ萌映だったんだ。ちくしよ。

そう思った時、紳は地獄の釜で茹であげられるような、はらわた

が破れるような奇立ちを覚えた。

その裏で、ブスに生まれついた目の前の女をどこか哀れにも思った。少しだけだが。

この世界は最悪。

萌映はそう言っていたが、その動機が何となく分からなくはなかった。潰れたピザのような顔面で生まれてきてしまったら、世界でも呪うしかなかるう。薬を常用するようになるのもやむを得まい。

ここで紳は何か引つ掛かりを感じた。

……さてよ。戸沢萌映がブスな生い立ちを呪いココロを病んだという説は、本当にそれでいいのか？

萌映を初めて見たのは、このまえ池で釣り上げた時だ。椋も一緒に居る。あの日以前、紳のクラスには戸沢萌映なんていう生徒は居なかったのである。だが、池で釣った日を境に、戸沢萌映は前からクラスに存在していることになった。紳は敢えて今まで触れずにいたが、この不可思議な改竄は上手く説明できない。

「ねえ、ねえ、ちょっと、きいてる？」

萌映がテーブルをバンバンと叩いている。いつのまにか泣いていない。

「ああ悪い、ちょっとぼんやりしてたわ」

いつまで喋るんだ。いい加減飽きた。ふたたび聞き流しモード。

「あたしはね、池で目が覚めた時から、この世界で自分がどう動けばいいか漠然と知っているわ」

「そっか、そっか」

聞き流したものの、なにげに大事なことを言ったようだと気付いた。

「自分がどう動けばいいか知っている」と言ったのである。

それなら、一人で勝手に動けばいいではないか。

他人を巻き込む理由はないはずだ。

「あたしね、IWに帰るには、IWで経験していた『物語』を思い出すことだと思うのよ。あたしはどういう世界にいたのか、どういう敵や仲間が居たのか、どういう世界観だったのか、思い出すことだと思うのよ。この世界に落ちた途端、記憶が流出しちゃって、ほとんど忘れてしまっているの。今は、IWは良かったっていう漠然としたイメージだけ」

「それを思い出すと、お前は帰れるのか？」

IWとやらに帰り、萌映が隣から消えてくれるなら、とっても嬉しいことだ。

もつとも、どうせすべて萌映の空想による設定なのだろう。

だから萌映が「帰る」ことは実現しないだろう。

「帰れるわ。本能的に分かる。EWでIWの物語を作ることが、帰る方法だと思う。この世界はIWからは遠すぎるの。だからまずIWを身近にイメージできないといけない。この下等な世界では、『完全な存在』と言えるものは驚くほど少ないけど、その一つが物語という形態だと思うの。IWで経験していた『物語』を創造することで、IWと共振できる。IWへの通路が開けると思う」

「それは適当な推測なんだろう？」

「さつき、自分の『習性』は分かっているって言ったよね。『こうすればいい』って、何となく感じるの。だから、確信のある推測だよ。絶対帰れるわ。うん、それしか方法は無いと思うわ」

「ふーん」

紳は白けた鼻息を出した。そうか。なら何も言つまい。お前がそう言うんならそうなんだろうとお前の中ではな。

「もう一つ、確信があって、こっちは凄く悪い確信だけど」

萌映は胸ポケットから小さい紙を出した。

「この世界に来た時から、これを持っていたの」

一枚の汚れた写真だった。

写真は、色あせ、波打っていた。前に水で濡れた跡かもしれない。すこし破れていたが、映っているものは分かった。人の顔だった。

思わず、紳は自分の鼻と口を押さえた。  
驚きを悟られないようにするためだった。

だが、どうして萌映に悟られてはまずいのか、少しも分からなかったが。

「この人、たぶんあたしを狙っている刺客だと思う」

萌映は言った。

紳は黙って写真を見た。

パン屋で会ったメガネの少女が映っていた。

「あと、写真のほかに、これもポケットに入っていたの」  
「何だ？」

紳は初めてマトモに反応した。写真を見た動揺を隠そうとしてのことだ。声が上がった。

萌映は紳の変化に気付いた様子は無かった。ごそごとポケットを探っている。

そして、小さなメモ用紙を出した。こちらも、水に濡れたせいか、クタクタになっていた。

メモには日本語の文字列が書かれていた。滲んでいたが、かろうじて読み取れた。

「こっちのメモは、なんだ？」

「わからない。でも、IWに帰る手掛かりになるメモだと思う」

萌映は、静かな口ぶりだが、断言した。真偽は別にして、独自の確信があるのは確かのようにだ。

紳はメモを見た。

【『最高世界の台本』はどこの本屋にあるか】

そう書かれていた。

紳はレジにて平謝りした。

「すみません。家に財布取りに行つて、ちゃんと払いに来ますから」

「そんなこと言われても、困つたね」

蝶ネクタイをした、背の高い強面の店員が、露骨に面倒そうな顔を  
をする。

「いや、あつたんですけど……。おかしいな」

紳は小声で弁解する。ランチタイムは過ぎたが、休日なので客は  
続々と来る。入り口付近に並べられた待合用の椅子は満杯だ。家族  
連れの子供の遠慮の無い目。何回もちらちらと見てはにやにや笑う  
カップルの目。

それにしてもおかしい。店を出ようとしたら、財布には金が無か  
った。紳は家を出る時に確認していた。一万数千円は入っていたは  
ずだ。だが、レジで財布を出したら千円しか入っていなかったの  
である。

「ああ、ちょっと、ちょっと」

コック帽を被った恰幅の良い男が、調理場から出て来て、蝶ネク  
タイの店員を手招きした。

「なんでこんなことになるのよ。ほんと最悪」

「それはごつちだつて同じだ」

恰幅の良い男は店長だった。

二人は学生証の写しを取られ、あとで代金を持って来る誓約書を  
書かされ、さらに皿洗い三時間を命じられた。最後の条件は、都合  
よく混雑時のバイト代わりに利用された感も否めない。やり手の店  
長だと思う。

それにしても、皿洗いという懲罰が本当にあるとは知らなかった。

皿だけでなく大鍋や寸胴も次々に回ってきて大変だ。

「なんで？ お金なんて使いたい時に勝手に勝手に入ってくるものじゃないの？ 信じらんない。IWではそうだったよ」

萌映がブツブツ言う。

「ここは、IWとやらじゃねえ」

紳もブツブツ答える。

「おい、ただ食いの二人。喋らないでちゃんと洗え」

店員に怒られる。

萌映は怒声に戸惑ったようだ。持っていた皿を落とした。皿が割れた。

「あー、このやろうつ、ざげやがって！」

さらに厨房が怒号に包まれた。青い顔をして動揺する萌映。ふらりとバランスを崩し、シンクに腰をぶつける。洗い終え、積んである皿が倒れる。また皿が割れる。

「おいおいおい！ いい加減にしろ、このブス、マヌケ、ドジ！ わざとやってんのかおい？」

「あ、あ……。あ……」

「ごめんなさいごめんなさいと、萌映は蚊の鳴くような声で謝った。それが卑屈な感じがしたのか、店員の怒りは増した。

「あーもういいよ！ おめえは洗い場には要らんわ。台でも拭いてる。とにかく、そっちに行ってる」

結局、萌映は厨房の端に追いやられ、誰からも相手にされなかった。

険悪な雰囲気のまま、水飴のように遅い時間が流れた。紳は洗い場の水道水の冷たさを単調に感じていた。

直後、思いがけぬことが起きた。

さっきの恰幅の良い店長が入って来た。

「あー、きみたち、もういいよ。皿洗わなくていいから。ありがと

ね。もう帰っていいよ。もう終わりにするから。お金も払わなくていいから。はい、これ返すからね」

紳は店長から紙を渡された。さっき取られた学生証のコピーだった。

どういうことだろう。

だが、考える暇もなく、どこか追い出されるように、二人は開放された。店長は店の正面で見送り、そそくさと引っ込んだ。

紳は呆然と立っていた。萌映と顔を見合わせた。見たくはなかったが。

萌映も進化に失敗した類人猿のような呆けた表情をしていた。

「よくわからねえけど、放免ってことか」

どうも許されたようだ。金も払わなくていいらしい。店長は歯切れの悪い態度だった。賠償する気がある客に皿洗いをさせるのは悪いと思つたのか。

だが、どこか唐突な感じは否めない。不可解な結末であつた。

まあ、いいか。紳は気にしないことにした。許されたなら、突っ込むこともない。

それにしても、金が無かつたのは、おかしいな。

家を出た時、確かに財布には金があつた。駅で切符を買つた時もあった。落としてもいない。だから、いつのまにか消えたとは思えない。だが、それこそありえないことである。紳は首をひねつた。ついでに萌映も自分の財布を失くしていたのは笑えたが、まあ、ブスに人並みの行動など期待してはいない。そうとでも愚痴を言つてやらねば収まらない。

展望台行きのエレベーターが来たので乗った。ただでさえ萌映とのデート（笑）でテンションが下がっているのに、介助させられたり、食い逃げ扱いされたり、もはやグダグダの極致だった。これからの予定など考えていなかったし、考える気もなかった。もし下に行くエレベーターが来ていたら、それに乗っていたらう。つまり、ぜんぜん理由などなく、展望台に行くことになった。

展望台は蛆虫が一斉に孵ったかのごとく人で沸き返っていた。人と人の間に景色が見えた。どうして人は、こつも有名スポットに集まるのか。有名だからだ。分かり切っている。ただ、今日は特に、紳はうんざりした。人員の整理に当たっている警備員も多い。どこを向いても青い制服が見えるほどだ。景色を見ているのか警備員を見ているのか分からない。

「ここ展望台？ つまんない眺めだよな」

萌映は中華屋の出来事を忘れたみたいに淡々と呟いた。相変わらず、メンヘラーの目だ。何を考えているのか分からない濁った目だ。「そのつまんない景色を見に、おれらを含めて大量の人間が押しかけているぞ」

紳は当て付けるように言った。このフロアは冷房の効きが悪い。湿度が高い。不快だ。

つまんない景色と言う割には、萌映は人混みを掻き分け、しつかりと窓に到達していた。

紳は無言でついていった。べつに、やることもないから、ついていっているのだ。萌映を置いて帰ってもいいが、エレベーターを待っている列に並ぶのがめんどろだ。なんとなくここに滞在しているのだ。

「ああ、こんな所から見ても、何も分かんないのにな。このEW自体が、巨大な『ゆがみレンズ』なんだよ。世界全体が『ゆがみレンズ』に覆われているわ。水まんじゅうの葛くずの透明な生地のように。この世界はみんな狂ってるよ。だから誰も気付かないのよ」

「……」

紳は生暖かい目で萌映の不恰好な背中を見た。

何が狂っているのか知らないが、一番狂っているのはお前だよ。

「もう、早く帰れよ」

紳はポツリと言った。自然に身体から出た一言だった。適当に呟いただけだが、よく考えると的確だ。

帰りたいたいなら、帰ればいい。こっちはお前が邪魔なのだ。IWだか「元の世界」だか知らないが、萌映が居なくなってくれれば、万々歳だ。お前が消えてくれるためなら、おれは多少の協力をしたっていい。ちよつと真剣に、そんなことを思った。

……まあ、「本当に帰れば」の話だがな。

この世界以外に別の世界があるわけねえだろ。

「そうね。とにかく早く帰らないことにはね。いつまでもこんな世界に居るわけにはいかないもんね」

萌映は怒ったように言った。そして、紳に聞こえるように溜め息をついた。言われなくても分かっているわよ、ということか。

「あなた、協力してくれない？」

「おれが何をするんだ」

「さあ、どうしたらいいかなあ。有力なのは『物語』を思い出すことだけど、あなたできる？」

「何がだよ」

「あたしに『物語』のキャラやストーリーや細部を、とにかく全部を、思い出させること」

「あのなあ、IWとやらも知らねえおれが、『物語』とやらを分かつと思うのか？」

「分かんないの？ なあんだ」

萌映は失望を露わに言った。まるでおれのせいだよ。紳は腹が立った。

「じゃあ、あたしを狙ってる刺客を殺して、吐かせようか」

「刺客？」

ああ、そんな話もあった。あの写真の少女のことだ。根拠不明だが、なぜか刺客とかいう。

まあ、おれはその少女にパン屋で会っているんだがな。

だが、紳は敢えて言わなかった。言う意味を感じない。偶然パン

屋で会った少女が刺客などということがあるわけないのだから。

……そういえば、どうしてこいつ、あの女の子の写真なんか持っていたんだ？ 最初から持ってたとか言っていたが。

紳は、独り言みたいに訊いた。

「お前が刺客とか言う写真の女の子だが、なんで刺客だと思うんだ？」

「直感よ。言っても分かんとは思えないわ。刺客だから、刺客なの。どうせ面白半分で訊いてるんだろうけど、あたしは本気よ。自分の生死に関わる問題に嘘をついてどうするの。間違いなくあの女はあたしの命を狙っているわ。『この女に気をつける』とIWがあ写真を持たせてくれたんだと思う」

萌映は、ちらちらと紳を見ながら、反応を伺う。紳が萌映を見ようとすると、素早く、さりげなく目を逸らす。

紳はストレスを感じる。ちゃんと見る。

「パン屋に行った時、あたしがポリバケツに入ったこと、覚えてる？」

「それがどうした？」

「居たのよ。あそこに、写真の女」

「へー。本当かい」

「本当よ」

萌映は悪夢を見たようにブルブルと首を振った。

「さいわい、あたしのは気付かれていない。こっちから顔を見ただけ。あなたとパンの取り合いになつてたから、その隙に外に出たの。だけど、刺客があたしの周囲を洗っているのは間違いない。でもどうしよう。もうこんなに接近されるなんて。見付かるのも時間の問題かも。見付かったらあたしは殺される。殺される……」

萌映は一人でパニック状態に陥り、青黒い顔で震える。

「まあまで。落ち着けよ。もしお前の言うようにその子が刺客だったとしても、なんでお前を狙わなきゃならねえんだよ」

うぬぼれるのも大概にしろと言いたい。自分が刺客に狙われるよ

うな大した人間だと思っっているのか。

「決まってるじゃない。あたしをIWに帰らせたくないのよ。たぶん、IWの『物語』では、あの刺客はあたしの敵だったのよ。『物語』の重要人物だったあたしを殺し、帰れないようにさせるつもりだわ。この世界に落ちて無力になっているあたしを狙っているのよ」  
なんと言うべきか、誇大妄想もここまでくると、開いた口がふさがらない。疑問点はあるすぎるほどあるが、問いただす気力も起きない。

「だからいつそ、こっちから奇襲をかけて殺そうってわけなのよ！ たぶん相手はまだ完全にはあたしを見付けていないし、なにより、力の落ちたあたしに油断しているはずだわ。まさかあたしから襲ってくるとは考えてないはずだわ」

「なんで殺すって発想が出るんだよ！」

思わず突っ込んでしまい、紳は猛省する。

だが、おかしいだろ。話が支離滅裂だ。

「だって、どっちにしろ、殺らなきゃ殺られるんだよ。それに考えてみてよ。相手はIWから来た刺客よ。IWではあたしの敵だったのよ。きつと『物語』の全貌も知っているはずよ。だから、こっちから襲って『物語』を吐かせようっていうの。そうすればあたしは帰れるでしょ？」

話にならない。全部推測でものを言っている。見本のような誇大妄想だ。

誇大妄想、か。

本当にそう切り捨てていいのか。

一つだけ引つ掛かるのは、萌映が写真を持っていたことだ。  
少女とグルになって紳を騙しているなら理解できる。萌映は性格もブスであるため、騙さないとはい切れない。だが、どうもそうではなく、萌映は本気で少女を恐れているように見える。

……まさかな。

別の世界があると仮定したほうが、事態をうまく説明できるので

はないか。一瞬、紳はそう思った。もちろん気の迷いだと分かっている。今日の暑さで脳が溶けたのかもしれない。どうやらおれは相当に疲れているようだな、と思った。

「人を殺すのは、やめておけ。別の世界とやらではそれでいいのかもしれないが、この世界ではお前が警察に捕まるだけだ」

ツツコミにもキレが無かった。

「そうかもね。この世界では人を殺すのは大変なことみたいね。一人殺しただけで人生が終わるぐらいの勢いなんですよ？」

「EWとやらは違うのか」

「向こうでは簡単に死んだり生き返ったりするわ。EWの不自由な身体とは違うよ」

「あーそうかー、と呟く気力もない。紳はぼんやりと下界の景色を見た。

萌映が血だらけの包丁を持って立っていた。

「うわ、と一瞬遅れて、驚いた。

何が起こったか分からなかった。ボンヤリとしていたので、萌映を見ていなかったからだ。

「お前、何やってるんだ？」

「え？」

萌映は包丁を見た。包丁と一緒にハンドバッグも持っていた。顔面がみるみる青黒さを増した。

「ちよつと、これ……」

萌映は包丁を差し出した。紳は切っ先を向けられ慌てる。ばか、やめろ。

何がどうなったんだ。後ろに下がりながら考える。周りから人の気配がサーッと引いていく。二人を囲むように悲鳴が上がる。連鎖的に悲鳴が上がる。

萌映の近くに茶髪男性がうつぶせで倒れている。

床に滲んでいる赤いもの。あれは血液なのか。たぶんそうだろう。紳は混乱した。状況が把握できなかった。気持ちは焦るが、頭が働かない。

カシャン。

萌映は包丁を落とした。刃がこぼれたような脆い音がした。

おいこら、なにやってる、うごくな、そのままじっとしてろ、こいつ！！！！！

怒号が押し寄せた。警備員達が走って来て、数人がかりで萌映を床に倒した。

残りの警備員たちは客に指示する。指示というか、怒声。

「下がって！ 下がれ！ 避難してください！ みんな避難して！ 入って来ないで！」

警備員たちは両手を広げ、客を非常階段へと追いやった。

あつというまに展望フロアは封鎖された。

紳も追い出された。

そのまま警備員の誘導で階段を降りさせられた。途中からエレベーターに乗ってもよかったが、誰も言い出さなかった。動揺していたに違いない。行き当たりばったりに、30階まで下りると、階段室からエレベーターホールに移動となった。それから、特に指示もなく、あいまいな待機状態になった。警備員は無線や電話での連絡に忙殺されていた。「展望台で何が起こったか見ていた方は居ますか」と訊かれ、数人が「見ました」「なんか女の子が男の人を刺してた」などと申し出た。

紳は何も言わなかった。この場に居ると厄介なことになりそうだという予感がしてならなかった。

そこで紳は、雑踏と喧騒に紛れ、こつそりと階段室に入った。薄緑色のリノリウムの階段を延々と下りる。

何を見たか、整理できていなかった。はっきり覚えているのは、戸沢萌映が包丁を持っているところからだ。その前に何があった？ 思い出してみる。

戸沢萌映が持っていたハンドバッグ。そうだ、たしか、戸沢萌映はあの中から包丁を出した。そして、ハンドバッグは戸沢萌映のものか。ちがう。

たしか、女だった。知らない女性が戸沢萌映に近寄ってきて、ぶつかるといって、ハンドバッグを預けた。なにか一言つぶやいて、居なくなった。

そのあと、あの場面につながるのだ。萌映がハンドバッグを開いたら、血まみれの包丁が出てきた。

そうだ。たしかにそうだ。紳の記憶が嘘でなければそうだった。

一つ言えるのは、戸沢萌映はあの包丁とは関係ない。包丁の持ち主は、戸沢萌映にバッグを預けた女だ。紳は女の顔を思い出そうとした。だが、だめだった。女の後ろ姿しか見ていなかった。何の特徴もない茶髪の女だった。

一階に到着した。ビルの入り口には、パトカーが何台も停まって乗り付けていた。人々は異様な雰囲気になぞらわめていた。警官が入り口に立っていたが、入り口は何箇所もあり、警官が居ないドアもあった。紳はぼんやりと外に出た。あいかわらず空気はヌルツと暑かった。空を見たら夕焼けに染まり始めていた。

戸沢萌映は警備員たちから警察に引き渡されるだろう。今の「事件」の参考人して聴取を受けるだろう。たぶん開放されるはずだ。警備員が萌映を取り押さえたのは間違いであり、真犯人は萌映にバツグを押し付けた女だ。

だが、目撃証言が出なければ、戸沢萌映は開放されないかもしれない。たとえば、犯人の女が手袋をして男を刺し、その後で萌映にナイフを持たせたとすれば？ いや大丈夫だ。防犯カメラの映像を見れば犯行が映っているに違いない。だがもし女がカメラに映らない場所を計算して男を刺したとすれば？

くだらない。警察がそんな小細工に幻惑されるはずがない。たしかに野蛮な類人猿のような萌映の顔を見れば犯人と断定したくなるう。しかし警察は幾ら何でも顔で犯人と決めることはしないだろう。そこで紳はまず「これで家に帰れる」と思った。束縛が無くなつた。安心して家で休もう。戸沢萌映は、しばらくは警察署かもしれないが、夜遅くにでも釈放されるだろう。

そういえば、小山と大川は、来るとか言いながら来なかった。あいつらのことだ、休日の睡眠欲や暑さには勝てなかったのだろう。その程度のだらしない奴らだ。

紳は駅の近くの路地をぶらぶらと歩きながら、だらだらと考えごとをした。

……ていうか、なんかおかしくないか。

いや、おかしくはない。

どうも奇妙なのだ。

萌映が事件の犯人と間違えられても別に構わないと思う。だが、そんなことがあり得るのか。自分の隣の人間が犯人に誤認され連行される、なんていう確率はどれほどのものなのか。そんなに都合よく目の前で起きるものなのか。いや、実際に起きたわけである。紳

はその現実に戸惑っていて、だから、ぶらぶらと路地裏をさまよっていた。

ここから駅はすぐだ。電車一本で帰れる。  
だが、なんでおれは帰らないのだろうか？

路地に一台の屋台が停まっていた。

ここは飲み屋街だ。屋台が出る時間らしい。

赤い屋根に茶色のトタン、ごちんまりとした屋台だった。まだ座席も提灯も出ていない。

と、裏から親方らしき人物が出てきた。屋台に巻いてある縄をほどいている。開店作業に忙しそうだ。

……変だ。何か小さい。って、スカート？ いや、ワンピース？  
しかも……。

すれ違いざま、相手と目が合った。

「あ、おにいちゃん」

女の子だ。しかも、見覚えのあるメガネと、ゴージャスでボリューミーな髪。パン屋で会った少女だった。たしか「りえちゃん」と呼ばれていた。

萌映が「刺客」と断定した少女だった。

「パン屋のりえちゃんか」

緊張を隠し、紳は言った。

「覚えててくれたんだ、ありがとう」

人懐こい笑顔で少女は言う。純粹で混じりけが無い。やはり年齢相応に可愛らしい。正直、これが刺客のはずはないと思った。むしろ、これが刺客とか疑う奴の神経を疑う。紳はロリではないし（自称）、人相を見て善人が嘘つきかぐらいは分かるつもりだ。こいつは刺客とかじゃないでしょう。理由？ 分かり切ったこと言わせんな。二人の顔を見比べれば一目瞭然だろうが。

だが、この少女は、なぜ屋台などやっているわけか。普通ではな

い。あるいは、屋台の親方の娘なのか。

「これ、わたしの仮寓……。まあ、家みたいなもの。服とか、生活に必要なものは、全部中にあるんだ。でも普通に屋台もやってるけどね」

少女は屋台をの下部を示した。

どうも、屋台の親方と、路上生活者の中間ぐらいの職業のようだ。苦勞しているのだろうか。まだ若いのに、かわいそうだと思う。

しかし、身なりはきれいだし、こざつぱりとしていた。黒を基調とし、白い水玉の入ったワンピースは、年齢より大人びた雰囲気を与えていた。よく見ると、水玉模様は微かな青色の濃淡を帯びていて、それがデザインの深みにもなっていた。

紳はこの少女が屋台に立ってオデンの鍋とかを掻き回しているところを想像してみた。客は会社帰りのサラリーマン。意外に予想できるし、少女店長というギャップが「いける」のではないかと思ってしまう。今は廃れたが、メイドカフェというのが流行ったこともある。少女屋台という業態があってもよい。

……って、何を考えているんだ。

「そうだ、おにいちゃん、いまヒマ？」

「ああ、まあ、ヒマといえばヒマだが」

実を言えば萌映の処遇について案じていたわけだが、そもそも、萌映について案じること自体が苦痛であり、早くやめたかったところだ。だからたった今、ヒマということに決めた。

「じゃあ、ちよつとわたしと遊ぼうよ。すぐそこにおもしろい場所があるんだよ」

「遊ぶって、おれが、君とか？」

「そうだよ。わたしみたいなガキは嫌かなあ？」

「いや、べつに、付き合っただけでもいいぞ。だけど屋台はいいのか？」

「いいよ。まだ開店まで時間があるから。行こう」

少女は紳の袖を引っ張り、ぐいぐいと歩き出した。そろそろ夜に

なる。少女の光沢ある黒い靴が、道路に溶けるようだった。

着いた先は、明るいアーケード街にあるゲームセンターだった。白や黒や赤の内装がクツキリ照らされ、各種ゲーム機もカラフルに明滅していた。光の針に眼球を刺されるようだ。漂っているホコリも見えそうな明るさである。ゲーム機の効果音やBGMが内臓に響く。

懐かしいなと、紳は思った。

少女に引かれたまま、近未来的な装飾をされた扉に入る。なんのことはない。エレベーターだ。案内板を見ると、ビル一個が丸ごとゲームセンターらしい。少女は背伸びをして最上階のボタンを押した。片方の手でずっと紳の袖を持っているのが微笑ましい。

「これ、ほしいんだ。何回もやったけど取れなくて」  
少女は筐体に額をくつつけて言う。

ケースの中に入っているのは大型の美少女フィギュアだった。アニメのキャラのフィギュアらしい。

筐体に貼られたポスターには、【『魔王の教室掃除』プレミアムフィギュア 全二種】とある。『魔王の教室掃除』なるアニメは、紳は知らなかった。最近のアニメは珍妙なタイトルを付けるものだな。

「このアニメは面白いのか？」

少女はしたり顔でメガネをクイツとやる。

「面白いよ！ 原作は小説、ていうかラノベだけどね。アニメもいけど原作もいいんだよ。キャラも物語も両方がいいよ。すごくオススメの作品！ このフィギュアも出来がよくて、二つとも取りたいんだけど、全然取れなくて」

たしかに、景品のくせに随分精巧にできている。欲しくなるのも分かる気がする。でも、女の子が欲しがるのは珍しい。こういう美少女のフィギュアは、ヲタクと呼ばれる一部男子層の専用の玩具だと思っていた。

「わたしへたくそだから、おにいちゃんに取ってもらおうと思ったの。お金なら持つてるよ」

少女は肩から提げた小さいポーチを引っ掻き回し、財布を捜している。そのポーチの大きさだと、フィギュアが取れても中に収まらないぞ。

「あーいいよ、おれにやらせてみな。ちょっとやってみつから」  
紳は自分の財布から小銭を出す。一回二百円か、高いな。何回もできないぞ。「取れなかったら諦めるよ」と予防線をはり、筐体に二百円を投入する。

一回目。成功。

二回目。成功。

三回目までも成功。

なんという運。昔はクレイソゲームをやったことがあり、多少は腕に覚えがあつたが、三連発は経験したことがない。何か、人生の運を無駄に注ぎ込んだ感否めない。

でも、少女は大喜びだ。箱を掲げて飛び跳ねるほど大喜びだった。それを見て、まあいいかと思つた。そして、ノリでやった三回目を取れた一個がダブつたけど、どうしようかと思う。

「それはおにいちゃんが持つてたほうがいいよ」

少女はフィギュアの箱を両肩にかついで言つた。じゃあ、まあ、もらうか。紳は景品用のビニール袋にフィギュアの箱を入れた。

さて帰ろうかという時、紳は筐体の下に雑多な小物が落ちていたのを見つけた。

ははあ、と思い当たる。さつき少女がポーチを掻き回した時に落ちたんだな。

肝心の持ち主はというと、早くも階段を降りようとしている。完璧に用済みモードである。現金なやつだな。紳は落ちた小物を拾つてやる。

「……？」

フタの付いた細い筒。

……これ、口紅、だよな。どうして、あの少女が？

もつとある。

ケースに入った無印のCD-R。

これはまあいい。許容できる。

次。中身の入っていない、包丁のプラケース。

店で買つてすぐに中身だけ出したという感じである。なぜ包装だけが残っているのだろうか。中身はどこに行ったのか。だが、少女は屋台をやっているというから、屋台に置いているのかもしれない。これもまあ、納得できなくはない。

あとは、最後の一つ。ラミネート加工された学生証大のカード。そこには少女の顔写真が貼ってあった。撮影の緊張のためか、写真の顔は少しくつく見える。そして、写真の隣に書かれていた。

### 【世界管理者証】

その下にはアルファベットで少女の名前が書かれていた。長いのですぐには読み取れない。

少女の名前には何かの協会名らしき仰々しい判が押され、更には外国語の表記が続いた。

一番下には、日本語でこう書かれていた。

【上記の者は、世界管理者として適切な技能を有することを証明する】

何だこりゃと呟いた時、声が掛かった。

「おにいちゃん、なにやってるの、帰ろうよお」

少女が階段を一段降りた所で招いている。

「あ、ああ」

紳は階段に向かった。

「これ落ちてたぞ」

小物三点を少女に返す。

「あつ、ごめん。ありがとう！ これ落としたら大変なんだあ」

少女は三つとも景品の袋に放り込んだ。「大変」というのは、三つのどれに対して言ったのだろうか。

少女は骨ばった鉄製の階段をカンカンと素早く駆け下りる。紳も慌ててついて行った。ゲームセンターからのライトが差し込み、階段はフラッシュをたいたようにピカピカ光った。

「おい、なんか【世界管理者証】とかいうのがあったぞ」

「そうだよ、わたしのだもん。それがどうかした？」

半階ほど下を降りている少女が見上げる。あっけらかんとした顔だ。

「あー、そうか。そうだったな」

紳は苦笑した。くだらない質問をした自分を恥じた。少女はアニメなどを嗜むのだから、アニメキャラになりきる壮大なママゴトに没頭しても不思議はない。あのカードは自作だろう。

だが、自作にしては、しっかり造り込まれていたな。

「世界管理者っていうのは、あれか、何かのアニメのネタなのか？」

紳は階段を降りながら呼び掛けた。

少女から返答は無い。だいぶ下に行ってしまったみたいだ。

しばらくして一階に到着した。

少女がこちらを向いて立っていた。

「ネタじゃないよ。ガチだよ」

何か、今までにない、大人びた雰囲気を感じた。

店のネオンがメガネに反射しているせいか。

「と言っても、あのカードじゃ、証明にはならないだろうね。だって、おにいちゃんたちには、世界管理とか言ってもピンとこないもんね。だから、あのカードは、ジョークみたいなものなんだよ。証明書のくせに、組織の中でしか証明力がないから。ネタと取ってもいいし、本当だと取ってもいいんだ。おにいちゃんの好きにして」  
紳は反応に困った。煙に巻かれた気分というか、おそらく少女も現実と空想の区別がついていない。それでいて話をするから、わけがわからなくなる。

「まー、カードのあるなしにかかわらず、世界管理者は力で管理しちゃうよ。管理する力があるからね。あとは、管理はわたしの仕事だし」

少女は景品の袋をぶらぶらさせながら呟いた。

屋台に着いた。

「おにいちゃん、きょうはありがとう」

ニコリと少女は笑った。やっぱり、あどけない笑顔だ。こういう顔を見ると微笑ましい。さっきの空想話も許してしまう。この年頃の少女には、空想を持つことは許される。

「ところで、おにいちゃんは、きょうは町で何してたの？ お買い物？」

「いや、」言葉を切ってから、デート（笑）のことをと言おうかどうか迷った。デートとはいえ相手は萌映だ。自慢にならない。むしろ自虐である。

「いわゆるデート（笑）ってやつさ」

べつに少女に嘘をつく理由もないと思った。

だいたい、嘘の予定を考えたり言ったりするほうが疲れるし、面倒くさい。

「へえええ、おにいちゃんの彼女？ かわいい？」

「いや、ブスだ」

「ふ」

少女は吹き出した。

「ふはははははは」

顔をクシャクシャにして笑った。よほど面白かったようだ。

「おもしろいね、そういうこと言う人初めて」

「ああ、驚天動地のブスだよ。そいつに付き合ってるのも事情があつてな。もとは罰ゲームなんだよ。だからべつに好きじゃねえ。好きであつていいわけがねえ」

「でも、その人、今居ないみたいだね？」

「警察に連れて行かれたからな」

「ふははははは、ほんとう？ どうして？」

「人を刺した疑いで連行された」

「なんで刺しちゃったの？」

「いや、本当は刺してない。人違いなんだ」

「じゃあ、おにいちゃん、災難だね。彼女がそんなことになっちゃって……。あつ、こんなところに居てもいいの？ 警察に行って、本当のこと言っただけなら？」

「……いや、いいんだ。どうせ、うざい奴だし」

「ふははははは」

よく笑う少女だ。そんなに面白いのだろうか。紳は思うままを言っているだけなのだが。

「そっか。わたし、よくわかったよ。おにいちゃんはブスな彼女が嫌い、警察に捕まって良かったんだ。だから、今は晴ればれして、しあわせなんだね」

よかったよかった。少女は納得顔で頷いた。両手で紳の手をにぎり、笑顔を向けた。

……。

「おにいちゃん？ どうしたの？」

「……あ、いや、なんでもない。じゃあ、おれは行くから。じゃあな」

紳はそそくさと引き返した。唐突すぎるほどだった。ぼんやり歩きながら、たった今生まれた悩みで、心は占められていた。少女が純粋な疑問として投げ掛けた言葉。

晴れ晴れして、しあわせ、か。

おれは今、本当にそうなのか。

このまま帰って、いいのか？

「まってよ。わすれものだよ、ほらあ」

どのぐらい経っただろう。少女が走って来た。腰を折って、荒い呼吸をしている。

少女は紳に、フィギュアの箱が入った袋を握らせた。

「はい、わすれちゃだめだよ」

「あ、ああ、悪いな」

少女は息を整え、紳を見上げる。

「わたし、おにいちゃんとは、また会いそうな気がするな」

「そうか？」

「おにいちゃんの名前は？」

「おれは紳だ」

「そうかあ」

少女は言葉を継ぐ。

「わたしの名は、エウゲニア・ルナルナ・ラブリエ・マルムステイン。みんなには『りえちゃん』とか『ラブたん』とか呼ばれている。好きに呼んでくれ。では、またね」

すこし遅れて、紳は寒気を感じた。

違和感で体が震えたのだ。

……え、なに？

名前とか、口調とか、色々とおかしくなかったか？

少女を見たが、居なかった。

少女が居た。

……あれ？ こいつ、「りえちゃん」か？

……いや、違う。

少女は背格好が似ていた。だから一瞬、混同した。しかし、一緒にゲーセンに行った少女とは別人だった。

その少女は路地をゆっくりと歩いてきた。

「どけよ」

ぴしりと一言。紳は顔をしかめ、後ろに退がる。道を塞いでいたのは悪かったが、「どけよ」はないと思う。

改めて少女を見る。

鈍色と赤銅色が混ざった、刺すようなストレートの髪をしていた。近付きがたいほどの可愛さだった。

鬼のような可愛さだ。天地をまとめて睥睨するような、圧倒的迫力の眼光をもっていた。

だが、引き締まった峻烈な顔立ちとは一線を画し、少女の目には独特な存在感があった。

どこも見ていないかのような、からっぽな目玉。

いや、ちがう。

どこも見ていないのではなく、地球を一周してきて自分の目の裏から自分の目を見ているような、そんな眼であった。

畏怖を抱かずにはいられない、異様な目だった。

少女は路地の暗がりへ去って行った。

紳は少し怖かった。もちろん、年齢の低い少女をマジでかわいいと思った自分が怖い。自分はロリではないつもりだった。いや、断じてロリではない。戸沢萌映の面相を一日じゅう見ていたため、その反動が出ただけなのだ。

いや、だが、言いたいのはそこではない。

初めて見た少女に寒気のような畏怖を感じたことだった。こんなことは今までない。なぜなのかわからない。

少女の異様な雰囲気とか、それから……。あれ、言葉にするとそれだけか？　しかし、少女の接近に全身が震えるような迫力を味わったのは確かだった。紳は自分が見たのが小さい女子とは思えなかった。昔見た漫画に、鬪気とかオーラというものがあつたが、あるとすればこんな感じではなからうか。

身長や年齢は関係なかった。とにかく相手に飲まれてしまった。絶対的な存在感。その人物しか視界に見えなくなるような存在感があつた。じつに不思議な現象だ。

そして、そういう経験をしたのは二度目だ、と思つた。一度目は今さっき、「りえちゃん」と別れた際に味わつていた。てか、あの子の本名は何だっけ。長すぎて覚えていない。ともかく、こんなことが連チャンでくるなんて、ちょっとキセキじゃねえかよ。

今日はどうかしているなあ、と思う。

混沌とした出来事が目白押しだったことはもちろんだが、何より、自分自身、それらの出来事に翻弄されているのがおかしかった。

萌映の空想話。【世界管理者】のカード。見知らぬ少女から感じたオーラとやら。そんなものをどこかで本気に受け取っているのだろうか？

本気になどしていない。していないつもりだった。だが、考えを固めたそばから溶けていくような、不安定な精神状態を感じた。

小山から電話がきた。

そういえば、小山と大川は「行くから」と言いつつ来なかった。出歯亀欲求よりも睡眠欲が勝つたのだろう。おれたちは、三人とも本能に忠実な、だらしない男共なのだ。

ところで、櫛棗が仲介に入った、パン屋の子たちとの合コンが明後日に決まったらしい。電話はその報告だった。「おお、楽しみだわ」と言つて紳は電話を切つた。そのあと、合コンの当日の展開など、あれこれ妄想してみた。だが、いつもよりも熱中できなかった。

ひょっとして、おねは、おねも分からないような感じで、動揺しているんだらうか。

結局、紳は家に帰らなかつた。街頭の看板状の地図で最寄りの警察署を探し、歩いて行った。

萌映が逮捕されようと構わないが、警察にビビって逃げたチキンと言われたくはないだけだ。どうせ現場をしつかり見たから、見たままを言ってくればいい。何より、行こうか行くまいか、だったら迷うのが一番めんどうだった。確かに、萌映が気になつたと言えはなつたが、目詰まりしたゴミのように気になつたのである。だつたら取り除けばいい。

学校を思わせる警察署の門を潜ると、ロータリーの向こうの入り口から、ちょうど萌映が一人で出て来た。

「あ」

萌映は蛙が鳴囊めいのうを膨らませ損ねたような声を出した。ぷいとそっぽを向いた。一人で勝手に門を出て行った。待てよと言うが、止まらない。間違いない、ふてくされている。

「おい待てよ。せつかく迎えに来てやったのに」

「遅すぎるのよ。あたしがどれだけひどい目に遭つたか分かつてんの？」

「何を大げさな。拷問に遭つたわけでもあるまいし。で、どうなんだ？ 結局放免されたんだな？」

「うるさいな。人の気持ちも知らない奴になんか、何も言わない」  
萌映は早足で歩いて行く。コシのない長髪を地味に結んだだけの真っ黒い後頭部。うねうねと巨大なおたまじゃくしが泳いでいるようだ。まったく、ブスのふくれっ面ほど価値のないものはない。

お前の気持ちとか、べつに知りたくもねえよ。  
「待てつての。適当に歩いてるけど、道分かんのか。行く場所あるのか」

無言。数十メートルほど歩いて、萌映は悔しそうに振り向いた。

紳を睨んでいたが、近くに見えていた公園に一人で入った。まるつきり子供だなと思う。だが、怒る元気があるということは、放免はされたとみていいのだろう。

公園はベンチとトイレがあり、木で囲まれているだけの、小さい場所だった。地面の砂がぼやっと白く光り、公園の四角い形を浮き上がらせていた。

紳は安心し始めていた。ここで適当に休んだら、あとは流せばいい。もうすぐ戸沢萌映との一日も終わる。あと一〜二時間、特別に耐えてやろう。相手は子供なのだ。

セントラルタワーでの事件は、真犯人が自首したそうさ。小窓に格子が嵌められた取調室で、警官にガンガン怒鳴られていたら、刑事らしき強面の男性が入って来て「ちがうじゃねえか」と言った。その直後萌映は釈放となったそうさ。

萌映は警察署で真犯人の顔を見たが、ブスな女だったそうさ。萌映が言うくらいだから、よほどのブスだろうか。それはないだろう。戸沢萌映は、自分のブス具合を認識できないという、ブスの中のブスだからだ。第一、萌映以上のブスな顔は想像できなかった。

「あー！ー！警察署怖かった！　すごく怖かった！　殺されるかと思った」

萌映は金切り声を上げた。ヒステリックだ。公園の外から聞いたら変質者だと思っだろう。しかも、さつきからベンチに座っているのは紳一人だ。

なぜか萌映は木に登ったまま降りてこない。だいぶ上のほうの梢に白い服が見える。

「だから嫌なのよ、こんな世界。みんな消えればいいのよ。消えるべきだわ」

「いいからまず木から降りて来い」

「あなたもあなたよ。迎えに来るのが遅すぎるの！」

「はいはい、遅くて悪かった」

もう何回も言っただろ。形式的にだが。

「幼い真似はよして、そこから降りて来いよ」

「……うるさいな。考えてみれば、あなただから悪いのよ。あなたがあたしの言うことをちゃんと理解すれば、あたしは怖い思いもしないし、恥もかかないで済むのよ。なんで、この世界で、あなたなのよ」

「何の話だよ」

「いい、あのね、これが理想的な完成された物語なら、あたしは超重要人物なわけなの。だから、あたしを釣り上げて、あたしが別の世界から来たと勘付いたあなたも重要な。あなたは物語の大事な鍵を握る人物のはずなの。あなたはあたしに進んで協力し、あたしがIWに帰るために一身を投げ打って働く流れになる。ならなきやいけないわけ。それなのにあなたは、この世界を象徴するようなクズだわ。非協力的だし、本気で相手もしないもの」

「またそれかよ。おれはそんなセカイとやらの話は信じちゃいねえんだよ。もう黙ったらどうだ」

「いいや黙らないわ。あたしは分かっているのよ。あなたが本気で相手してくれないこと自体が、この世界がクズ世界だっていうことの証明になっているのよ。本当なら、二人の結び付きは物語に発展しなければいけないの。でも、発展しない。発展しないから、御都合主義の展開という批判さえ、起きる余地がない。あなたは本当にふつうのクズな人間で、あたしの重要さに気付けない。分かっている？ あたしとあなたはミスマッチですらないのよ。あなたのような汚い世界の人間が、IWの人間であるあたしの真価を見抜くなんて絶対にあり得るはずがないんだから。『世界の違う二人が出会ったキセキ』とさえ言えないのよ。ただの不協和がズルズル続いているのよ。これからも続かせるつもりなの？ なんとかする気概はないの？」

「いいかげんにしろよな」

さすがに温厚な紳もムカツときた。敵意を長い間ぶつけられ、頭にくる。

しかも、萌映は世界への毒と同時に、自分が優れているという自慢も始めた。

「あたしはすごいのよ」という叫びこそ、萌映の単純な本心に違いない。誰にも褒められないから自分で褒めるしかないのだろう。哀れなものだ。

だが、同情はできない。実際萌映はぜんぜんすごくないのだから。紳は一日じゅう萌映を見たから、しっかりと理解した。萌映は想像以上に無能でドジで、しかもブスだった。

「そんなにセカイだのIWだのというなら証拠を見せる。お前が別のセカイの住人である証拠をここにバーンと出してみろ。それなら納得してやる。証拠が出せないのなら話はやめる。話を続けたら、おれは帰る」

「証拠なら簡単よ。IWに帰れば、この世界からあたしが居なくなるから、証拠になる」

「それかよ。話にならん」

ベンチから立ち上がり、出て行くそぶりをする。本当に出て行ってもいいと思った。

「あたしが死んでも証拠になるけどね。刺客に殺されて」

紳は足を止めた。

「とにかく、早く帰る努力をしないとまずいの。あたしだって帰りたいし、死にたくない。それに、こんな世界、誰よりも嫌なんだから……」

木の上から細い咳き聞こえた。

これが美人なら、話を聞いたかもしれない。

「おれは、そういう話は信じない」

紳は改めて言った。

「いいよべつに。信じてもらわなくても。どうせ馬鹿でクズなあなたに協力したってタカが知れてるんだもん」

木の上から雨のような罵倒が降る。やっぱりこいつは性格すらブスだ。決めた、おれは帰る。

グチャッ！

背後で音がし、同時に微弱な地震を感じた。振り向くと、やはり、つぶれたゴキブリのように萌映がうずくまっていた。

木から下りようとして足を滑らせたんだろう。

「痛……。足くじいた……。いたい、いたい、いたいいいい！」  
本当にくじいているから困る。どうしてこいつは面倒を増やすんだ。もつと普通に生きてくれ。高校生のくせに木とか登るな。

紳は帰りたかったが、駅まで付き添ってやるうかと思つた。一人で勝手に怪我をする奴である。帰り道でも怪我をしかねない。「見捨てられたから怪我をした」とか言われてはたまらない。だが、心配は不要だった。

「あなたの家に泊まるよ」

萌映は平然と宣言した。

「なんだと」

紳は露骨に不快感を表した。

「だってあたし、家ないんだよ。それにあなたは協力する義務があるでしょ。あなたが警察署に来るのが遅いから、あたしは余計な取調べを受けて、精神的苦痛を受けたのよ。どうせ、あなた、警察にビビってたんでしょ？ 行こうかな、行かないかな、って、町の中をぐるぐる回ってたんでしょ」

「あーうるせえ！」

人が嫌がるどころだけは勘が鋭い女だ。

「泊まるのはお断りだ。冗談じゃない」

「『冗談じゃない』ねえ。やゝゝゝつぱり。本音が出た。『付き合いおう』とか自分から言ったくせに。どうせあたしのこと、ブスとか生ゴミとしか思っていないのね」

「あ、いや」

紳はドキツとした。しまった。つい。

萌映は土を掻き集め、紳にぶち撒けた。

紳は避けなかった。土くれが腹に横一文字に当たった。べつに痛くはなかった。

「ふざけないでよ！ あたしだってね、あなたみたいな役に立たないクズ人間の家なんか、泊まりたくもないわよ！ それでもあたしは、落ち着ける場所が必要なよ。だから、あなたの部屋を借りさせるって言うの。事態は急を要するの。すぐに『物語』を考えないといけないの。だって、だって……」

萌映はすすり上げた。暗くて顔は見えなかった。

「この世界に居ると、本当にIWのことを忘れちゃうんだもん。この世界の汚れに晒されて、IWの思い出が消えていつっちゃうんだもん。どんどん遠くなっちゃうんだよ。あたしはほんとにIWに戻りたいのにさ……。毎日、毎秒、この世界に汚されていって……。そのうち、汚されることに慣れちゃって、汚されたこともわからなくなりそう。それが一番、残念なのよ」

しばらく、暗闇ですすり上げる声が続いた。

紳は暗がりを見て黙っていた。

やがて、搾り出すように言った。

「くそ。しかたがねえな。一晚だけだからな！」

こうして、紳は萌映を家に連れて行くことになってしまった。

なんでこうなるのだろう。紳は気付いたら戸沢萌映に引きずられている。これはわりと純粹に疑問であり、紳は理由を突き止めたかったが、わからなかったので十秒ほど考えてやめた。話の運びや、泣くタイミング、すべて計算ずくでやっているなら大したものだ。どうみてもそうは思えないが。

「じゃあ、さっさと行くぞ。早く立て」

「……まって」

小さい声で言う。

「なんだよ。早くしろよ」

「あの、だから……」

「なんだよ。ごによごによ言っても聞こえねえって」

紳は近寄った。

大声で叫ばれた。

「トイレに行くから待ってって言ってるの！　ずっと我慢してたからやばいの！」

萌映は腰が曲がった老人のように、よろよろとトイレに歩いて行った。

公園にトイレがあつてよかった。

もしかして、異性の手前、トイレと言つのを遠慮していたのだからか。

あほらしい。誰も気にしねえよ。

二人は電車で地元に戻って来た。

萌映は、公園で泣き叫んで疲れたか、静かに歩いていた。

一方、紳は混乱していた。萌映を泊めるといふ危急の災難で頭が一杯だった。

そのせいで、一応言おうかと思っていたことを、萌映に言うのを忘れた。

「りえちゃん」と一緒にゲームセンターに行ったことだ。萌映にとつては大事なこともしれなかった。だがすでに紳の頭からは消えていた。第一、紳はセカイにまつわる話など、信じる気にはならなかった。

まず、萌映をどうやってバレずに部屋に上げるかが問題だ。いつもの帰宅パターンだと親は大抵茶の間に居る。紳が部屋に行くには茶の間の横の廊下を通るため、ほぼ確実に会話が発生する。すりガラスの扉で仕切られてはいるが、二人が廊下を歩けば気付かれる可能性は高い。

例外的に会話が生じないのは親が先に寝ている時だ。23時を過ぎれば二人とも確実に寝ている。面倒だが、紳は家に電話を入れ、「友達と遊んでいて帰りは遅くなる」と言っておいた。これでよし。あとは23時まで時間を潰せばいい。

「なんですぐに家に行かないの？」

「うるさい。おれの家だ。文句を言うなら一人でどっか行ってもいいぞ」

お前を入れるために苦労しているのが分からねえのかよ。

「あ、わかった、家に女の子呼ぶからって隠そうとしてんの？ やましい考えでもあるんでしょ」

くそ、こういうところだけは気付きやがる。だが、後半は勘違いも甚だしい。

「誰がお前にやましい意図を抱くんだよ」

「照れなくてもいいよ？」

「あーもう。とにかく、部屋に入ったら、うるさくするなよ。いろいろ面倒だからな」

「……」

萌映は少し沈黙した後、言った。

「分かった」

時間を潰すと言っても、あと三時間ぐらいある。何をしたらいいのか。

こうなると分かっていたらまだ町に居たが、すでに戻って来てしまった。時間を潰す場所は少ない。今から町に引き返すか。それではバカみたいだ。

「本屋があるね。入っていい？」

駅から出たばかりだが、駅に隣接して本屋がある。地元だが、急に参考書が必要になった時ぐらいしか行ったことがない。品揃えなら町のほうがいいし、だいたい、漫画とか買う時はネットで済ませしてしまう。

「メモの文句。覚えてる？ 『最高世界の台本』はこの本屋にあるか」

「いや」

覚えてはいたが、どうでもいい記憶として認識していた。興味は全くない。

「あのメモは『物語』を思い出するための手掛かりだと思うの。もちろん、言葉通りに受け取るのは安直だと思うけど、本当に本屋に手掛かりがあつたら儲けものじゃない」

「あーそうだな。ところでおれは外で待ってるから、好きなだけ中で見ていてくれ」

時間はたっぷりある。

「じゃあ、見てる」  
萌映は中に入って行った。

それから三十分。

萌映は出て来ない。

さすがにくたびれた。何もせず三十分待つのはつらい。

本屋に入って行くと、萌映は文芸コーナーの棚に居た。棚から本を掻き出して積み上げている。頭が痛くなる。初めて本屋に来た子供かよ。

「見終わったら、ちゃんと片付けろよ」

「どこに置いてあったかわかんない」

もう無視。面倒見切れない。

「まだ見るのか？」

「うーん、もう少し」

よし、もう見捨てよう。

「おれは先に戻ってるから、見終わったら来い」

「紳の電話番号何番？」

チツ。うっかり「うん」とか言えば、ここで切れたかもしれないのに。

紳は携帯の番号を教えた。

萌映の番号は訊かなかった。興味を持っているなどと勘違いされるのは嫌だからだ。

萌映は「すいませーん」と店員を呼び、白い目の店員からボールペンを借り、紳の電話番号をメモに書き付けた。

紳は逃げるように店を出た。

一人たらたらと帰ったが、それでも22時前には家に着いてしまった。

仕方ないので先に部屋に入る。窓を開けたまま出たようだ。それでも部屋は蒸し暑かった。

ベッドに横になると、心地良い疲れを感じた。萌映が居なくなり心が休まる。うとうととしてきた。

携帯が鳴った。

畜生。

「はい」

「今から行くから」

「だめだ。まだ十時だから。あと一時間半ぐらいしてから来い」

「ばれなきゃいいんでしょ。窓から入るから」

「そんなできもしないことを言うな」

「できるもん。今、居るし」

ガラ！

うわ！

網戸が開いて、萌映が部屋の中に転がり込んで来た。こいつ、マジか。一階の屋根と雨水管を利用しやがったな。

考えてみれば、池で釣れた女だ。窓から来ても驚かない。

「おい、靴ぬげ！ ざけんな！」

着地に失敗し肩を痛打している。ざまあみる。

だが、土足で部屋を踏んだのは本当に萎える。

とりあえず紳は萌映の「置き場所」を作った。

押入れから出したシーツをひき、床に座らせた。靴は適当なビニール袋に入れた。これでひとまずよし。親にも見られなかったし、結果オーライとしたい。

「なんて入り方なんだ。ふざけやがって」

「だって、あたしたち、刺客に監視されてるかもしれないでしょ。

別行動のほうがいいと思って」

「ああハイハイ」

ん？ 「たち」って何だ。さりげなくおれを、お前の妄想の仲間に入れるなよ。

「それで、本屋で手掛かりとやらは見付かったのか」

「んーとねー」

くると部屋を見回している。話を聞いていない様子だ。

部屋は散らかっている。胃の中を見られるような屈辱だが、萌映に屈辱を感じさせられることが、それ以上に屈辱と言えた。だから紳は素知らぬ顔をしていた。別にやましい物は無い。エロ本が何処かに何冊か埋没しているはずだが、むしろ萌映に見られていくくらいだ。エロ本を発見して焦る萌映を、侮蔑の目で見てやりたい。だが、こう思っている時に限り、見付からないものだ。

「いやー、べつに、本屋では見付からなかったねー。ていうか、どういつふうに探せばいいか分からなくて」

「そうだろうな」

紳は応じた。同意したわけではない。萌映の話自体が空想なのだから、見付かるも何もなかつたと思っただけだ。

「いよいよ、あたしの力だけで『物語』を思い出すしかなかったみたいね」

「じゃあ、思い出したらどうだ？」

「それができたら、ずるずるこんな所まで来ていないわよ」  
威張るな。開き直るな。

「あたしは今から『物語』を思い出す作業をする。あなたも考えて」  
「だから、おれは関係ないだろ」

「いいから考えてよ。あたしが主役で、ヒロインで、かつこよくて、かわいくて、万能で、すばらしい仲間や恋愛に恵まれて、敵を倒したり、目標を達成したりする話を。IWは最高の世界なんだから、そういう話だったのは間違いないんだから。いくらあなたみたいなクズだって、脳細胞一個ぐらいいはあるんでしょ。その意味では、あなたが考えた物語が助けにならない可能性がゼロではないんだから」  
萌映は床に落ちていた漫画を読みながら言う。こいつ、やる気あるのか。

てか、スカートが長いから世にも恐ろしいモノを見ずに助かっているが、あぐらをかくのはやめろ。

「おれは『物語』など考えつかねえから、お前が一人でやれ」

紳は言った。

本当は、物語を創作するのが恥ずかしかったからだ。

それに、萌映が主人公の話なんて、気色悪いではないか。

万一、萌映が喜ぶようなストーリーが創作できてしまったら、とんでもない勘違いをされかねない。「やっぱりあたしを好きだと言っただけあるわ。こんなにいい物語を考えてくれたなんて、あなたと出会ったのは運命だったわ」などと言われたらどうする。自殺行為だ。

というわけで、紳はベッドに座り、むっつり黙っていた。

萌映は一人で『物語』を考えていた。

I Wでの『物語』のストーリーを完全に忘れていたため、1から考える必要がある。とのことだ。紳の部屋には漫画がけっこうあり、たまにアニメ雑誌とかも転がっていた。萌映はそれらを見ながら、「この発想はなかなかいいわね」「これはただの萌え漫画ね。読者に媚びているだけね」とか言っていた。参考になりそうな展開や設定を使おうと思っっているらしい。「伝説の魔法剣を持ったメイド少女……。これとか近い気もするけどなあ。思い出さないなあ」「ちがうのよねえ。こういう月並な話じゃないのよ。もっとこう、たまらない緊張感で肌が凍りつくような、そういう完璧な空気が欲しいのよ!」

紳は胃がキリキリしてきた。今にもキレそうな顔で見ている自分がわかった。

どうしてこんな馬鹿らしい行為を真面目に見学しなければならぬのか。『物語』も、何もかも、あるわけがねえだろう。

ついでに言えば、刺客にも追われていると萌映は言っているが、それもあるわけない。

見ている限り、戸沢萌映は極めてだらしなく、無能であり、ついでに不細工だ。放っておいても何もできないのは確実だ。こんな女をわざわざ殺す必要などない。

だからむしろ、最初から刺客など存在しないと考えたほうが論理

的なのである。

……ぼんやりと考えていたら、萌映がこつちをジーツと見ていた。  
「なんだよ」

「ねえ、なんか考えつかないの？ あたしばかり考えたって、限界ってものがあるのよ」

「おれは知らんと言っただろ」

「だいたいお前の『物語』だろう。どうしておれが考えなければならぬ。言いたかったが我慢した。言えば萌映の空想に乗ることになる。」

「だって、あなたの部屋、いっぱいアニメとか漫画とかあるじゃない」

萌映は部屋を見回した。本棚に並んだ漫画や、いま手にしている一年前のアニメ雑誌や、ちよつと古いアニメのポスターなどを眺めた。

そのあと、紳の顔を見た。

「一見、こういうものとは縁が無い顔だけど」

「別に縁なんかねえよ。それに、いっぱいあるわけでもないだろ」

紳は、ムキになっていると思われないように、努めて冷静に否定した。

ヲタクっぽいアニメとか漫画とかは、一昔前に卒業したのだ。

「卒業した」とか言つと「厨二病きた」とか言われそうだが、やめたのだから事実だ。

やめたというか、高校に入ったぐらいから、そういうカルチャーからは離れた。

そつち方面に詳しい熊谷という友人が居て、中学時代はよくアニメや漫画を借りたりもらったりしていた。紳の部屋に残っている物は熊谷の影響が大きい。紳は小山と大川と良くつるんでいるが、熊谷を入れて「四天王」を名乗っていた時期もある（笑）。

だが、のめりこむ気質が強かった熊谷は、高校に入ってから、ますますヲタ的カルチャーに嵌り続け、夢中になるあまり、現実世界

に興味を失った。今はほとんど自宅に引きこもり、高校に来るのは数えるほどである。熊谷はヲタの泥沼にはまり、出て来れなくなったのだ。

紳は熊谷ほどヲタの世界にはのめりこまなかった。もともと鈍感なんだろうと自分でも思うし、熊谷を見てみると尚更思った。熊谷から「これいいよ」と言われ、彼のおすすめのアニメや漫画をよく貸された。まあ悪くはないけど、そんなに感動もしない、いつもそんな感想しかなかった。しかし、熊谷との仲をわざわざ険悪にする必要もないので、返す時は「うん、よかったよ」とか言っていた。

熊谷のように、お気に入りの作品のアプリルポイントを一時間語るなどできなかった。キャラの限定グッズを買うため早朝からヲタ御用達の店に参じることもなかった。蛇足だが、その店の場所は、この前少女と行ったゲームセンターの隣のビルだ。

今は、ヲタ的なアニメや漫画には、あまり興味がなかった。

人間のかわいい女の子には興味がある。おもに工口的な点で。

「これはなんだろう？」

萌映はアンプとスピーカーの間にある漫画を取った。ああ、そこにあつたか、と紳は思った。半年ぐらい前、その漫画をひさしぶりに読みたくなつたが、見付からなかったのだ。ステレオ自体使つてなかったし、見落としたのも無理はなかった。

「絵はきれいだね。どういう漫画？」

「これ、知らないのか？」

当時、ずいぶん流行つたものだ。たしか、紳が中学二年の頃であつた。小遣いを持って駅前の本屋に買いに行ったのを覚えている。

「高校の軽音楽部を舞台にした話だ。部員は五人居る。ユルい部活や学校生活を送り、まったり過ごしているんだが、じつは五人は世界の存亡を握る『鍵』のような存在なんだ。巧妙に隠されているけど、五人の周りの世界はどんどん滅びつつあって、五人は知らないだけで、わりあい壮絶な状況になっている。でもまだ滅びてはいないわけな。世界を滅ぼそうとする勢力があるんだけど、その勢力

と戦う正義の組織とかもあつたりするんだよ。ただ、『鍵』の五人が『自分達に世界の存続がかかっている』ことを知ってしまったと、世界は滅びてしまうという設定になっているんだ。だが、ある時、五人のうち一人がその真実を知ってしまうんだよ。それで、その子は部活に身が入らなくなるんだ。他のメンバーに隠したままでいいのか、自分達だけまったり日常を送っていていいのか、すごい葛藤する。で、五人を利用しようとする勢力が暗躍してきたりとか、いろいろ起こってきて。まあ、読めば分かる。ストーリーやギャグは普通だが、絵はきれいだしな。最後まで飽きないくらいには読めるんじゃないか」

「へえ」

萌映は興味深げに言った。

作品そのものより、解説する紳の様子に興味を引かれた様子だ。

「紳はこの漫画がだいぶ好きなんだね？」

「ち、ちげーよ。てか、当時は相当流行ったし。お前知らないのかわ？」

「言ったでしょ。あたしはIWから来たの。この世界の昔のことなんて知らないわ」

紳は黙った。ばつが悪かった。パンツ姿を見られたような恥ずかしさだ。

「でも、紳もあたしと同類なんだね。ヲタクな漫画とか雑誌とかが部屋にいっぱいあるじゃない。こういう本を隠れて楽しんでいたんだね」

「ちげーから。全然そういうのじゃねーから。そんなに楽しんでもいねえし」

「必死だねえ。お疲れ様です」

萌映は頬をオカメのように膨らませ、嗤った。

紳はもどかしくて体じゅうが痛痒い<sup>いたかゆ</sup>。いろいろ言いたかったが、言えない。ムキになって否定するほど、自分がガチヲタであると誤認されるような状況だ。

「だいたい、ヲタっぽい本が部屋にあったからって、なんでお前とかと同類の扱いを受けなきゃいけないんだよ。おかしいだろ」

「だって、こういう漫画やアニメを愛でているってことは、こういう世界がうらやましいんでしょ？」別の世界に行きたい』って言うてるあたしと変わらないじゃん」

なるほど、理屈ではそうか。

と一瞬思ってしまった。おれはほんとうはそうだったのか？

いや、どうも納得いかない。戸沢萌映と同類とか、あるはずがない。なぜ自分が一緒にされなきゃならない。そんなのは許しがたい。紳は話を打ち切りたくなかった。

「別の世界に行きたいなら、早く行けつつの。とにかく、明日はこの部屋から帰ってもらおうから」

捨て台詞のように言うが、萌映は聞いていない。

「うーん、『鍵』ね、なるほど。今の話、あたしにかぶるよね。I Wの『物語』は、あたしがこつちの世界に来てしまったせいで、壊滅的なダメージを受けている。『物語』の世界ごと、なくなっちゃうかもしれない。……やっぱり、早く帰らないとね」

萌映は本を閉じ、遠い目を壁に向けた。

まったくだ。早く帰ってくれ。

じつに不愉快である。こんな女と同類扱いされては堪らない。

……しかし、なんでずるずると付き合い、家に泊めてまでやったのか。無視して去ったり、警察に届けたりしなかったのか。

紳は分かっていた。

それは、萌映の話を、理屈の上では理解していたからだ。

自分は熊谷に比べれば全然ヲタではないが、全身に占める髪の毛一本分ほどのヲタ素質はあった。そのため、理解してしまった。

理解したし、排除する積極的理由もなかった。

だから萌映を排除しなかった。それだけのことだ。

実際の現実世界のことを考えれば、ある程度以上に突拍子もない出来事はまず起こらない。確率的にはゼロと言えるだろう。いまま

で、萌映が傾倒している分野の出来事は、紳の前にあったことはなかった。

だから紳は、漫画やアニメのような事件が実際に起こるとは信じていない。

世間には、合コンや、恋愛や、エロ的事象はある。だが、この世界とあの世界がどうかという出来事は無い。そして、無かった。あの世界でのワタシはステキだったとか、すごい能力を持っていた、とかいう出来事も無いし、無かった。だから、これからも無い。あるわけがないと思う。そう思っていた。

萌映と紳の趣向が一部被っていたのは事実だ。だが、今はさほど興味はないのも事実だった。

そう、だから、何も起こらない。当たり前である。

萌映は「煮詰まったなあ」と言い、ゴロリと横になった。どうやら、『物語』が思い付くには、まだまだかかりそうだ。

永遠にかからなければいいけどな。

もつとも、『物語』が思いついたからって、萌映に何か変化があるとは思わないが。

……物語、ねえ。

おれが自分を主役に物語を作るなら、どういつのにするかね。やっぱり、学校屈指の美女と偶然教室で二人きりになる、みたいな展開だといいよな。

なんて考えてしまい、かなり気持ち悪い空想をした自分に吐き気がした。こんな妄想をしている暇があれば、早く彼女を探したり作ったりするべきだ。それが今は、彼女というか、顔面お好み焼きみたいなこいつが部屋に居るとか、恥辱すぎる。

思わず汚い空想をしたのも萌映のせいに違いない。萌映が『物語』など考えているからだ。そう思うと無性に萌映が憎くなった。

あーあ。そういえば、明日から夏休みじゃねえか。

夏休みまでに彼女を作るという目標は、今年も流れそうであった。……いや、まだチャンスはある。

明後日の合コンだ。そこで駆け込みで彼女を作れば間に合う。充実した夏休みになる望みはまだある。

合コンには、男子の人数に合わせ、パン屋の女の子が三人来るといふ。仲介役の櫛棗しじょうは来ないそうだ。それは却って気楽だ。知り合いの女子が居るとハメを外しにくい。

当日は、溜めに溜めたりビドローを、トークや自己アピールに変換爆発させ、必ず彼女をこの手にするのだ。パン屋の子たちは可愛い子が多いので期待大である。

「ねえ、ネット見ていい？」

紳が起き上がると、すでに萌映が椅子に座り、PCを立ち上げていた。

こいつ、何していやがる。

「大丈夫。お気に入りとか履歴とかHDの中とか見ないから。興味ないし」

萌映は先回りして言う。ほんとうにこいつは人を自然に苛立たせる。

内心キレているが、無理矢理消させるのも必死っぽい。ちくしよ  
う。

「勝手にしろ」

と呟くしかなかった。

あとでキーボードをウェットティッシュで拭かないとな。

「頭使いすぎて、なにも思い付かなくなっちゃった。この世界のツールでも使ってみようと思つて。『世界』『行き来する方法』とか、『世界』『改変』とか検索すれば、何か出ないかな」

何も出るわけねえだろうが。紳は無関心を装いつつ、チラチラと見ていた。一応、言ったとおり、萌映は真面目に検索しているようだった。座高のある背中を丸め、モニタに顔をくっつけるようにしている。やがて紳は監視に疲れ、また横になった。

「……おい、なんか分かったか？」

ふと様子を見ると、隠していたエロ本を萌映がバアアンと開き、見ていた。

おおい！

比較的恥ずかしい洋物の大判の本だ。いや勘違いされては困る。おれは外人オンリーではなく、あくまで趣向の一部であり……。だが、言い訳は不毛なのでよそう。どうせ……。どうせおれはエロい。

「……エロ男」

「もっとあるぞ。もちろん日本人のもある。見るか？」

紳は開き直った。

図らずも昼間のパワハラのお返しとなった。戸沢萌映は顔を赤くし、涙ぐんでいた。キメエエ！心配すんな、ヒトと恐竜の合いの子みたいな容貌のお前に、欲情なんかしねえ。

「最悪だわ。どうせ男なんて、みんなただの、ぼ、棒なのよ」

戸沢萌映は応酬してきた。ちよつと噛んだな。

「なんだって？よく聞こえねーけど？」

「ぼ、っぼ、棒だって言ったのよ！この、棒！」

壮絶に取り乱している。紳は胸がすく思いだった。ざまあみろ。

この手合いはどうせ耳年増なだけだ。ブスのくせに臆病で、情報だけはやたら集めるが、実際の行為に及ぶとガチガチに緊張するに決まっている。

「お、お、男なんて、みんなしよせん……」

「ああ、そーだよ。そーですが、それが何かー？」

紳は楽しかった。純粹に楽しかった。実際、欲情のかけらも萌映に抱いていなかった。それが誇らしかった。

男が棒なら、女はただの穴だろうが。チクリと、そう言ってやりたかったくらいだ。

しかし、そういう応酬は、飽くまでギャグとしてやるべきものである。戸沢萌映が言うギャグにならないどころか、マジで吐き気を覚えた。

本人もダメージを受けているから特に許すが、本当は戸沢萌映がグロテスクな台詞を口にするのは許せない。

たとえば、櫛棗が白いミルク味のアイス棒を食べながら「男つて、ただの棒よね」と言ったら、紳は萌えるだろう。清涼感すら覚えるだろう。だが、戸沢萌映は同じことを言っではいけない。だいたい、萌映の顔自体が、萌映が最初に非難すべきモノなのだ。分かるかブス。

そつえば今日おれは独白も含めて何回ブスって言ったのだろうか。

ブスは三日で慣れるなんて、とんでもない。事實は、幾何級数的にむかつくだけなのだ。

「あーもうむかつくわ。最悪」

萌映はエロ本をゴミ箱に放り込んだ。ぐったりと座り込む。目や口は半開きだ。テンションが急降下したようだ。

そういえば中華料理屋で怒られた時もこんなだった。この女は、他人には平気で批判やハラスメントをするが、自分が少しやりこめられると、めちゃくちゃダメージを受けるのだ。紳はムカつくと同時にしらけた。

ふと萌映は立ち上がった。机に置かれたフィギュアの箱を眺めている。

「あなたは、単純で、エッチで、ヲタクで、要は最低の人間だよ。ね。やっぱりこの世界は最悪だったことが、今度こそ本当に分かったわ」  
萌映はフィギュアの箱を持ち上げ、床に投げ捨てた。

紳は、しらけている。

こいつ、とうとうキレやがった。

萌映は泣きながら箱を足でつつく。

萌映の足に汚染されるフィギュアがかわいそうだ。

「こんな、ありもしない人形に興奮したりするんでしょ。スカートのパーツ剥がしたりして舐めたりするんでしょ。気持ち悪い。キモチワルイ！ おかしいんじゃない」

萌映の想像のほうに気持ち悪い。そんなことはさすがにしない。おかしいのはお前だ。

フィギュアなんて、取った時点で目的は達成されているものだ。

……あれ？ まてよ。

紳は妙な点に気付いた。

そのフィギュアがなんでここにあるんだ。

さっきゲーセンで少女と取ったフィギュア。

萌映を迎えに行つたあたりから、持っていた記憶がない。と  
いうことに、今気付いた。少なくとも、地元に着いてからは、持っ  
ていなかったのを覚えている。

たぶん、警察署か、公園か、そこらへんで忘れて来たのである。  
それなのに、どうして、さりげなく机に載っていたのだろっ。

「……」

紳は黙ってフィギュアのことを考えていた。すると、萌映には反  
省でもしているように見えたようだ。

「反省したんなら許すよ。反省した？」

ジト目＋抑揚のない声で、萌映が訊いてきた。また発狂されると  
困るから、紳はてきとうに「ああまあ」と言っておいた。死ぬ。

その後、萌映は『物語』を考える作業の第二部を始めた。だが、  
大した物語は思い付かなかった。しつこく助言を迫られた紳は、面  
倒だったが、勇者が魔王を倒す話とかどうだ、と言った。

「そんなありきたりな話じゃダメに決まってるでしょ」

却下された。当たり前だ。わざと却下されるような話をしたのだ  
から。それに気付きもしないとは真性の馬鹿か。ブスで馬鹿か。つ  
ける薬がねえな。

まあ、病気なんだから、仕方ないか。

いつのまにか、紳は眠りに落ちた。

すぐに起こされた。

体感的にはすぐだ。寝たと思つたら起きた。

部屋は暗かった。戸沢萌映が電気を消したのか？ 今は何時だ。

朦朧とした中、戸沢萌映に体を掴まれ、激しく揺すられた。

萌映の影がなんとなく見える。顔が見えないのは嬉しいが、乱暴  
な起こされ方にキレかける。

「ねえ起きて、起きてよ、大変なの大変大変」

「うるせえ。九官鳥かお前は。騒がせるのもいい加減にしろ」

思わず本音の一部が出る。

萌映はハッと手を引いた。

が、また服を引っ張る。

「ねえ、薬のケース知らない？ ないんだけど。どうしようないんだけど。どっかにしまわなかった？ 捨てなかった？」

紳は体を起こす。

「そんなの、知らねえよ。ちゃんと管理しろよ」

「あれがないとやばいのよ。電気つけるよ？ ああああ。どうしよう。ていうか、どうしよう」

萌映は勝手に電気をつけ、あたりあたり、シーツの上を歩く。紳は寝ぼけまなこで携帯の時計を見る。夜中の二時だ。ほとんど眠れていない。

萌映は服のポケットを八回ほど繰り返し探し、「やっぱりないんだ」と青ざめる。

そして、何を思ったか、犬のように這いつくばり、部屋をあちらこちら探し始めた。本や空き缶が放り出され、ホコリが舞う。紳は眉をひそめる。もともと散らかっている部屋だが、勝手に掻き回されるのはいい気がしない。

なにより下には親が寝ている。起こすとまずい。

「明日にしるよ。何時だと思ってんだ。自分で無くしたんだろ」

「ちがうの。だってあれがないと大変なんだよ。困ったわあ」

何がちがうのか不明だし、ぜんぜん聞く気も無いらしい。シーツを捲ったり、机を開けたりする。

ベッド下の棚を開けられた時、紳は萌映の肩を押し、止めさせた。「血迷ってんのか、お前は？ そんなところにお前の薬があるわけねえだろうが」

「あるかもしれないじゃん。だったら紳も探すの手伝ってよ」

「ふざけんなよ」

「紳こそふざけないで。なんであたしに、好きだとか付き合おうとか、言ったの？ 好きなんですよ。探すの手伝ってよ」

「べつにお前のことは好きじゃない」

紳は言った。

本当のことを。

寝起きで機嫌が悪かった。

「あれは、ただのゲームだ。お前をネタにして仲間内で遊んでいただけだ。本気で告白するわけないだろうが」

萌映はキョトンとした。

その顔を見るに、今まで本気にしていたのは明らかだった。

「……そうだったの？」

紳は頷いた。

気まずさよりも、眠かった。

「そうかもしれないって、思ってた」

萌映の声が震えた。

「あたしを馬鹿にしてたんだ、してたんだ。今もそうなんだ。どうせあたしを馬鹿にしてるんだ。そーでしょ。ほんとに薬の隠し場所を知っててにやにやしてるんでしょ。出してよねえ。返してよ。お願い返して。お薬返して」

「知らねえよ」

「どうしてよ？ どうしていじわるするの？ あたしがブスだからでしょ。あたしが馬鹿だからでしょ。馬鹿にしてるんでしょ。もう嫌だわ。この世界は全部嫌だよ！ あなたたち全部醜いよ！ いじわるしなくてもいいじゃない。あたし自身、この世界から汚損されている被害者なんだよ。心身のレベルも、能力的にも、IWに居た時のあたしと比べたら、この世界では天国と地獄なのよ。もしあたしがIWでのキャラのままこの世界に落とされていたら、世界から脱出する方法を瞬時に思い付き、実行できていたわ。だけど、いかんせん、この世界のあたしは五流六流七流……。いや、もつともつと下かも。あたしはこの世界では『全身が枷』の感覚しか無い。わかるかな。あたしをいたわってよ。気付いてよ。あたしは、ほんとうに、心から……」

萌映は言つのをやめた。いや、言えなくなった。ハア、ハア、という荒い息は詰まり、吐いた。

誇張ではなく、胃の中のを、吐いた。

黄色と白の液体が広がり、酸っぱい臭いが充満した。それでも、薬があきらめ切れないように、紳にすがりついた。もう紳は我慢できなかった。

「ああ、うるせーなあ、この病気ヤロー」

口が勝手にセリフを連ねた。

「口を開けば弱さ自慢かよ。じゃあ言つてやるよ。お前は弱いんだよ。薬漬けで社会不適應のウジ虫みたいなやつだ。なのに非難だけは一人前にしゃがつてよ。そんなにお前は偉いのか？ ああ、わかつてるよ。『どうせ病気だからしかたがない』だろ。お前は病気だよ。『自分を大した奴だと妄信しないと生きていけない病気』だよ。そうだろ？」

紳は息を継いだ。

「妄信も、誇大妄想も、劣等感の裏返しだ。お前は自意識が強くて、人一倍、劣等感を感じるんだ。感じているに決まっている。だから、他人に欠点を言われるよりは、自分で先回りして、『あたしは弱い』と予防線を張るんだ。本当に言いたいのは『弱い』ってことじゃないだろ？ 『あたしをいたわって』とか、『あたしをお世話して』って言いたいだけだろ？ お前は、結局、甘えているだけだ。セカイがどうかという作り話も、そのための壮大な手口だ！ 大したもんだ。くだらねえけどな」

萌映はまばたきもしない。

目薬をさしたように涙が流れている。

ざまーみる、もっと言つてやる、と思つた。

「周りを見下したければ、いいぜ、見下して。そうじゃなきゃ、生きていけないんだろ？ ほんとうにおまえは小さい奴だ。かわいそうだが、ブスなお前の顔を見ると、同情する気も起きねえよ。好きにしる。見下されてやるからさ。お前にだつて内心の自由ぐらい

は認めてやるよ。お前にだって、おれをオカズにしてオナニーするぐらいの権利はあるはずだ。そのかわり、オナニーしたら、二度とおれに関わるな。おれの前に現れないでくれ。正直、お前なんかを構ってる暇は無いわ」

紳はまた息を継ぐ。

「だけど、かんがえてみると、お前にも唯一の価値があつたわな。それは『お前の糞さ加減自体』だよ。おれは、自分の将来像も、なりたい職業もない、一般民衆の中の一人だが、お前のような奴にはなりたくないという最低限の目標だけは持つことができたわ。ははは」

萌映は涙をダラダラ流して硬直している。

こいつ、電池でも切れてるんじゃないか？

あと一息。

「まあ悪く思うなよ。お前には罪はねえって。お前は生まれつき全部が罪だし、害だつていうだけさ。言ってみれば、お前は生まれついでての真正の糞なんだ。そのこと自体は罪じゃないんだ。でも、『どうせ生まれつき糞だから』って、お前は言い訳するんだろ。そうやって自己主張をするんだろ。しろよ。誰か助けてくれる奴が来るまでな。甘えさせてくれる奴が来るまで、物乞いみたいにブツブツ言っているよ。お前みたいなブスな奴にも目を止めてくれる奇特な御主人様が現れるといいけどな！ ははは！！ まったくなあ、弱い奴が一人前に劣等感とか持つてるんじゃないやねえよ。ダンゴ虫とかかわらじ虫みたいに、人目につかない物陰に隠れてるよ。生きてるのがやっとの日陰の草みたいないな一生を送って死ね。自分を勘違いして見積もってんじゃないやねえよ。ただの汚物のくせによ。ああ、ゲロくせえ！」

過激なセリフが噴水のように出た。

おれはこんなことを思っていたのかと、言いながら気が付いて、怖いほどだった。ちょっと言い過ぎた。いや、相当言い過ぎた。紳は反省した。だが、怒りに任せてブチまけ、スッキリしたというこ

とも、また言わざるを得ない。

これぐらい言っても、今まで受けたストレスから引けば釣りが来るくらいだと思う。

とはいえ、後味は良くなかった。

静かだった釣り場に大きい石を投げ、ぐちゃぐちゃに荒らしたよ  
うな気分だった。

「どうして。本当なんだよ。あたしのIWの話」

萌映は俯いて言った。

「そっだよ。どうせ紳はEWの人間なんだもん。あたしの気持ち  
が分かるもんか。分かるわけないよ。でも、あたし。あたしは。あ  
たしはああ、あたしいい、うう、ううっ、うううううっっっ」

泣き真似かどうか知らないが、手で顔を隠している。

「ううう、うぐっ、ふぐっ、むふっ、ふんっ」

しゃくりあげる声。

萌映は顔を隠したまま、靴の袋を持ち、窓へと歩いて行った。

のろのろ、芋虫みたいに窓枠をまたぐ。

溶けるように暗闇の中に居なくなった。

紳は部屋の掃除をした。

夏休みに入つて二日目。

きょうは待ちに待つた合コンの日である。

男女ともA駅に集まり、町に繰り出すというコースになっていた。紳には「またA駅界隈か」という感じた。

紳は一时间ほど遅れて合コン会場に向かつていた。

小山に電話をかけると、駅の近くのアーケード街にあるファミレスに居ると言う。安っぽすぎる。しかも、地元にもあるファミレスである。もうちょっと工夫があるだろうと思う。ひよっとして、あまり芳しくない流れなのだろうか。大川が一人ですべりまくっているとか。だったら経費節約の流れに向かうのも納得できる。

どうも、期待しないほうがよさそうだな。紳は予め自分を落胆させておき、ファミレスのドアをくぐつた。

客で混雑する店内。紳はすぐに、あそこだ、と分かった。……分かつてしまった。

なるほど、こんなわけか！

女性陣は三人居た。

二人はまだよかつた。そこそこ可愛い子が一人、その子の親友という、可愛くもない子が一人だつた。それでも、こちらが目を瞑れば、性的欲求の対象として見れないことはなかつた。

だが残る一人が頂けなかつた。いくらなんでもまずかつた。

通路にはみ出した特設の高椅子に座っているのは、少女……いや、幼女だつたから。

「りえちゃん」が合コンの場所に居たのである。

本名は何て言ったか。たしか、なんとか・ラブリエ・なんとら、という長い名前だった。

てか、なんで居るんだ？ 偶然にしてはおかしくないか？ 異国風味を漂わせるたわわな髪が、ふわりと振り向いた。

「あ。紳おにいちちゃん。また会ったね。二日ぶりだね」

ぱっちりとしたキャラメル色の瞳は普通に嬉しそうだ。特に驚いた様子はない。

紳は固い笑顔でテーブル全体に会釈をした。おれは細かいことを気にしすぎているのか？

「ただ、りえちゃん……ラブリエは、少なくともパン屋の女の子ではない。どうして今回の合コンに来ているんだ。おまけに、メイドっぽい白黒のドレスがバッチリ似合っている。ここの店員の制服と見間違うではないか。けしからんもつとやれとか微妙に思うじゃないか。」

「いや、そうじゃない。まずこんな小さい子が合コンに来ちゃ駄目だろ。誰が呼んだんだ。」

「なんだ、二人は知り合いか？」

小山が言う。

「あ、いや、なんつーか」

「紳おにいちちゃんとは、一緒にゲーセンに行った仲なの」

ラブリエは躊躇なく暴露し、はむ、とフレンチトーストにかぶりつく。

「おー、カップルだー」「まさかの」「早くも」「なんや、隅に置けんのお」など、合いの手が入る。男女ともにテンションが高めである。途中から合コンに入るのは少々きつい。

紳は男性陣に詰めてもらい、椅子に腰を下ろした。

「遅かったな。前もって言うてもらったから、支障はなかったが」

「ああ、野暮用でな。ほんと悪かった」

小山と話していると、大川の大声が割り込む。

「おい、そのイケメン共、二人でしっぽりやっとなるんやないで。」

そいじゃ、改めて自己紹介タイムや。盛り上がったて行くで、イエー！

イエーとか一人で言う大川は寒い。だが、このような場では、先頭に立って矢傷を受ける役回りは大事だ。だが、ラブリエは言うまでもなく、女性二人もパチパチ拍手したり、割合盛り上がった。大川にはこの調子で走り（滑り）続けてもらおう。

もともと、大川は何の実害もなく今回の合コンに参加している。陰には紳の「罰ゲーム」があるのだ。

だが紳は、待ちに待った割には身が入らなかった。女性陣に関しては、一人はそこそ可愛いので全然ストライクゾーンであるが、いまいち執着する気にならなかった。たぶん、いや確実に、ラブリエが居ることが影響している。

女性陣から聞いた話をまとめるところだ。

りえちゃんはパン屋のお得意さんで、バイトのみんなと仲がいい。「櫛さんの知り合いの人達と遊ぶ」企画があるという話をしたところ、「いきたい」と所望され、参加に至ったということだ。子供のお客を合コンに連れて来る店員もどうかと思うが、逆に言えばそれくらい親しいということでもある。じつは、小山が櫛から聞いた情報として、「スペシャルゲストが一人居る」と伝えられていたが、正体は年端もいかぬ少女であった。しかも知り合いであった。

だが、子供を交えてファミレスとは、まるでレジャーである。

紳は自分を鼓舞してみたが、テンションは上がらなかった。ラブリエを見ると、ラブリエを「刺客」と認定した戸沢萌映のことを考えざるを得なかった。萎える要因は、そこだった。

興味の失せた合コンほどつまらないものはない。紳は、一応はニコニコしながら、矢のように飛び交うトークに耐えた。一次会なのに大川が下ネタに走っていた。やめとけー。だが、女性二人も嫌がっている感じではない。卑猥な語そのものこそ口にはしないが、討てば響く返しを見せ、大川を更に乗せる。紳は横目で女性陣を見て、なんとなく値踏みしてみる。もっと恥じらう素振りがあれば、もっと

と欲情するんだが……。

「たのしいね。『ごうこん』というのは

という眩きが聞こえた。

ラブリエが血の滴るステーキを頬張っていた。この少女、意外と食うな。

二次会はカラオケに行き、ひとまず今回の合コンは終了となった。六人は道すがらだべりながら、散会する方向だ。

大川はニタニタしていた。ちやっかりと収穫があつたに違いない。異性的な意味で。「わしはあの子とまた遊ぶで。胸と足がええわ」とか言っていた。「あの子」というのが誰か知らないが、興味もなかつたので訊かなかつた。パン屋の二人のどちらかであろう。

大川は一人で帰つたが、小山は女性陣を送つて行くと云う。方向が同じでもないはずだが、基本的に小山は全体に目を配れる男だ。だから今回も幹事みたいなことをやっていった。

というわけで、紳は電車に乗つて地元に戻ることにした。

家がパン屋の近くだというラブリエに同伴するのは、紳の役回りになつた。別に嫌ではなかつた。子供を一人で帰らせるのは心配だ。それに、ラブリエは愛嬌がある。小動物のようどこか放つておけない。誰かとは正反対だ。

「刺客」？

はは。んなわきやねーって。

電車から降り、暗い地元の町を歩いていく。

夜なので目立たないが、隣にはメイド服を着た少女が居る。

服と同じ白黒模様の傘をなぜか差している。ファミレスでは白金色に見えた髪は、屋外では淡い銀色に輝いている。

壊れたコンクリートの道をゆっくり登る。暗いのでパン屋は見えない。すでに通り過ぎたはずだ。単調な水銀灯の明かりを数えるようにして、T池のそばまで来た。

「りえちゃん、君の家はどのあたりだ？」

紳は訊いてから、ふと質問がおかしいことに気付いた。

そういえば、少女は前、路上生活だと言っていた。さつきは、パ  
ン屋の近くに家があると言ったが、それはどういうわけか。

「もうすこし」

暗がりでぐるぐると回る傘が、先に行く。林の中へ入った。道は  
砂利になった。紳は訝りながらもついていった。

池を見下ろす広場に出た。

辺りは舗装され、東屋とベンチが無駄に整備されていた。一本あ  
るLEDの街灯が煌々と光っている。

こんな所があったのか、と思った。行政が予算の消化のために作  
ったとは思えない公園だ。

「じゃあ、ここでいいかな」

「こんなところでいいのか？」

「うん。送ってくれてありがとう」

ラブリエはぺたんくとアスファルトに座った。

メイドスカートが丸く地面に広がった。

「ところで、おにいちゃん、ちょっと訊いてもいい？」

「ん、なんだ？」

「おにいちゃんは、わたしが醜いジジイやババアだったら、送って  
くれる気になつたかな？」

ラブリエはニコリと笑い、首をかしげる。

不意打ちのような質問だった。なぜか紳は腹のあたりがズキツと  
した。他意は無いのだろうか、自分の浅薄な本能を見透かされたよ  
うで、戸惑った。

「も、もちろん、送ったぞ。ジジイやババアでもな」

紳は咳き込み、胸を張って答えた。……たぶん、送ったはずだ…  
…よな。

ジーツとラブリエは見ている。艶のあるキャラメル色の瞳。なに  
か、内臓の襲まで見られているような感じがする。黙り込んだ自分  
に、紳は気付く。

「ごめんなさい。悩んじゃった？ 気にしないで。言ってみただけ」

ラブリエはカラカラ笑った。

「悩んじゃったんなら、あやまるよ。でもねー、もし、おにいちゃんを送らないって言っても、わたしは怒ったりしないよ？ おにいちゃんは何も悪くない。悪いのはね、美しいものとか、醜いものを写しちゃう、おにいちゃん目だよ。わたしを送ってくれたおにいちゃんの気持ちには、少しも傷がつかないよ」

ラブリエはまた笑顔で紳を見た。

「そ、そうか」

フォローされたのだろうか。とりあえず愛想笑いを返す。

なんとなくバツが悪い。話題を変える。

「こんな所で寝るつもりか？」

「うん。とりあえず、きょうはここに居ようって」

そういえば、屋台はどうしたのか。町に置いてあるのだろうか。

「だが、こんな所じゃあ、物騒だぞ」

「ん、大丈夫だよ。寝る場所はあるから」

ラブリエは背中に傘を差し込み、しまった。

長い傘だったはずだ。

どついう傘の、もしくは背中の構造になっているのか。呆気にとられた、その時、

眩しい光が迸はなった。

うわ、と驚き、目を閉じる。

目を開けると、ラブリエの様子が変わっていた。

左腕には太い紫色の腕章が巻かれていた。

今まで、無かったはずだ。腕章には、ラブリエの髪と似た色で、細かい文字が刺繍されている。読めない記号が多いが、かろうじて読み取れるアルファベットがある。……G、O、M……。ゴム？

「きみには改めて言おう」

腕章が出ただけではない。「おにいちゃん」と呼んでいたあどけなさは消えた。ラブリエは、変貌した。

全体の雰囲気が変わったのだ。目は射抜くように鋭く、声は深み

を増した。紳と対等か、それ以上の立場から語るような声だった。

だが、ふと見ると、やはり幼い少女なのだ。

そのめまぐるしいギャップに当惑する。

「おいおい、こないだの続きかい？ またアニメのヒロイン気取りなのかいラブたん？」みたいな、軽々しいツッコミを許さない気配があった。 はつきり言おう。紳は、動揺していた。

「わたしはGuardians Of Mankindの中間幹部の位置に所属する【世界管理者】、である。自分で言うのもなんだが、組織の仕事を腕については、そこそこのものだと思うている」

「……………あ、ああ……………？」

横文字のところは流暢すぎて聞き取れなかった。それより、どういふ反応をしているのか分からない。今までみたいに子供を相手にする調子でいいのか。抵抗感がある。

「わたしがこの地方に来たのは、GOMの密命を受けてのことだ。中でもこの町で潜入調査する必要があると判明した。職務の完遂までは滞在しようと思う」

ラブリエは、腕章を付けた腕をかざした。

夜空に四角い物体が現れ、紙風船のように、ふらふら下りてきた。LEDの光を浴び、着陸したのは、少女の屋台だった。

「んなバカな……………っ！」

さすがに紳は叫んだ。今の屋台の動きは、完全に重力を無視していた。というか、どこから現れたのか？ 浮いていたとでもいうのか？ これはイリュージョンか？

待て。とにかく落ち着け。

「……………ていうか、そういう話を、き、君がだな」

「ラブリエでいい」

「オホン。ラブリエ。なんでそういう話をしたり、屋台が降るのを見せたりするんだ？」

「秘密を明かしたいのに明かしてはいけないという法はあるまい」

「そうじゃなくて。なんで、おれなんだ。何の利益があるんだ？」  
真つ当な疑問である。

なぜふつうの一市民の紳が、あからさまにふつうでない人種から  
コンタクトされるのか。あまつさえ、秘密？を明かされるのか。

「いい質問だね」

ラブリエはメガネをクイと上げた。街灯を反射してキラリンと光  
る。伶俐な印象だ。

時にラブリエは見掛けよりも何歳も大人っぽく見える。紳が外国  
人の顔を見慣れていないせいなのか。

「じつはね、わたしには、きみと関わらなければならぬ理由があ  
るのだよ」

「それは何なんだ？」

「うん、それだ。ちよつとわたしを見てくれるかな？」

と、ラブリエは言った。

紳はラブリエの顔を見た。

見るほどに不思議な顔だ。子供と大人の可愛さが混じり、えもい  
われず発酵した色香があった。どちらにも見えず、どちらにも見え  
る。ハイブリッドだな……。

ラブリエが近付いて来て、たぶん爪先立ちをして、紳に唇を合わ  
せた。

「……！」

紳はビツクリして腰を引いた。

というか、腰が抜けたらしい。

べっ、と舌を覗かせ、ラブリエは自分の人差し指を舐めた。

「こういうことさ」

ほんのりと顔を朱に染め、満足げに笑う。

「わたしは、きみみたいな男が好きだよ。だから、きみと会った時  
から、深く関わると思ったし、秘密を明かすのも当然のことだ。……

…これでいいかな？」

「……！？」

紳は目を白黒、曖昧に頷いた。

情けないことに、何も喋れなかった。

「そして、きみもたぶん、今はわたしが好きはずだ」

え？ そうなのか？ 紳は自分に問う。だがわからなかった。ラブリエに訊こうか？ それでは本末転倒だ。ラブリエいわく、紳はすでに好きらしい。

言われてみれば、頭の中が熱くて痒い。ラブリエの顔を直視するのが痛い気がする。眩しい気もする。じゃあ、つまり、そうなのか、まさか、ありえない。

完璧に予想外だ。

この歳の少女にキスされるなんて思っていなかった。

「納得してもらえたら、いいのだが」

ラブリエは言った。謎めいた微笑は、仄かに自信なげであり、それもいたく電撃的だった。

驚きと疲労感で脳味噌がごちゃごちゃに洗濯された。

頭が真っ白だった。なんで不思議なことができるのかとか、なんでおれなのかとか、どうでもよくなった。その意味では、紳は確かに納得させられた。

こんな少女に背伸びさせ、好きだと言わせ、キスまでさせて、無<sup>む</sup>碍<sup>げ</sup>に撥ね付ける真似ができようか？ いやできない。できる奴が居たら鬼畜だ。

少なくとも、紳はラブリエに小動物のような保護欲を感じた。そして、今の場面を楽しんでいたことを、認めなければならぬ。

ラブリエは紳を見てクスツと笑った。まるで、内心を読んだかのように。

「というわけで、しばらくはこの町に居るつもりだよ。標<sup>ターゲット</sup>的を暗殺するまではね」

「そうか」

紳は何気なく答えた。

「って、何だと？」

「ノリツッコミとは、今時古くはないか？」

ラブリエは腰に手を当てて嘆息する。

「わたしはGOMに雇われた暗殺のエキスパートだよ。ふつうの会社でいうと課長代理ってところさ。ちよつと汚れ仕事だからね。世界管理を円滑に進めるため、邪魔になりそうな人間を殺すのさ」

「ははは、こいつめ、どこでそういう物騒な言葉を覚えるんだ？」

あんまりお兄さんをからかっちゃいけないな。だいたい、暗殺って公言したら暗殺にならないじゃないか。それに人を殺しちゃいけないんだぞ」

などと「常識」によるフォーマットを借り、紳はラブリエをからかった。

正直、ラブリエの言っていることは、うすうす本当だと感じている。そのくらい、ラブリエは不思議な人間だ。

だが、ふつうの人間の紳は、骨の髄まで「ふつうの」応答が染み付いているのだ。

「人を殺しちゃいけないという常識は、GOMが広めたものだよ。そして、その常識を疑ってはいけないという常識もね……。当のGOMは、バシバシ人を殺しまくりさ。暗殺のことを言ったのは、公言したわけではない。きみだからさ。きみはわたしの『特別』だからね」

ラブリエは茶菓子でもつまむようにさらつと言つてのける。

「わたしの特別」というセリフに、紳は妙な感じを覚えた。前に何処かで同じことを言われた気がした。

「とはいえ、あまり気にすることはない。きみが殺したり殺されたりするわけではないからね。自己紹介をかねた雑談と思ってくれ。わたしたちは、あまりにも、ふつうの人間には馴染みがないことをしている。いつそ『ごっこ遊び』と思ってくれて構わんよ。『ごっこ遊び』か、それとも『本当』か、部外者には見分けるのは不可能だ。部外者は降ってきた結果によって推測をするしかない。……おつと、少々饒舌が過ぎたな」

ラブリエは屋台をいじりだした。

そういえば、この屋台を広げているところを見たことがない。ちゃんと営業しているのだろうか。訊いてみると、おいおいね、と答えた。

「屋台は暗殺の副業みたいなものさ。ゆっくりやろつと思つよ。夏休みだからね。客が来ないわけでもないだろう」

「そうか」

暗殺の副業、か……。どう応じたものか。会話の距離感がつかめない。

ラブリエは、屋台の下部の蓋を外した。

ちょうどトンネルのように、屋台を貫く穴が現れた。

ラブリエは器用に足から潜り込み、顔だけを覗かせた。

「紳くん、きみは名前のとおり紳士だ。パン屋ではパンを譲ってくれたし、ゲームセンターでフィギュアを取ってくれたし、今日も送ってくれた。とても嬉しかったよ。正直、濡れてしまっただくらいだ」

「え？」

湿った流し目で一閃された。ギョーンと心臓を切られるような熱さが走る。緩急自在だな、と思う。ひよつとして、ものすごく男の扱いに慣れているのかもしれない。

「おやすみ。帰りは気を付けて。バイバイ」

「あ、ああ。そこで寝るのか？ 風邪ひくなよ」

ポヤツとしつつ、型どおりの言葉をかけた。

もどかしい。言いたいことは他にある気がした。

ラブリエは、頭まで穴の中に潜り、見えなくなった。魚みたいである。

「お、おい。ラブリエ」

もう一度、呼びかけた。

「はい」

またラブリエが顔を出した。

「あのな。ちょっと訊きたいんだけど、いいか？」

「なんだい？」

さつきから考えていたことだ。

ラブリエへの個人的な好悪は置いておいて、訊いておかなければならない。

紳は面倒ごとは嫌いだった。だが、最近までの事情と、ラブリエの身の上を聞いた以上、問わないわけにはいかない。

あの写真の意味。

「君の『暗殺ごっこ』だが、標的はどんな奴だ？」

「きみに言っても分からないだろう。『カミカミ』という標的ターゲットなんだ。『カミカミ』の特徴は、わたしに勝るとも劣らずカワイイ女の子の容姿をしていることだ。しかし、容姿とは裏腹に、『世界支配』の能力を持つ恐ろしい女だよ。……『暗殺ごっこ』の『設定』では、そうなっているよ、ふははははは」

「そいつは確かに、知らねえな」

紳は安堵の溜め息を漏らした。

かわいいという時点で、あのブスではない。あいつの心配は絵空事だったと証明された。……ん？

「それでは改めて、おやすみ」

「ああ」

紳は帰途についた。

宅地への上り坂を歩いた。

紳は思っていた。

残念ながら、今晚のおれは完全におかしくなったようだ、と。

世界管理者の暗殺者。世界支配者の暗殺。ふつうに言って、とんでもない妄想だ。どこかの誰かが垂れ流していた妄想と大差ない。

だが、紳はラブリエの「妄想」は信じていた。

理由は、明白だ。

ラブリエが、かわいいからだ。

かわいいから、受け入れてしまった。許してしまった。いみじくも、ラブリエ本人が最初の質問で指摘したように。あの質問には、

「わたしがかわいいから送ったのだろう？」という裏の意味があった。しかも、そう言い放ち、許されるかわいさが、ラブリエにはある。

ラブリエは、かわいい。かわいければ何をしてもいいと断定できるほど、紳の人生経験は広くはないが、ほとんど許される。もうそう断言してしまおう。対照的に、ほとんど許されない戸沢萌映という人間を、紳は知っている。あのブスさと、ラブリエのかわいさは世界の事象の中でも最大級と言えるほど、雲泥の差だ。ここまでの差を開かせるくらい、どうして世界というのは、残酷にできているのか。そして、かわいさというものは、そんな残酷さも帳消しにしてしまうのであった。

ちなみに、おれはロリなのだろうかと思ひ、落胆するまでには、さほど時間を要しなかった。

いつそのこと、ラブリエが紳の判断力を狂わす魔法使いだとしたら、信じたいくらいであった。いやちがう、あれは保護欲だ、小動物を守りたいのと同じなんだ。紳は打ち消した。

一方で、たしかにラブリエに心の何割かを占められている自分も、紳は認めていた。広場での場面が思い出され、興奮や戸惑いの残りカスを味わった。

そのうちに、ふと疑問が起きてきた。

ラブリエはどうして、おれを好きなんだ？

べつに、紳以外でもいいはずだ。紳は、自慢ではないが、何の取り柄もない。取り柄どころか、金髪以外に特徴もない。好きに理由などない、と一般的な解答を与えてみようか。それでは安心できなかった。おかしくないか、おれを好きになるなんて、ふつつあるわけがないよなあ。

本当は、好きでも何でもないんじゃないか。ただ単に、好きと言いたい気分だったとか、キスしてみたい気分だったとか、そういう理由なんじゃないのか？ そう疑ってみると、ラブリエは誰にでも好きと言ひそうに思えてくる。とても気軽に言ひそうに思える。疑

問は不安に変わった。

心が掻き回されていた。

最低のゲス男ね。あんな子供に欲情してるなんて。

ここに戸沢萌映が居たら、そう言われるだろう。

だが、戸沢萌映は居なかった。

戸沢萌映が紳の家を去ってからどうなったのかは分からない。

二日(三日弱)経っていた。電話も知らないし、居場所も分からない。連絡のつけようはなかった。学校に来るかどうかを知ろうにも、夏休みに入ったので学校はなかった。

いったい、戸沢萌映とは何だったのだろうか。

紳のもとからは、完全に消えたように思えた。あれは、イリユージョンだったのだろうか。小山や大川や、ほかの生徒の記憶からは消えているのだろうか。そうかもしれない。別に訊こうとも思わないが。

ふつ々の暮らしが返ってきた。最初から何も無かったかのように感じることもある。

だが、紳は何となくすつきりしなかった。戸沢萌映が今どうなっているのか、たまに考えてしまう。明らかに「破綻」と呼べるような別れ方をしたせいだろう。

そして、今は、「断絶」している。

しかし、紳の部屋には、きついフルーツヨーグルトのような、嘔吐物の乾いた臭いが残っていた。

確かにイリユージョンではなく、紳が相手をした戸沢萌映という人間は存在したのだ。

今、昼前である。紳は釣りに行くこうと思った。ゲロのおいのする30度にもなる部屋に居るのは参ってしまう。

自転車に跨り、池に向かう。なだらかな下りが続くので、漕がなくてもいい。寝起きの体には好適だ。

一人寂しく釣りか……。最近マンネリも感じる。せっかくの夏休みなのだ。

合コンで彼女をと意気込んだものの、彼女ができたわけでもなかった。

まあ、ちよつと不思議な出会いはあったが、翌日になってみると現実感はない。

影ひとつないアスファルト。もくもくと湧く夏の雲。その真似のように緑の葉が繁る。今思うのは、暑い、だるい、だけである。

その時、視界の隅で、見慣れぬモノが蠢いた。紳はブレーキをかけた。

畑がある。そんなに大きくはない。トウモロコシとか、カボチャが植えられている。

見ると、カボチャの株が動いた。  
ように見えた。

じつは農作業をしている人間だった。服がカボチャと同じだから見間違えたのだ。

って、なんだ、そりゃ。

紳は自己ツツコミしたが、事実カボチャと同じ　そうとしか言えなかった。そんな奇抜な服装を誇る人間は、知る限り一人しか居ない。

「ラブリエか？」  
「む」

ラブリエも紳に気付いた。立ち上がり、畑の中で手を振る。

鮮やかな緑色のドレス。緑色の帽子。帽子を飾っている、目の覚める黄色の花。カボチャ畑の中で、カボチャを体現している服だった。雲と同じ色の髪だけが、異彩を放っている。

「やあ紳くん。どうだいこの服は？　似合うだろう？　生ナマの花を付けるところがオシャレだ。カボチャの花はお昼には萎んでしまうからね」

たしかに鮮やかだが、公衆の前で着るには勇気が要りそうだ。

紳は苦笑しながら、普通に笑いもした。ラブリエを見た時、工口的な意味で興奮するより、大らかな意味の安堵感を覚えた。そのこ

とに安心した。

「何をやっているんだ？」

「見ての通り、カボチャの手入れだよ」

「ここは君の畑か？」

「いや、ぜんぜん知らん」

「ダメじゃねえかよ」

「いいではないか。生育の手伝いをしているんだ。実がなった暁には実を食する。自然の理だ」

「うまい言い回しだが、それはたぶん犯罪だ」

「固い事を言うな。李下に入らずば冠を得ずとも言う」

ラブリエはカボチャ服の腕を広げる。

それっぽい故事成語だが、紳は浅学なので意味は知らない。

「まあ、気にするな。わたしとカボチャは古い仲さ。もつとも、カボチャだけではないがね」

ラブリエは緑色の靴でぺたぺたと畑から出て来た。

軍手をポケットにしまいながら言う。

「きみはこれから何処に行くんだい？」

「ちよつと釣りに行くところだ」

「そうか」と言った瞬間、ラブリエは自転車の荷台に尻を乗せていた。

「わたしもついていく」

紳の胸に腕を回し、ぴたつと寄り添った。

「ああ、構わないが」

と言いつつ、紳は照れた。が、照れるのは罪のような気がした。

……べつに、ロリなわけではないのだ。ラブリエがあまりに照れを知らないから、こちらが却って照れるだけだ。

紳はペダルを踏むのに集中した。自転車が揺れると、背中にメガネの硬い感触が接した。風が後ろから吹くと、若草のような髪の毛が鼻を触った。

先客が居た。

金網の穴をくぐると、棕は振り向いた。

「あつ、紳君。ひさしぶり」

「なんだ、少し見ない間に焼けたな」

「僕、毎日来てるよ」

ラブリエは、紳の後からピヨコンと柵を越えて来る。

「最近、紳くんの友達になった『りえ』です。よろしくね」

何か水商売みたいな軽快なノリである。どうやら、紳だけに改まった口をきくようだ。

「うん、よろしくね。紳君の彼女なの？」

「えへへ、それは秘密です。そのほうがミステリアスなキャラが立つから」

棕はラブリエに笑い返す。照れる様子もないし、ラブリエの服に目を見張るわけでもない。この少年、たまに不自然なくらい自然体である。

というか、彼女を連れているように見えるのだろうか？ 棕には年上の外国人と感ずるのかもしれない。ロリという考え方をしないのは当然か。

ラブリエは何か謎めいた返答をしている。ついでに、キャラが立つと言うが、誰に立てるのか謎だ。

「わたしはすこし引いて見ている。二人は存分に釣ってくれ」

と、ラブリエは言い、遠目の木陰に座った。  
紳も釣り道具を組む。

とりあえず手近の堰堤にて釣り始めるが、反応は全くない。それで一時間ぐらい経った。

飽きてきた。

あーあ。なんかうまくねえな。

紳は池に小石を投げた。鏡のような水面に波紋が広がった。

きょうはさつぱりだ。昼前なのにやたらと暑い。魚もぼんやりと表層を泳いでいたりする。魚も暑いのだろう。こういう時は釣れないのだ。

椋は堰堤から居なくなっていた。場所を移りながら釣っているのだろう。若者のエネルギーには感服する。

そろそろ上がるかな。

椋の様子を見に、池の奥に行ってみることにした。道具は置きっぱにした。誰も盗らないだろう。

椋は、黙々と釣っていた。

一見ふつつの顔だが、めくれば充実感が溢れそうである。

「どうだ？」

「一匹だけ。20センチぐらい」

ルアーを巻き取り、間髪入れず投げる。

「ねえ、おとといさ、32センチ釣ったよ」

「サイズ上がったな」

「池の奥に、葦が生えてる所があるでしょ。おとといの朝、あそこで」

「今日は厳しいぞ。今からは暑くなるだけだ。水面見学になるのがオチだ」

上がったらどうだと、さりげなく水を向けた。

「大物狙いだよ。紳君、大物は昼がiiiiって教えてくれたから」

「あー」

それは、立ち読みした釣り雑誌の受け売りだ。大物は意外に昼前に釣れるという、バス釣りのプロのインタビューが載っていた。警戒感が強い大物は、わざとほかの魚と違う時間に行動するのだという仮説だった。

それを信じて椋のように通うほど、今は情熱もない。最近はこの池で40センチ以上を釣ったこともない。

「……この池にも、70センチ台は居るんだがな」

「えーっ、それほんと!？」

「ああ。70弱つてところかな。人間を馬鹿にしたみたいに悠々と泳いでるのを見てる。60クラスのやつが三匹並んで泳いでいるのも見た」

「へーっ。そんな大きいの居るんだ! すごいね。絶対、釣る」

棕は決心したように言った。

「そういえば、すごいルアー買ったんだ。三個だけ限定入荷したやつ。蛇の皮で作ってあるんだって。二千円もしたけど買ったやつた」

「それじゃー、今月は何も買えねえな」

「うん。でも、すごい釣れそうなルアーだよ。紳君にも見せたいな」

「いま、持って来てるか？」

「ううん、無くすと困るから、寮に置いてきた」

「ダメじゃねえか。まあ、コレクター的な心情は分かるけどな」

「今日、よかつたら寮に寄らない? ルアー見せるから」

「あー、まあ、暇だったらな」

多少めんどろだが、寮は近い。それに、中学生の純粋な好意に水を差す趣味もない。寄ってやっても構わなかった。蛇皮のルアーとやらも少し興味がある。

「あっ」

棕が堰堤のほうを指差した。

見ると、さりげなく、ラブリエが大物の魚を釣り上げていた。放置していた紳の竿を使っている。

マジか。二人して急ぎ走って行く。

だが、堰堤に着いた時、ラブリエは魚を池に放してしまっていた。

「あーあ、逃がしちゃったのか」

「おお、紳くん。聞いてよ、初めて魚が釣れたよ」

「わかつてる。見たからな。びっくりだな。50センチぐらいあったんじゃないか？」

「そんなにないと思うなあ。わたしの体と比べたら、相対的には大物だけだ」

「どこで釣ったんだ？ てか、釣り、できたのか？」

「できないよー。池の中を見てたら、紳くんの餌に食い付くのが見えただ。わたしはリールを巻いただけ」

「餌じゃなくて、ルアーだ。たしかに、ルアーを水中に置きっぱなしにしていたが……。ひどいビギナーズラックだな」

こういうことは、往々にしてあるものだ。

数年前、この池で最大記録と言われる62センチを釣ったのも、カップルで来ていた初心者女性だったらしい。肩の力が抜けている分、魚も警戒しないのだろう。紳は、波一つない濁った水面を見ていた。掠は興奮し、ラブリエを質問せめにしていた。

……ラブリエのやつ、魚の口を持って逃がす動作とか、すんなりやっていたな。

釣りの途中、ラブリエがこっそりと紳の所に寄って来た。

「わたしは戻るよ。屋台の手入れがある」

と言うことは、町に向かうのだろうか。

「きみは釣りをやるから、ちょうどいい。これをプレゼントしよう」と言い、ラブリエはメガネを外した。

裸眼の顔を見たのは初めてだ。大人っぽさが消える代わりに、愛くるしさは増した。

「これはわが家に代々引き継がれたメガネなんだ。偏光性能もある。特殊な屈折率を持っている代物だね。よく見えるよ」  
なるほど。

ラブリエはさっき、「池の中で魚が食い付いた」と言った。だが、濁った水の中を裸眼で見るとは不可能だ。しかし、メガネに偏光機能があれば、見えても不思議ではない。

メガネを手にとってみる。黒っぽい真鍮製だった。たしかに年代物なのかもしれない。レンズ越しに池を覗くと、こころなしか水中がハッキリ見える。紳は最近視力が落ちているのだが、視力も回復

する気がした。

が、視力が落ちたと言っても、生活に困るほどではない。メガネを手放したら、ラブリエが困るだろう。なにより、家に代々伝わる物を受け取ることはできない。第一、紳のような金髪にメガネは似合わない。

「いいのだよ。家のことなど気にしなくていい。わたしは惰性で着けているが、ほんとうは不要なんだ。自分の目でも充分に見えるからね」

ラブリエは帽子を脱ぎ、中から布のメガネケースを出した。

そこにメガネを入れ、紳に渡してきた。

「わたしもきみの紳士的行為には返礼をしたくてね。これは受け取ってほしい」

そこまで言われれば、断る理由は無かった。紳はメガネをもらい、ズボンのポケットに入れた。

さほど疑問にも思わなかった。

まるで、どうして人にあげるためのように、布ケースが準備されていたのかを。

残った二人は、昼過ぎまで釣りしたが、パツとしなかった。

そのうち、棕の携帯に誰かから電話が入ったのを切っ掛けに、上がることになった。

「今日は二時から先輩とか友達が寮に来ることになってるんだ。学園祭の催し物の打ち合わせがあるんだよ」

「おれが寄っても大丈夫なのか？」

このあとルアーを見せてもらうことになっていたが、友達が来るなら次回にしても構わない。なにしろ夏休みは長い。

「大丈夫だよ、まだしばらくあるし。寮の自販機にはジュースがあるよ」

「じゃあ、行くか」

棕が住んでいる寮は池から近い。ちょうど紳の家と池の中間あたりだ。

紳は棕に合わせ、自転車をゆっくり漕いでやる。

「学園祭か。懐かしいな」

中高一貫の棕の学校は、学園祭も盛大そうである。

「紳君の高校は？」

「うちはまあ、適当だな」

嘘ではない。紳の高校は特色のない平均的な公立校であった。毎年「五高祭」という空気のよくなイベントが行われているが、特に印象はない。紳も「社会科学部」という部に籍だけ置いているが、研究活動は勿論、部活に顔を出したことすらない。

「だけど、学園祭って、まだまだ先だろ？」

「夏休み明けだけだね。うちの部は、映画を撮るか、演劇をやるか、みたいな感じになってて。きょうは最初の企画会議なんだよ。結構、準備に時間は掛かりそうだから」

「大掛かりだな」

中学生にしては、と呟く。映画も演劇も大したものだと思う。だが、意気込みは買うが、どうせ中学生ではろくなものはできない。

「学園祭、よかったら紳君も、うちの部の出し物を見に来てよ」

「ああ、覚えてたらな」

学園祭は夏休み明けだから、たぶん忘れるだろう。

「そついえば、椋は何部なんだ？」

椋の部活の話は聞いたことがなかった。紳が部活に興味がないせいだろう。

「何部なんだろう……。すぐには分からないや。いろいろやるんだよ。』なにかやる部』、みたいな……？」

椋は顎に指を当てて思索する。自転車の速度が落ちる。

「ああ、みんなで集まってワイワイやる系の部活か」

「うん、でも、まじめにやる時はやるんだ」

椋はキリツとした顔で言った。まっすぐな顔が滑稽に見えないのは、この年頃の特権であろう。

「いろんな人がいるよ。野球部のブルペン捕手志望の人とか、芸人になれそうなギャグセンスある人とか、あとは正義の味方。世界を救うヒロインになる先輩。それから……」

「へー」

答えながら、内心、なんだそりやと思う。ブルペン捕手以外、破格なほどに誇張された部員紹介である。新人部員を勧誘するチラシになら、書いてもいいだろう。実際に部室に行ってみるとイメージ負けした無残な部員が待っているというオチである。中学生の言うことでもあるし、話半分、いやー二割で聞いたほうがいいだろう。部活の話は発展しなさそうだったので、紳は話題を変えた。

「学校で好きな女の子は居るのか？」

「え、突然だね。好きな人は居るけど、でも、紳君みたいに付き合い合ってはいないよ。その人とは、仲間っていうか、家来っていうか」

「ちょい待て。おれはラブ、……リエと付き合ってはいねえぞ」

「え、ウソでしょ」  
「疑いもしない目。」

この確信を突き崩すのは容易ではなさそうであった。棕からすると、付き合っているように見えるらしい。紳は、開けてはならぬ背徳の扉を開けてしまった感じがした。

……てか、突っ込み忘れたが、家来って何なんだよ。棕のやつ、アブノーマルな男女関係に中一にして沈んでいるのではあるまいな。本人があまりにも素なので訊く機会を逸した。

寮に到着。

だいぶ山がちな場所だ。あたりは蝉の声のスコールである。森に囲まれた広い敷地に、古びた木造の寮がある。むかし廃校になった建物を、棕の学園が買い取り、寮にしたそうだ。

大きい玄関をくぐると、ホールのようなスペースがあり、ソファやテーブルが置いてあった。赤い自販機だけは新しい。

「待ってて、今、ルアー持って来るね」

棕は木の廊下をがたがた鳴らし、自分の部屋に戻った。

紳は自販機で冷たいお茶を買い、何人も座れる大きいソファに腰を下ろした。

全体的に、薄暗い。外が明るすぎるのもある。玄関も窓もみんな開け放しなので、風の通りもいい。テーブルの真上から裸電球が一つ下がっていた。夜はこれをつけるのだろう。

「ごめんください」

見ると、玄関に黒い影が幾つか立っていた。入っていいのかな、いいんじゃないちょっと早いけど、土足でいいのかな、いいのよ、などと会話している。声の高さに中学生くらいだ。そもそも、ここは中学生の寮であり、紳が居るのがイレギュラーである。

「早く入りなさいよ、あんたたち」

カン高い怒声が響いた。

おじやましますと誰かが言い、玄関とホールの間廊下まで入って来た。紳が居るからか、ソファには座ろうとしない。

紳は来客を眺めた。こいつらが棕の友達だろうか。

パツと見渡すと、メガネ委員長の女子、冴えない太目の少年、キザっぽい美少年、的なキャラ付けができそうな奴らが居た。ちょっと離れた所では、ひときわ背の高い少女が掲示物を見ていた。

一方、明らかにキャラ付け困難な奴が一人、居た。

そいつは、セーラー服の冬服を着ているというだけで異常だったが、さらに自転車通学用の白いヘルメットを深々とかぶっていた。

それだけではない。なぜか片手には古っぽいラジカセを提げている。紳は中古オーディオ店以外でラジカセの実物を見たのは初めてだ。

そして、少女のショルダーバッグには、異様に沢山のアクセサリがついていた。

よく見ると、それらはすべて、人形だった。小さい、色とりどりの人形だった。みんな、首にワイヤーを通され、一纏めにされていた。どこか不気味な印象を与えた。

「お待たせ……。あつ、みんな。来たんだ。早かったね」

棕が戻って来た。手にはルアーのパッケージを持っている。

「遅いわよ、ちゃんと出迎えなさいよ。たるんでるんじゃないの？」  
遠くで掲示物を見ていた少女が振り向き、長髪をなびかせるように払った。キツと上がった柳眉、キツめだがまっすぐな瞳、彫刻のような白皙、上品な高低を描いている唇。中学生にしてはちょっとハツとするような美人だった。スタイルもいい。

「ごめん、先輩、みんな。準備するから、座って」

棕は冷水機から茶色の液体をコップに入れ、お盆に載せていく。スムーズな接客である。

どうやら、紳はどいたほうがよさそうだ。

「おい、忙しいみたいだから、おれは行くからな」

「ごめん、紳君、ここのホールで打ち合わせすることになってるんだ。僕の部屋に上がる？　すぐにお茶持って行くよ」

棕も部活のメンバーが早く来るとは予想外だったらしい。両方の

客に気を配り、若干苦慮している。悪気は無いのだろう。棕が特に目を配っているのは、さっきの高圧的な背の高い美人だ。ははあ、棕が好きな子ってのは、こいつかな。

「いや、いい。そのルアーを見たら帰るよ」

「慌しくてごめん。これだよ」

紳はパッケージを受け取った。ルアーを見た感じは、長い松ぼっくりのようだ。皮をなめし、張り合わせて作ってある。蛇皮だけあって毒々しい艶がある。

「よかつたら貸すよ。ちょっと使ってみてくれない？」

「いいのか？」

「うんいいよ。僕だと、もったいなくて、いつまでも使えなそうだし」

「そうか、ありがとう」

紳を追い出すような形になり、気を使ったのだろう。紳はありがたく好意を受けることにした。ルアーをポケットに入れ、寮をあとにした。背後では中学生の夏休みのバタバタした喧騒が響いていた。途中、ヘルメットの少女と目が合った。少女は無機物のような濁った目で紳を見た。はて、どこかで会っただろうか。紳は記憶に検索をかけたが、該当者は無かったので、気のせいだろうと思った。

少女が走ってきて紳の袖をつまんだ。

そのまま、ヘルメットの少女は無言で佇む。

「ええと……」

紳は真意を図りかね、相手の目を見る。曇りの日の池のような色の目をしている。感情が分からない。

この少女は棕の部活の部員のはずだ。もちろん親交もなく、話したこともない。

「なんだ？ おれに用か？」

紳は言った。最近、少女に、それも年齢低目の少女に縁があるのだろうか。見た感じ、ラブリエよりは背が高く、手足も長い。棕と同じぐらいの体格だ。だが、この少女は、目がおかしい。瞳の動きが皆無で、のつぺりとしている。視力は大丈夫なのだろうか。

「言いたいこと。話」

少女はたどたどしく言った。袖を引っ張り、無理矢理歩いて行く。道路に出て、紳の家とは反対方向に向かっている。家に帰りたいのだが、どうしたものだろうか。無下には断れず、歩き続けると、見覚えのある所に来た。

池を見下ろす広場であった。昨夜、ラブリエを送って来た場所だ。ラブリエの屋台は無かった。夏休みだからか、東屋で弁当を食べる家族と、駐車場でバーベキューしている若者たちが居た。

少女は、広場の端まで行く。

柵に足の付け根あたりを預け、紳を振り向いた。

なんだろう。少女が目をつむり、また開いた時、殺気のような圧力が肩を通り抜けた。

「てめえに言いたいことがあんだよ」

控え目な、かわいい声だった。

紳は、少女を見て、動きが止まっていた。

中学生の少女から乱暴な因縁をつけられた。さあどうする。過去の経験には無かった。

「なに言ってるんだ？」

「なに言ってるんだ、だとお？ まだ何も言ってるねえだろ、齒垢野郎」  
少女は顔色を変えないで呟く。

「てめえは最近ウチの棕と釣りをして遊んでいるようだが」

「それがどうした？」

紳はムツとして答えた。大人気ないが、少女の尊大さが鼻についた。

「どうしたじゃねえよ耳糞。誰の許しを得て棕と遊んでいるんだ？」

まず言つとくが、棕は儂わじのものだ。だから、近付くな。二度と喋るな、接近するな、連絡するな。それだけだ。これは最後通牒だ。

反抗する言動をとれば処罰する」

またか。

また、滅茶苦茶な女だ。

まず言葉遣いがヤバイ。「儂」とか、尋常ではない。しかも、最初に言ったのが最後通牒とは、どうかしている。

戸沢萌映を思い出した。この少女は、同じ気配を持っている。

いや、どちらかというとう戸沢萌映は自分の内側に発作が向かってきた。この少女は、より狂気でヤバイ。目の前で刃物がチラつくような圧迫感。

さつきまで虚ろだった目は、悪魔の魂が降りたように、鋭利な三白眼だった。

「つまり、君は棕が好きなんだな？」

もしかすると、棕が家来扱いされているのは、この少女だろうか。

……思考が飛ぶ。

何が起こったのか分からなかった。

頬を殴られ、ンブツと無様にうめき、地面に転がったのだと分かるには少し時間が要った。

「何を図に乗ってるのかねこのフケ男は。誰が儂の気持ちを推測し

ていいつて言ったよ？ 身の程を知れよ」

少女は仄かな桜色になった拳を制服でゴシゴシと拭いた。まわりの人々の目が二人に集まるが、痴話喧嘩と思われたらしく、見ないふりをされる。

おれはフケは出ていない。髪の毛は毎日洗っている。なんて失礼な奴だ。さらに、痛いと思って口の中を舐めると、下の歯が一本ぐらついている。

こいつ、おそろしい馬鹿力だ。

痛みと情けなさで、わけがわからなくなる。

もう一回殴ってきたらどうするか。どっちに避ける？ それとも受け止める？ ああ、つか、反撃しねえとな……。拳を握ってみるが、力が逃げる。骨が震えている。いや、震えているのは、心だった。くそがつ。なんで、こんな子供が。

紳は闘争心を駆り立てる。相手にガンをくれる。

「てめえ、」

また、衝撃が頬を抜けた。

あつ。

歯が抜けた。

口の中でアメ玉みたいにコロコロ転がる。吐き気を覚えながら、歯を手の中に吐き、ポケットに押し込んだ。

「馬鹿かてめえ。てめえもてめえって言ったら、どっちがどっちか分かんなくなるだろ」

いや、分かるだろつ。

ムチャクチャだ。

「もういい。近くに寄んな。加齢臭がくせえんだよ」

加齢臭なんかない。……はずだ。

「いいか、黙って見ろ」

少女は顎の下のマジックテープを外し、ヘルメットを取った。

「儂に見覚えがねえのか？ ノロマのグズ男」

長いストレートの髪がバサリと垂れた。ヘルメットの中に折り込

まれていたのだろう。髪の毛は腰までであった。鈍色にびと赤銅色が混じった、煮えたぎるような髪色。その刺すような輝きと、近付き難いほど圧倒的に整った相貌。

紳は思い出した。駅の近くで会った少女だ。「どけよ」と一言だけ告げ、去って行った少女。

口の中に感じる痛み。紳は、駅で感じた「フツーじゃない感じ」を思い出した。やはり、あの予感は正しかったのだ。この少女は、一体、何者なのだ？

「言っとくがな」

少女はゴミを見る目で紳を一瞥した。

「僕は、世界支配者だ」

少女は鳥のように両手を広げ、真顔だった。

紳は何も言えなかった。突っ込んだり、まして笑ったりしたら、何をされるか分かったものじゃない。コイツは危険だ。メンヘラーとかではなく、人間凶器のレベルだ。

「てめえたちは、いわば全員僕の家畜だ。ほんとなら僕と口を利ける立場じゃないが、低能過ぎてそのルールも分からねえからスルーしておいてやる。家畜はまとめて管理しねえとな」

少女は腕を広げたまま、池のほうにクルリと向きを変えた。シヨルダーバッグも同調し、首にヒモを通された何百という人形がジャラリと波を打った。

「僕は、この世界の最高の地位に立つ者。勝ち組の中の、いや、勝ち組以上の勝ち組。この世界のうまみを吸い上げて酔い痴れるのよ。そういう者を、何て言うか分かるか、愚民？」

少女は振り向いた。自己陶醉しつつも、陶醉を完璧に管理、高級白磁のような端正な顔。

少女はラジカセのスイッチを入れた。カセットテープがキュルキュルと回り、シーンを盛り上げるような音楽を流す。

「僕の名は、<sup>カミカミ</sup>神伽末。この世界の『神』の一人」

少女は腰に手を当て、威勢良く言った。セリフだけでは、「カミカミ」というのがアダ名なのか、フルネームなのか、判断できない。それより、紳は動転していた。「カミカミ」とは、ラブリエが暗殺のターゲットとして挙げた名前である。そして間違いない、ふつうの人間ではない。ラブリエに勝るとも劣らない。

最近、どうして常人でない奴らにばかり縁があるのだろうか。人間、一生のうちには、少しは不思議な奴らと縁があるものなのか。おれは今まで皆無だったために、このところ一気に出会っているのか。かわいいのはいいとして、どうせなら、常人の娘こがよかった。

そして、痛いのではなく、気持ちいい出会いをしたかった。

「おいおい呆けたのか？ 電池が切れるのはまだ早いぞ早漏？ せつかく儂の威光に接させてやるうっていうんだ。死んでも目を開けてよく見なきゃ勿体ないってものだぞ？」

嘲弄する、自称、「神」。名前も「カミカミ」。ギャグだろうか。現実だつて？ ふざけるな。自然にこういう偶然が起こるといのか。

そして、まさか、とは思うが、この凶悪なチビっ娘が「神」に相応しい非現実的な力を持っているんじゃないかあるまいな。

紳の中で揺らぎ始めていた。現実と非現実。常識と非常識。その境界線が。

いままで経験し、信仰しつづけてきた、日常という地盤が液状化を起こしだしていた。

少女のラジカセは音楽を流し続けていた。音量は小さかった。だが、嫌にメロディが耳に残った。そして脳内をぐるぐるとリピートしはじめた。毒の霧に覆われたように、思考があいまいになる。

「儂は『神』として生を受けた。だから、世界創造と、世界支配は、儂の当たり前だ。つーか、【世界作出装置群】は儂の非意識下で黙々と動く仕組みだから、工場のラインみたいに、儂の意識で自由に緩めたり止めたりできるものでもない。てめえら愚民が呼吸をするように、儂は世界支配をやる。わかるか？ 儂の【受持地域<sup>リージョン</sup>】は、ここら一円、全部だ。てめえら愚民が地べたに身を投げ、伏し拝むべき存在、それが儂なんだよ」

伽未は、自慢を始めた。いや、自慢でなく、自己紹介のようだ。本当に「神」だとするなら、自己紹介をするだけで「愚民」には自慢に聞こえる。「神」というのは何て嫌味な奴だと思う。

もつとも、伽未の説明を、鵜呑みにする気にはならない。伽未は、自分は「神」だと、自己申告しているだけだ。説明を裏付ける証拠は無い。世界を創造しているとか、支配しているとか、言うだけならメンヘラーの萌映もできる。実際、この種の話は、萌映がかなり

しそうな話だ。

「てめえらのこの町を、てめえら愚民どもを、作ったり支配しているのは、全部儂なんだ。正直、つくづく、くだらねえ役目だと思わな。だが、相応のうまみがあるからよ、『神』っていうのはやめられねえ。ちよつと本当の儂を見せりや、今のでめえみたいに、ぶざまに這いずりやがるんだ。みんなが儂をあがめる。おそれる。かしく。ほめる。たたえる。羨望する。嫉妬する。怨む。呪う。そういう声が、みいゝんな儂の耳には聞こえる。心の中の声まで全部聞こえてくる。愚民どもの鳴き声は、心地良く儂の鼻をくすぐるわ。支配欲求を満たしてくれる。わかるか？ 優越感だよ。たしかに儂は【<sup>リージョン</sup>受持地域】のすべてを思い通りにできる。だが、そんな快感は二の次だ。一番のうまみは、『支配者であるという優越感』なんだよ。誰よりも上であるという生物学的真理。誰もが儂よりも下であるという揺るぎのない事実。ふふふ、だから『神』ってのはやめられねえ」

カミカミは殆ど白目を剥き、快感にわななくように、自分の体を抱き締めた。

紳は怖気おそけを感じた。相手の異常さと勝手さに腹が立った。こんな奴に自分たちが支配されているなんて、嘘だと分かっても、絶対に信じるわけにいかない。何度も何度も否定してやらなければ気がすまない。本能的に感じる、こいつは危険な奴だ。

……うそだろ。

否定したかった。だが、否定できなかつた。

……聴こえる。

紳のうしろから風が吹いた。穏やかな風が、木々を揺らし、広場の全体を包んだ。

その風に溶け、ラジカセと同じメロディが全域で響いていたのだ。辺りには何も無かつたが、限らないスケールで音楽が聴こえてくる。まるで風が音楽を奏でているようだった。広場に居る人々も、何事かと空を見上げていた。

「これは儂の能力。儂が流す音楽は、『儂の能力全体を強める』。これでてめえには一片の自由も無くなった」

伽未の眼光がギリリと威圧感を増した。まずい、と思った。ここから逃げなければやばい。

だが、伽未は意外な行動に出た。

おもむろに制服の上衣を脱ぎだしたのだ。

冬服の上衣はスムーズに脱げ、上半身が露わになった。伽未は紫色のキャミソールを下に着ていた。均整のとれた細長い腕が剥き出しになる。

伽未の体つきは、年齢以上に発達したものだ。小麦色の肌がキャミソールの細い布地を引き立たせる。紳は戸惑うと同時に、目を逸らせなかった。いや、危険だから凝視しているだけだと言いつつ、それは欺瞞だ。花に寄る虫と同じである。動物的な習性。

「さわってくれない？」

伽未は肩に手を当て、上目遣いで言った。すこし強張った顔には恥じらいがある。

「何を言い出すんだ？」

「安心しな。儂もただで掠に近付かないでもらおうとは思ってない。てめえみたいな大人には相応の駆け引きの方法ってものがあるからな。さすがに体を売るなんていう過激なこととはしねえが、儂に魅力がないわけじゃないはずだ。てめえをリラックスさせて話を聞いてもらおうって寸法だ」

伽未が急にこなれた営業トークをしてきたことに面食らった。この少女、考え方が実に世慣れている。計算高い目は、化粧するよりも少女を大人びて見せる。

「よく言うな、人を殴っておいて」

「あーあ、謝るよーお、ちょっと感情表現が下手なところがあるんでなーあ、口より先に手が出ちゃうタチなんでなーあ」

空々しく肩を竦める動作。

「とにかく、こっち来いよ」

伽未は紳の手を引っ張り、強引に近づける。

「どうだ。触ってみてよ。てめえだつて女の子は好きな年頃だろ？」

「お前の汚い駆け引きに乗る気はない」

たしかに女の子は好きだが、商売根性を露骨に出す伽未のやりかたは好きではない。女の子とは言つても、まだ中一の青いガキではないか。三年早い。

……と思つたものの、こいつは妙に大人びているというか、端々で扇情的な表情や姿勢をとる。正直、どきまぎする部分はある。

つて、おれはロリコンなのか？ おれつて病気か？ 地味に衝撃を受ける。

「言葉のアヤだよ。単なる緊張緩和だ。アイスフレイキング緊張するなよ。別に減るもんじゃねえ、気軽に触ればいい。なんならハグしたつていい。猫がじゃれるのと同じさ。楽しくやろうぜ。何を迷つてんだよ！ ウジウジする男はみつともないぜ？ いさぎよくバーンと触ればいいんだ。そうだろ？」

なるほど、たしかにそうだ。そう言われては触らざるを得まい。潔くない男子像は紳の軽蔑するところだ。うしろめたいと思うから、本当にうしろめたくなるのだ。よし触つてやろう。

「気安く触るんじゃねえよ愚豚が！」

触つた瞬間、弾き飛ばされた。コンクリートで体が弾んだ。

「いい年して、いたいけな少女の体を不浄な手で触りやがつて。てめえはロリコンかよ？ 役所の男女共同参画課に居る化粧の濃いババア共に通報してやろうか？ 『紳』の体はてめえが触れるほど安くはねえんだよ」

紳は衝撃で呼吸もままならない状態である。

こいつ、マジで、頭がおかしいだろ……。

「ま、儂の『紳』の力を悪用すれば、てめえごときオヤジを中一の少女に夢中にさせることぐらい造作もねえつてことさ。儂も罪な女だよな」

伽未は儂げに息をついた。

本当だ。本当に「罪」な女だ。『神』の力を悪用したっていうのか？

「だから、安心しろ。てめえはロリコンじゃねえよ。ロリコンじゃねえ、かもしれねえよ」

何故言い直す？

「さて、行くか、愚豚」

伽未は紳のタンクトップに手を突っ込むと、しっかとベルトを掴み、紳を運んで行った。

「どこに行くんだよ」

「つせえ、馬鹿が！」

細腕のくせに、とてつもない怪力だ。紳は大きい道路に連れて行かれ、そこで手を離された。

二人の傍らにはバス停の標識があった。赤色と肌色の見慣れたバスが、ゆっくりと坂を登って来る。

「よし、乗るか」

「ふざけるな。おれは帰るぞ」

自分の家が近いのに、なぜバスに乗らねばならないのか。これ以上付き合いたくない。

「なら、二度と掠に接近しないと誓うか？」

「誓う」と、紳は言ってしまうかと思った。それで開放されるなら安いものだと思う。このイカレた少女に絡まれるのは想像以上のストレスだ。

しかし、一方的に相手の要求を呑むのは納得できない。

「それとは話が別だろう」

「てめえ、なんでそんなに掠にこだわってるの？ ホモなの？ 気持ちが悪いやジだな」

「こだわっているのはお前だろう」

胸倉をぐいと引かれた。タンクトップの繊維がびりびりと切れる音がした。殴られる。紳は瞬時に構えた。というか、防御姿勢をとった。



バスが動き出した。紳を捕まえた客たちは、黙って席に戻った。窓の外の景色は、正常に見える。やはり、マジックミラーのようだ。中からは見えるが外からは見えない。

否応なくバスに連れ込まれてしまった。ここで伽未は何をするつもりなのか。

客は無頓着に座っている。通路に立っているのは、紳と伽未だけだ。

「というわけで、てめえは儂がこの世界の支配者の一人であることを知った」

伽未は淡々と言った。

「そして、てめえはこの前、駅の近くで儂を見た。世界支配者の顔を知った以上、黙って帰すわけにはいかん」

「な」

あんまりな理屈だ。人を馬鹿にしている。世界支配者だと名乗ったのは、駅で会った後ではないか。だが、この少女にマトモな理屈が通用しないことは分かっていた。

「どこに連れて行くつもりだ？」

「めでてえ豚だな。どこかに行けるとでも思っているのか？ ああ、てめえは単純脳ミソの豚なんだから仕方がねえわな。言っておくが、豚が屠殺場に行くとは分かっていたら、その瞬間に絶望して自殺するだろうよ」

「何？」

紳は、伽未がひどく物騒なことを言ったような気がした。

だが、緊張で思考力が失われている。

「分かってねえのか？ てめえをシケーにするっていうんだよ、クサレ蛆虫」

伽未は言つと、シヨルダーバッグからズルズルと何かを引き出し

た。

金属バットだ。どこに収まっていたのか目を疑う。

紳をジロリと見て、伽未は言った。

「シケーに使う武器はその時ごとに違う。言い換えれば、武器なら何でもいいってことだ。ブチ壊すことだけが肝要だからな」

「バ、バットは武器じゃねえだろう」

的外れな指摘をする。そのバットで殴るつもりか？ ちょっと待て。待ちやがれ。紳は命の危機を感じた。シケーとは何だ。殺すということか？ どうしてだ？ なんのために？ 理解不能すぎる！ 紳は伽未に迫り、バットの先を掴んだ。女の細腕だ。力ずくで取り上げてやる。

だが、伽未は手首をクイと引いた、それだけで紳はバットに引きずられ、腹這いになってしまった。手も離れた。

「ラァ！」

伽未はしなりをつけてバットを振りかざす。やられる。間違いない。死ぬのか。こんな唐突に。死ぬ前なのに、遺言も思いつかない。バスの内装がきたねえと思っただ程度だ。

ベコン。気味悪い音がした。バットが頭部に直撃した。

バットは客の頭部に直撃していた。

「……………」

紳は顔を上げた。伽未が殴ったのは、紳ではなかった。

背広の男の顔は横から殴られ、バットの形に凹んでいた。

まるで、粘土のようだ。男の顔は、元に戻る弾力を感じさせなかった。メガネをかけていたが、メガネのツルごと押し込まれ、顔の中心部に向かってくぼんでいた。

ほかの数人の客は、何事もないかのように俯いて座っていた。

時間が流れていないかのような、異様な空間だった。

「シケーの見本を見せてやらあ」

伽未は振りかぶり、殴りつける。ベコン。ベコン。ベコリベコリベコリベコリ。嵐のような速さだった。手数が多すぎて目にも留まらない。背広の男は、どんどん凹んでいく。バットの形の半円が穿たれ、壊れていく。殴っているのに、奇妙な静けさが漂う。無音。無音無音無音無音無音無音。紳は、あつと目を見開いた。伽未の体が巨大化している。…………いや、違う。男が小さくなっているのだ。男は殴られることに縮小した。今や、文鎮ほどの大きさとなり、座席から消えようとしていた。

「オラア！」

ベコリ、座席が両断され、バットがめり込んだ。

男の存在は無くなった。

「さて、シケーの一部始終を見てくれたかな？ 次はキミの番だぞ」

「

伽未はバットをクルクルと回し、チャールミングにウィンクした。

「……………何をした」

「バツハア！ くそまじめな質問すんなよ、吹くだろ。ま、次はてめえなんだ、気持ちは分からなくないけどな」

伽未は吹き出した。

「見ての通りだよ。シケーにしてやったんだ。僕は、ムカついた奴を殴って殴って殴って殴って殴りまくることで、存在を消すことができる。あたりめえだろ『神』なんだからよ？ 今のリーマンは、消されたことすら分かっていねえのさ。痛みも感じない。殺されたことも感じない。存在ごと消されても何も感じない。そんなことは簡単なんだよ」

信じられない。だが、目の前で見たのは確かだ。じゃあ、信じられないのか。「殺す」と「存在を消す」の違いは何なのか。存在が消されると、最初から居なかったことになるのか？ だが、どっちにしろ、やられる方には大差ない。「シケー」とやらにされたくない。

逃げよう。逃げようと思う。だが、体が動かない。腰が抜けているのか。腕が震えている。今にも頭から倒れそうだ。

さわつ、と肩に微かな感触がある。伽未がバットを載せ、愛撫のようにさすった。

宝石のような瞳が隠れるほど、ニコヤカアゝに笑った。

「てめえらは、ただの部品だよ。いいとこ家畜に過ぎねえ。99・99999999…%以上の人間は、自分の存在すら認識しないで生きているものさ。いまのリーマンや、その主婦、女子高生、デブメガネのようにな」

伽未は周りを見渡す。客は一向に無反応だ。

「ニンゲンなんてのは、歯を磨いたり、手ぬぐいで体をふいたり、頭皮のフケを搔いたり、快い方向に寝返りを打ったりするような、無意識の動作の連続で寿命を空費する存在でしかねえ。そういう空虚なイキモノ同士が、仲間内での無意味な決まりや罰を決め、不毛な生活を繰り返しているだけだ。僕から見たら、まったく面白くもねえ馴れ合いをしているにすぎん。ニンゲンよりも、夏休みの工作で作る点滅回路セットのぼうがずっとマシだ。暗がりを読らすから役立つ。ニンゲン集団ってのは、てめえみてえな奴の集まりだ。大

したことの無い愚豚の集団だ。ともかく、儂にとってみりゃあ、てめえどもを思い通りに操ることは朝飯前ってことだ」

伽未はバットで紳を小突いた。恐怖を覚える。こいつは本当に「神」だというのだろうか？

「おい、クソ野郎。儂の言ったことが理解できるか？ できないだろ。理解できなくて、悔しいか？ 安心しろ、このままずーずーずーと理解できねえツツ！ 理解なんてさせてやるかよ！ あっけなく死なせてやるよ。今からてめえを死の世界に急行で行進させてやらア！！ てめえの脳味噌が見るような安っぽい悪夢に包まれて、逝っちまえ！」

鉛のように重い声で、伽未は叫んだ。

紳は呆然と伽未を見る。

伽未の言うことは、常に一方的だ。この女には、理屈は通用しない。というか、伽未は独自の理屈で動いており、それを紳に説明する気がない、というのが正しい。「家畜」には説明しても無駄だというわけだ。腹立たしいことだが、伽未の言うとおりだった。圧倒的な力の前では、理屈など無視される。今度は自分が「シケー」に処せられる。なすすべはなかった。

鳴り続ける伽未のラジカセにノイズが入った。音楽に混じって、砂嵐のような音がする。電波が混線しているのか。

よく聴くと、砂嵐をバツクに、呟くような声がある。ちゃんとした言葉ではない。曲と言語の中間のような声だった。

声は、こう宣言した。

ステージ・準備・完了・

プレイヤー・1・カミカミ・対・プレイヤー・2・シン・

ゲームスタート・

すると、伽未は近くの女子高生の席まで行き、おもむろに女子高生の頭を両手で掴んだ。女子高生は反応がない。伽未は電球をソケ

ツトから抜くように女子高生の頭を回していき、ついには完全に外した。頭が無造作に蹴られ、紳の足元まで来た。ある意味、マネキンの首が転がっているよりもリアリティがない。変にリアルに着色されているせいだろう。いや、そういえば、コレは本物だったか。女子高生の首はポツカリと穴になった。やがてそこから二ヨキリと、棒のような物体が伸びてきた。

新品の金属バットであった。

「きょうは二人ともバットか。まあ、季節柄こうなるわな。高校野球とかやってるもんね。いい選択だ」

伽未はバットを抜き、紳に渡してきた。

「オラ、持てよ。てめえの武器だ。シケーになりたくなかったら、抵抗してみる」

F i g h t ! .

ラジカセからの一声。

まるで格闘ゲームのような掛け声であった。運転席のデジタル時計が「2:00」と点灯し、一秒ずつ減っている。すると、何か。

紳は伽未と格闘することになるのか。

伽未は片手にバット、片手にラジカセ。すぐに殴り掛かってくるかと思っただが、意外や、黙って見ている。

だが、紳は心身に変調を感じた。

体が、やけに重い。大袈裟でなく、足が鉄のように重い。足だけではない。体全体が異常に重い。そして、猛烈な疲労感。自分の骨格が、体を支えられなくなりそうだ。

時計が「1:51」を差す。まだ十秒足らずだ。この症状は一体何だ？

「僕は慈悲深い『神』であるから、敵には均等に闘いの機会を与えられることにしている。今がその時間だ。だが、言っとくが、ここは僕の【受持<sup>ステイジ</sup>地域】でもある。てめえは制限時間内に僕を倒さないと負

けになる。それだけじゃない。一秒ごとにてめえのゲージは減る仕様になつてている。攻撃力、防御力、持久力、思考力、精神力、全部が減り続ける。早く攻撃しねえと、勝手に潰れるぜ？」

「ひでえな、おい。あんまりにも、勝手じゃねえか。それでも自称神かよ？」

フン、と伽未はせせら笑う。

「馬鹿か、てめえは。『神』ってのは絶対的なんだよ。絶対に負けねえし、最高に優れているんだよ！ 敵が『神』のステージに入ったら、『神』より弱くなるのは当たり前だろうが！？ てめえこそ、『神』の土俵に乗り込んで来たからには、相応の覚悟をしてきたんだらうな？」

伽未はラジカセを置き、両手でバットを握った。

今までにないほど体を大きくねじり、凄まじい速さで攻撃に出た。

刹那、紳は腰が抜け、クタリと尻餅をついた。

それが幸いしたのだろう。

「オラア、壊れやがれ、糞豚がアアアアアアアアアア！！！」

伽未の怪獣のような咆哮とともに、雷のような音が轟く。

ブツツ。「Fight」の時間を刻んでいた時計が暗転した。当たり前だ。紳が立っていた高さ、ちょうどバスの窓から上は、全部吹っ飛んだ。

おそらく伽未がバットをフルスイングした、それだけで、バスの上部三分の一ほどは吹き飛んだのだ。柱も広告も屋根も寸断され、走っているバスの後ろに落ちる。強制オープンカー化である。風が流れ込む。紳にはうすら寒い。伽未の綺麗な髪がなびく。太陽を受けて滾るような赤色。

いつのまにか、バスが走っているのは知らない場所だった。来たこともない団地の中だった。白い集合住宅が並んでいる。これといって特徴はなく、日本全国どこにでもありそうだが、不気味なほどに規模は大きい。白い建物の間から、白い建物が見え、その奥にも同じ建物があった。

こんな場所は、知らない。紳の知っている太い坂道を、バスは登っていただけのはずだ。頭がおかしくなりそうだった。いや、すでになっっているかもしれない。その判定ができないほど、おかしくなっているのは確かだった。そして、いまは頭の判定などしている場合ではなかった。命が無くなるかどうかの瀬戸際だ。なんとかして逃げないといけない。

その時、伽未が横を見た。彫刻のような横顔を自慢するかのようだ。髪が流れるようになり、静と動の対比が、容貌の完成度を瞬間的に上げた。だが、さすがに鑑賞する心など起きない。逃げるなら今だ、紳は閃いた。いまは、密室ではなく、オープンだ。どこからでも逃げられる。

紳は全霊をかけて窓に向かう。窓にくっついた。手や腿にガラスが刺さった。構うものか。足をかけ、乗り越えた。重心を向こうに運んだ。窓から転がり出た。

ドスツ。紳は道路に落下した。腰に衝撃が伝わった。逃げたか、逃げたぞ、おれはバスから出たんだ！

伽未が真顔で鳥のように手を広げていた。

……？

紳は、何も言えない。

まで。ちよつとまで。おれはバスに引きずり込まれ、命からがら、脱出したはずだ。だが、おれを「シケー」にしようとする恐怖の怪物が、どうして目の前に居る？

そこで紳は気付いた。

これは、少し前だ。伽未が「僕は世界支配者だ」と宣言した場面だ。相手は制服を着ていた。まだキャミソール姿ではない。

時間が、戻っている？ それとも、紳は白昼夢でも見ていたのか？ ブツ飛んだ支配者宣言に、気を失いでもしたのか？

紳の右手がうずいた。手のひらは血でべったりと染まっていた。

バスのガラスで切った傷だ。

そして、左手にバットを持っていた。

なんとということだ。これは現実だ。いや、バスは消えたから、幻か？

そうじゃない。

現実か幻か分からない「この場面」が、まちがいでなく現実ということだ。

紳は、伽末から逃げられなかった。

たしかに、どこかおかしいとは思った。逃げられたくないなら、あそこで隙を与えるかのように横を向くわけもない。すべて伽末の計画通りだったのではないか。伽末が本当に「神」なら、紳をどうとでもできる。逃げる意図を最初から読むことだってできるはずだ。伽末がその気なら、逃げるのは不可能だ。紳という人間は、伽末の【受持地域】<sup>リージョン</sup>の中の、砂鉄一粒に過ぎないのである。

「言つたる？ てめえの世界は儂が作つてるんだからよお。つくづく間抜けのノウナシだなあ」

伽末はのけぞるほどに胸を張り、紳を見下ろした。分かったか儂の力が。そう言いたげだった。

「さて、改めて、シケーといくか」

カミカミはショルダーバッグからバットを取り出した。ずるずるずるずるずる。ずるずるずる……。

！？

今度のバットは、ちよつとパワーアップしていた。

引つ張り出されたのは、バットが二十本ばかり束になった恐ろしい塊であった。鋼のワイヤーがグリップに通してあり、一絡げひとからに扱える凶器である。というか、伽末の体よりも明らかに大きいバットの塊が、ふつっつぽいショルダーバッグにどうやって入っていたのか。

伽末は凶器を置いた。ガラガラガラガラ。それだけで、崖崩れ級の音がした。

「今度は、少おし、痛いかもしれねえぞ」

伽未はワイヤーを握る手に力を込めた。RPGにある鉄球のように、振り回して使うのだろうか。当たれば痛い。どころではない。バットの本来の目的から外れすぎである。紳は無駄だと思うが、周りに助けを求めようとする。広場から人は消えていた。さっきは居たはずだった。

ありえない。色々と。

まずい。本当にまずい。これじゃあ殺される。けど、なんでおれ、殺されるんだ？ おかしくねえ？

今、この場面の説明が見付からない。

こんな時、紳が思ったのは、悪夢なら早く覚めろ、という平凡なツッコミであった。

紳の表情から察したように、伽未は言う。

「殺されるのが怖いかな？ じゃあ、嬉しいな。この時間よ永遠なれって、てめえに対しては思うな。簡単に殺しちやあ面白くない。殺される直前の恐怖は、殺しちまったら、味わわせてやれねえからな。僕はてめえを怖がらせて怖がらせて、死んだほうがマシだと思うほど怖がらせてから殺してえっ」

蕩けるような顔で言った。

整った彫像のような顔が上気し、醜悪に歪んだ。

「冥土のみやげだ。ちよつとした話をしてやろう。それが終わったらてめえは死ぬからよく味わって聞けよ糞虫。いいか」  
「  
そうして、伽未は、信じがたい秘密を暴露した。

「現実」は存在しねえ。

まず絶対的に現実が存在する、という「真理」　その嘘八百ドケマこそが儂らGOMが行った最大の詐術。そして、魔術だ。

「現実」なんて、世界のどこまで行っても見付かりはしねえんだよ。てめえらが受け止めている、いや当たり前すぎて受け止めている自覚もない「現実」は、嘘っぱちだ。無だ。

いいか。「現実」というものの正体は、「GOMが種々の装置で作りに出した三次元レベルの幻燈」のことだ。

この世界は人工物なんだよ。

【世界作出装置群】が絶え間無く稼動することで維持されている幻燈なんだ。ちなみに、お役立ちの豆知識だが、【世界作出装置群】のことを小文字で【gom】と呼称することもある。

そして、【世界作出装置群】　【gom】の一部であり、独立構造体でもある存在が、この儂だ。

てめえらは、「現実のようなよくできた夢」とかよく言うよな。阿呆かてめえらは。

「現実のような」というところが、すでにして幻燈なんだよオ！笑いをこらえ切れねえな！　何を隠そう、この世界自体、てめえら自体が、現実のようなよくできた夢の一部なんだ。そんな中で、てめえらときたら、「現実のようなよくできた夢」とか言っていやがる。度し難い大馬鹿だぜ。つける薬もねえゴミ虫どもだ。

こう言うてめえらは「批判」を唱える。「フザケルナ。ソナナSF映画ミタイナコトが実際ニアルワケナイ。不可能ダ！」とな。

まあ、ゴミ虫の頭脳じゃあ、そのレベルの「批判」が限界だろう。GOMは、そういう「批判」が出るようにてめえらを洗脳してきた。「二次元レベルでは映画などを使えば幻燈は可能だ。しかし、三次元レベルでは科学的・技術的に不可能だ」　　そういう「常識」を、てめえらに刷り込んだ。【gom】とかを使ってな。

これからも、GOMはてめえらを操っていく。てめえらは永遠に支配される豚だからだ。

豚が「神」に近付いていいわけもない。「神」の存在を知ることができない。しかし、てめえは知ってしまった。というか儂が教えただけだな。だから、「神」のことを知ったてめえはシケーだ。じゃあ、しね。

### 衝撃の事実。

#### その連続。

もはや、一つ一つを解釈している暇はなかった。

紳が分かったのは、世界には有無を言わさぬ理解不能なことがあるらしい、ということだった。真実なのか嘘なのか、それを考える暇もなく壮絶に巻き込まれる嵐のような出来事がある、ということだ。

それはまさに、今だ。ひしひしと感じていた。どうにかしないと自分は「シケー」になる。地獄の蓋が開く気配というのがあれば、こういう感じだろうか。とにかく行動しないと、しぬ。

「ちよ、ちよっと待ってくれ」

紳は慌てて言う。自分は伽未の前では蟻のような微細な存在であることは分かっていた。だがまだ死にたくない。これは、なるほど、本能ってやつかと思う。

こんな時、論理的な考えなど出ない。何を言いたいかも分からない。だが、やりたいことは分かっていた。とにかく自分は生きたいのだ。そのためなら、多少、いや相当不恰好でも構わない。全力で、

時間を稼ぐ。

「なあ、おまえは、何なんだ？ 人間なのか？ 機械なのか？ そのどっちでもない、得体の知れない化け物なのか？」

脈絡の無いことを口にした。ひよっとして、おれの喋るセリフは全部、こいつに決められているのか？

「さあ、分からないな」

伽未は興味なげに肩をすくめた。

じゃあ、しね。再び伽未は言った。直径1センチ以上ある太いワイヤーに力を込めた。その先にあるのはバットの塊だ。

伽未は片手でワイヤーを操り、バットの塊をグルグルと回し始めた。

バット部分は巨大扇風機のような速さで回りだした。紳は風圧でよろめくほどだ。これを紳に投げ付ける気らしい。

「ん」

伽未が、何かに気付いたように声を出す。

「チツ。まさか、新手か！？」

伽未は舌打ちし、ワイヤーを手放した。

遠心力のきいたバットの塊が、隕石のように獰猛な速度で発射された。

だが、飛んだ方向は紳のほうではなく、上空だった。広場を見下ろすように繋がっている森林の先端をかすめ、ロケットのようにバットは飛んでいき、やがて夏の太陽を浴びる遠い点となって消えた。

ふわり。伽未の攻撃をかわした新しい客が、森林の上部に着地した。

抜ける空のような深い目が、にこやかに伽未を見下ろした。

「はじめまして、『カミカミ』。そして、少年」  
ラブリエの登場だった。

ラブリエは妙な物を手にしていた。釣り竿である。長さからしてブラックバス釣り用と思われる。竿は獲物を捕らえたかのようにしなっており、竿から伸びる糸の先には伽未が居る。

伽未の肩にはチャーミングな赤と白のルアートレブルフックが小鳥のように止まっている。ルアーの三本針はカエシの部分までガッチリと刺さっていた。

ラブリエが伽未にルアーを投擲キャストしたのである。

紳は、そのルアーをよく知っていた。「バド」である。ビールの柄がプリントされたジョークのようなルアー。

「只者じゃねえな。バットを回していた儂の一瞬のスキを捕らえるとは」

伽未はうずくまり、肩を押さえる。スパリと手刀で糸を切断。モソリと、スポンジケーキをちぎるように、ルアーを肉ごと引きはがした。

しかし、えぐれた肉はすぐに再生した。信じられないが、「神」の力でも説明したものだろうか。というか、木の先端に立っているラブリエといい、二人とも普通に人智を超えていてコメントに困る。

「おまえ、クサいな。鼻が曲がりそうだ。おまえの体からぶんぶん発散する二オイは、儂がよく知る二オイだ。おまえ、GOMの人間だな」

ラブリエはハッキリと答えない。

一方的に、伽未に告げた。

「通称『良のカミカミ』。きみが再三にわたりGOMからの通信を遮断していることは既に明白。GOMトーキョー支部の総意として、造反分子を処分する」

「ぶん、儂はまだまだこの世界でやることがあるわ。むざむざ殺ら

れるわけにいくか」

伽未は紳の背後を取り、首に手刀をあてがう。

「去れ。そして二度と現れるな。聞かなければこの人間を殺す」

紳は動けない。伽未が本気になれば、瞬時に延髄に穴が開くはずだ。

「早くしろ！ こいつが死んでもいいのか？」

伽未は腕に力を込める。喉の奥から恐怖が突き上げる。

「たしかに、GOMは世界人類の平和を標語おためごかしにしている。建前上は不毛な殺人は望まないはずだ」

ラブリエは首を振る。豊穡なドライフラワーのようなツインテールが揺れる。

「……ツインテール？」

「だが、その人間はどうせきみの【gom】が作ったものだろう？ それを殺すと脅かしても、下手な自作自演に過ぎない。わたしが殺しに来たのは、暴走する【gom】であるきみだ。狂った【gom】を野放しにしておいては、世界に悪影響が出るのでな」

ラブリエは動揺する様子もない。

スマイレ色の伶俐な瞳が、鏡のように伽未を見下ろす。

「……ちっ」

伽未はまた舌打ちし、体をブルブルと震わす。背中を丸め、悔しがっているように見えた。

だが、それは違った。伽未が深い息をつくと同時に、背中から羽根が生えた。

「羽根というか、翼だ。猛禽類のような立派な翼である。色は悪魔のような漆黒だった。」

ビル風のような突風を巻き起こし、伽未は浮上した。

「逃がすか」

トツ、と木を蹴り、ラブリエは降りて来る。

だが、伽未はニヤリと笑う。手の中で金色の物体を弄んでいる。

それはさっきラブリエが投げってきたルアーだ。なにか凶暴な力を秘

めているかのように、伽未の手の中で金色の光を放つ。

「はん、物質変換させてもらったぜ！ お返しだ」

伽未は高々と飛翔し、金色の弾丸と化したルアーを投げ付ける。直撃する寸前、紳は強烈な力にさらわれた。

間一髪、ラブリエが紳を抱え、広場を飛び出した。

爆発が起きた。

崖が崩れ、水柱が上がった。蒸気と土煙が舞い上がった。土や木が池に落ちていく。怒涛のような轟音と突風。一部始終を見ながら、紳はラブリエとともに、池から離れて行く。ていうか、ラブリエ、翼がないのに飛べるんだな。いや、翼があるから飛べるっていうのもおかしいけど。飛ぶというのは、空気の座布団に乗っているように気持ちがいいものだ。こんな時なのに、そんなことを思った。妙だな、これってやつぱり、現実なんだよな。

仕方がない。全部信じられないことばかりだが、それは別として、信じるしかないようだ。

そう思った。

慣れ親しんだ釣り場が潰れていく。

紳は柵越しに見ている。対岸の崖が崩れ、泥水が渦を巻いている。崩壊の圧力で軽い土石流が起こっていた。堰堤は決壊し、滝のように水が溢れ出た。おそらくこのまま干上がってしまうだろう。魚も残らず流れてしまはずだ。70センチの魚を釣る夢は、夢のままになった。非現実的な気分だ。スクリーンに映った映像でも見ているようだった。

濁流は紳たちの場所にも上がって来そうだった。ラブリエは紳の肩を叩いた。

「ここは危ない。避難するでしょう」

ラブリエは、普段よりも独特な衣装を着ていた。

顔よりも二回りは大きい蝶ネクタイ。もふもふの髪のため落ちずに留まっているシルクハット。着ぐるみのようにも見えるブカブカのジャケットとズボン。それらはすべて、某国国旗のようなハデな縞模様や　　の羅列が象かたどられていた。まるで「バド」のようなデザインであった。どこか道化師のようにも映る。

ところで、今気付いたが、ラブリエはツインテールにしていた。髪を縛っているのは初めて見た。幼い印象が倍加した。初めて会う感じさえした。そういえば、さっき「初めまして」と言わなかったか。どうということなのか。

ラブリエは懐からプラケースを出した。紳がルアーを入れるのに使うようなケースだ。

奇遇にも、ケースの中には、ルアーが入っていた。針はついていなかった。

ラブリエはその中から「バド」を選び、地面に置いた。

「きみの趣味に合わせて、今回は『釣り縛り』でいこう」

ラブリエは、まだ持っていた釣り竿を魔法の杖のようにクルリと

回転させる。よく見れば釣り竿一式も特別製である。白く塗られ、衣装と同じような装飾がしてある。こんなものを売る店は知らない……と、ぼんやりと思っていると、軽自動車ほどの大きさとなったバドが前にあった。

「……どうい魔法なんだ？」

「物を大きくし、乗り物に変える魔法さ」

そのままだな。

そういうことを訊いたわけではないんだが。

ラブリエは釣り竿から糸を出し、バドの鼻面のヒートンに結びつけ、バドに跨った。

「乗りたまえ」

「ああ、そうしよう」

きりがないので、科学的な解明を求めるのはやめた。

ビールの缶を模した円筒形のボディはつるつると滑る。親切なか足を置く突起はあった。

「出発しよう」

ラブリエはルアーをキャストするように竿を振った。するとバドは飛び立った。弾丸のような速さで飛び、上空二百メートルほどの高度で安定した。

ラブリエがリールを巻くと、バドは前に進んだ。実際の動きと同じように、左右に首振ウオプリングをする。そんなところまで本物を模さなくてもいい。脳が振られて、酔う。紳は下は見ず、汗だらけの手でラブリエを掴んでいる。夏の太陽を遮るものはないが、妙に寒気がする。「きみを危ない目にあわせて済まなかった」

ラブリエが呟いた。

「あやまることはねえよ」

紳はぐったりした声で言った。

すぐに助けられなかったことを謝っているとしたら、ラブリエに責任はない。紳を助けねばならない理由はないのだし、あの伽末から迅速に助けられなくても仕方がない。

「ハツタリが効いて良かった。カミカミは逃げてくれた。奴の有している【gom】の力は極めてシビアで強い。わたしとしても正面から挑んでは勝ち目はない。暗殺者が暗殺される結末になりかねない。」

「……ひよつとして、おれが襲われたから、助けに入ってくれたのか？」

「そんなことはないさ。ちょうどカミカミの情報を集めるため距離をあけて追尾していたんだ。まあ、きみに死なれなくなかったのは事実だがな」

「……悪いな。ありがとう」

「ああ、いい、改まったのは苦手だ」

ラブリエはそっぽを見て手を振った。

「それに、カミカミがネチネチときみを弄んだおかげで、敵の色々な情報を集めることもできた。今度あいまみえる時の参考になったよ。【gom】の何処を突けばいいか見えてきたようだ。礼を言いたいのはこつちだよ。だが、こういう話は、分からないかもな。きみは一般人だからな」

「いや、知ってる。あいつの口から聞いた。相当色々な話をな」

「ほう」

ラブリエが驚いたような声を出した。

「だが、推測するが、きみにはチンプンカンプンな話が多かったのではないかな？」

「その通りさ。本当なのか嘘なのか保留しているところだが、実際、保留したまま忘れ去ってしまいたいくらいだ。たぶん本当なんだってのは分かるが、どうしても理解が追いつかないもんでな」

そうだ。紳のような一般人が聞く話ではなかった。おかげで紳は軽い錯乱状態に陥っている。だが、ラブリエの口から「本当だ」と言われれば、その判断を信じたい気分だった。紳はなぜかラブリエのことは信用していたのだ。

「無理もない。あまりに多くの情報が秘匿されているからな。」

と、秘匿している側の雇われ暗殺者が言う言葉ではないか」

ラブリエは自嘲を込めて言った。

「きみがカミカミから聞いた情報は、全部本当のことだ。しかし、信じたくなければ信じなくてもいい。そのほうが精神的に良い場合もある。それに、きみが巻き込まれたのはシビア・アクセシントではあるが、あくまで偶然の事故だ。本来きみはわたしたちの世界に交わるべきではない。われわれ人間は、自分のレベルに合った世界を認識する。中学生が中学校が全てだと思い、社員が会社が全てだと思い、老人が茶の間とお役所が全てだと思ふのと同じだ。捉えられる世界の範囲は経験や知性によって変わる。無理をしないことだよ」

「ああ」

紳は頷いた。今の説明も、ピンと来なかったが。

「すこし休もう。カミカミが追い掛けてこないとも限らない。しばらくわたしと一緒に居たほうがいい」

紳は憔悴していたので同意した。ラブリエはバドの高度を落とすていき、どこかの川のそばに着陸した。

まわりは林になっていて人目は無かった。だが、林の向こうからはこだまのように人の声がしていた。

ラブリエはバドを置き去りにして歩きだす。

林はすぐに終わり、太い国道に出た。遊園地のように人が側道を歩いている。車列はびっしりと渋滞し、鋼鉄の箱の輝きがぎらぎらと光っている。熱と水蒸気をおびた排気がもうもくと立ち昇る。

この場所は確か……。紳は、思い当たる。ここはA市内だ。駅からセントラルタワーを越え、十分ほど歩いたあたりだ。

一帯は緑が多い。むかし城があった名残でお堀が何本もあり、城址公園となっている。運動公園も併設されており、野球やサッカーの大きな試合はここで行われる。

そっちへ向かう道路が混んでいるということは、試合か大会でもやっているのだろうか。かきごおりや飲み物売る店が道端に点在し

ている。人の流れの向こうに見えるのは、播り鉢を引つ繰り返したようなスタジアムだ。

ラブリエは途中で人の流れを抜け、人のまばらな方に行った。公園の中を通る形になる。遊歩道には素性の分からない青年や中年がブラブラと徘徊していた。地べたに座り込み、ピクリとも動かない人間も居る。ここに居る生活者だろうか。それとも熱中症で倒れてしまったのか。心配なので声を掛けようと思うが、不気味なので躊躇する。

公園を出ると、大きいグラウンドがあった。多目的グラウンドと言えば聞こえはいいが、要は石ころだらけの空き地だ。運動部のものと思われるバッグが幾つか散乱しているが、持ち主は居ない。ここでアップをして、別の場所に移動した感じである。日陰は一個もない。グラウンドは熱された砂漠のようだ。

手前にはキャッチボールをしている野球少年が居る。この暑さでも元気なのは子供だけだ。

「おおい、帰った」

ラブリエは、少年たちに言った。少年とキャッチボールしていた女性が立ち上がった。それがラブリエだったので、あれ、と思った。ラブリエが、二人居る。

? ?

ああ、わかった、これはしんきろうだ。暑さで幻覚を見ているのだ。紳はそう思ったので、あまり驚かなかった。

だが、どうもおかしい。幻覚にしては消えないし、格好も明らかに違う。こっちのラブリエは着ぐるみのようなふざけた服装だが、あっちのラブリエはノースリーブ+デニムのショートパンツという夏らしい服装だ。そして、燦然としたプラチナ色の髪を無造作に下ろしている。

「なんで、二人いるんだ？」

思わず呟いた。知能の低いセリフだ。暑さのせいでしょう。

「なんでと言われても、困る。二人居るからとしか言いようがない

な

ツインテールのラブリエが、こっちを向く。その瞳はスミレ色をしている。二人は目の色が違った。あつちはキャラメル色だ。紳はそっちの方を見慣れていた。

そうだ、こっちのラブリエに助けられた時、かすかな違和感があった。「初めまして」と言われたのも、本当に初めて会ったとすれば納得できる。

「ラスト三球！」

向こうでは、ラブリエがミットを構え、座った。見知らぬ少年がボールを投げ込んだ。気のせいかな異様に速い。控え目に見ても百五十キロぐらい出ているんじゃないか。なにしろボールが見えない。投げた瞬間、すごい音とともにミットに入っている。

三球受けて、ラブリエはこっちに来た。

そして、ラブリエ同士の会話が始まった。

「やあ、じくろう」

「何をやっているんだね」

「見ての通り、時間を潰していたのさ。あの少年の相手をするのは今日で三回目だよ」

「呑気なものだな。私はカミカミと対峙してきたというのに。自分の『顔』を忘れてもらっては困るぞ」

と、ツインテールのラブリエが言った。だが、それほど困っている様子ではないが。

「いや、すまん。どうしても分身に任せ切りになってしまっ。いつも情報収集などの雑事をきみがこなしてくれているのでね」

「きみのことはわたしのことだからな。なおざりにするわけにもいかん。カミカミの新しい情報は、ここに収めておいた」

ラブリエはポケットから携帯電話を出し、Tシャツのほつに渡した。

「では、そろそろわたしは消える」

「ん、わかった、データは見ておくよ」

ラブリエは答えた。

すると、もう一人の（ツインテールの方）ラブリエはどんどん透けていき、消えてなくなつた。存在感が薄くなるというのはこういうものだ、という消え方だ。

しんきろつが無くなつたと解釈することもできるが、現況、紳の周りでは合理的な解釈は回りくどい事態が続いている。こういう時は気持ちのおもむくままに喋つたほうが早いのだ。

「今のはどういう現象だ？」

「驚かせてすまない。説明しなかつたな。わたしは一日あたり二時間ほど分身できる能力があるんだ。分身というか、分裂に近いね。どちらもわたしなんだ。ラジオの二局を交互に受信している感じかな。いちおうきみには『初めまして』と試してみただけだね」

「いろんなことができるんだな」

「そうだね。仕事に使うツールをランダムで出したりもできるよ」

「釣り竿とか、ルアー型の乗り物とかか？」

「そうだよ。何が出るかは、その時のお楽しみさ。わたしが一番楽しいんだけど」

雑談しながら、ラブリエは端末を見る。「カミカミ」の情報をチェックしているようだ。

「先生！」

と、野球少年が鳥のような高い声で言った。帽子を取り、律儀にラブリエの指示を待っている。

「ああ、すまない、もっと練習するかい？」

「いえ、きょうは帰ります！」

「そうか。紳くん、彼はスポ少に入る時期を逃がしてしまった不運な少年なんだ。しかし、なかなかの才能を持っているよ」

ラブリエは紳に少年を紹介した。少年の才能は紳も見学したところだ。

こんな小学生が埋もれているとは、思ったよりも世の中は謎が多い。

「タイミングが合わないことはあるものだよ。だが、合わないからといって諦めることはないのさ。相手をしてくれる、わたしのような物好きに会うかもしれないからね」

うんうんと、野球ファンの酒飲みオヤジ、といったふうでラブリエは頷く。

「人生の時間は自分のものだ。好きに使えばいいのだよ」

「ハイ」

「……ただ、いまさらスポ少に入っても、合わなくて大変だろうがね。人間関係とか、レベルとか、色々だね」

「ハア」

それは、少年が上手すぎるためだろう。

「きみは、野球は好きかね？」

「ハイ」

「嫌いな時も、野球は好きかね？」

「ハイ」

「それならば、いい。きみは一人でもやっていけるだろう。三日前に野球を始めたとは思えないほど、きみは上達した。わたしが教えることはもうないくらいさ」

「ハイ」

少年は照れながら答える。

「連絡がつけば、練習の相手をしよう。わたしの携帯に電話をくれたまえ」

「ハイ。ありがとうございました」

少年は頭を下げ、走り去った。

ふう、と溜め息をつくラブリエ。

「もう、夏も折り返しだね」

ひとりごとのように言った。

紳は思わず流したが、後でおかしさに気付いた。夏休みはまだ始まったばかりだ。気が早いのではなからうか。だが、蒸し返す話題でもないで、そのままにした。

「さて、われわれはどうするかね？　じつは、きょうは屋台を天日干しにしているね。もう少し置いておきたいんだ」

ラブリエは、グラウンドの端を指差した。トイレと見紛うような茶色の小屋が建っていた。よく見ると、それはラブリエの屋台であった。

屋台を天日干しするとは聞いたことがない。しかし、おそらく日光消毒は色々なものに効くのだろうと、紳は勝手に合理化した。

「わたしとしては、きみがカミカミに襲われた時の話を詳しく聞きたいのだが。奴がどのような力を使うのか、詳細に分析したいのだよ」

「ああ、構わないが」

紳は承諾した。ただ、絶対に筋がメチャクチャな話しかできないだろうな、と思った。

「そうか。それは大変だったね」

興味深そうに紳から話を聞いていたラブリエは、ほとんど液体になったかきごおりを喉に流し込んだ。途中の露店で買ったが、紳はとっくに食べた。もう一杯買えばよかった。

二人は何となくスタジアムで野球を見ながら喋っていた。高校野球の試合らしいが、詳細はわからない。白帽子のチームと黒帽子のチームが試合をしている。席は八割方埋まり、盛況だ。二人が居る外野ですら混んでいる。普通の声で会話をしても、応援の波に飲まれてしまうので、気兼ねしなくていい。が、揺り鉢形のスタジアムは熱を蓄積するので、サウナのように暑かった。

「しかし、まさか、わたしの暗殺の標的ターゲットのときみが繋がってしまうとは。さだめし、この世界は偶然の不運というやつが幅をきかせるようだ」

ラブリエは肩をすくめた。見掛けは子供だが、仕草は老練な大人のものだ。

「なんでおれが殺されそうになったのか、さっぱりわからねえ」  
紳は吐き捨てる。思い出すだけで怒りがよみがえる。だが、怒りのやり場がない。

「要は、カミカミはきみの友人の棕くんが好きだと。それで、棕くんと一緒に居るきみが気に食わないというわけだ。つまり、嫉妬だね」

「なあ、それって、おかしくねえか？」  
「なにがだい？」

「あいつの話を信じるなら、おれはあいつの【世界ナンタラ装置】が作った人間なんだろ？ 部品みたいなものなんだろ？ じゃあ、なんでおれに自由意志っていうか、そういうのがあるんだ？ 『神』だったら、おれを自由に操って、棕に近づけさせなくするぐらい、

わけもないことじゃないか？」

「うん、たしかにそうだね。それはカミカミに訊いてみたかい？」

「いや、それどころじゃなかった」

「ふむ……。【gom】の機能的には、受持の人間の自由意志を奪うことは簡単なはずなんだが。神のみぞ知るといっやつか。『神』には『神』の悩みでもあるのかもしれないね」

ラブリエは舌を前方に伸ばした。ブルーハワイの色で舌が真っ青になっている。

「まあ考える必要もないよ。結局、カミカミというやつは、【gom】の不良品なんだよ。最近、不具合を起こし始めていたんだ。不具合に整合性はないからね。きみはその巻き添えを食ったわけだ。わたしとしては、GOMを代表し、きみに謝らなくてはならないと思う」

ラブリエは改まって紳を見た。真剣な顔になると、ラブリエはゾツとするほど美しい。

「いや、ラブリエが謝ることはねえと思うけど……」

ドギマギしながら、紳は目をそらす。興味もない野球を見る。

「いや、わたしはGOMに勤めている。そして、不具合を起こした【gom】を狩る任務を負っている。だから謝るのは当然のことだ」  
ラブリエは硬い声で言った。冷たい声の内側には苛立ちめいたものが感じられた。

「クツクツ……。だが、『神』の嫉妬とはみつともないな」

ラブリエは、不気味に押し殺した声で、笑った。

そこには、明らかにドス黒い殺気があった。

「きみが味わった恐怖、何万倍にもして、カミカミに返してやろう。絶対にカミカミを許してはおかない。万一、カミカミにきみが襲われたら、わたしは死んでもきみを守る。約束しよう」

小さい手で握手を求めてくるラブリエ。

いつもどおり、子供っぽい笑顔があった。

「どうして、そこまでしてくれるんだ？」

握手に応えつつ、紳は言う。

「きみは鈍い男だな。そこがまた、いいとも言えるが」  
「え？」

ラブリエが、紳にハグしてきた。軽い体が、ふわりと被さってくる。柑橘系のサイダーのような、かすかに酸っぱい匂いがした。汗の匂いさえ、ラブリエは刺激的だった。

「言っただろう。わたしはきみを好きなのだよ。好きな男が辱められ、黙って引き下がるのは、わたしの流儀ではない」

と、まるで武士のようなセリフを、ラブリエは吐いた。

頼もしいと同時に、情けない気分だった。女に守られる男という構図。しかし、敵は人間ではないのだし、大人しく委ねるべきなのだろうか……。

とっ。爪先で軽く跳ね、ラブリエは離れる。

「要するに、カミカミを始末すれば、万事は解決する。カミカミの除去後は、トーキョーのGOMのほうから、新しい【gom】が来る。この地域は再び平常に回りだすだろう」

「結局、『カミカミ』って何者なんだ？ 【gom】ってというのは、機械なのか？」

紳は訊いた。超人的な力のため「人間ではない」と形容したが、正体はいまだに不明なのだ。伽未自身も明言してはいない。

「【gom】が人間なのか、機械なのか、生体ロボットか、それとも全く新しい概念の存在なのか、そこらへんの定義は難しいね。正直、わたしもわからないんだ。【gom】という装置の仕組みは、ブラックボックス化されている。組織でも一部の人間しか知らないと言われる」

ラブリエは軽く握った手を唇に押し当てる。

「ラブリエは、【gom】ではないのか？」

「おい、わたしがあんな化け物に見えるかい？ わたしはきみと同じ人間だよ」

ラブリエは否定した。

しかし、紳の目から見れば、ラブリエも遜色ない能力を使うように思うが。

「この世界には、GOMがバラ撒いた【gom】が無数にある。きみたちが、カミカミたちの【gom】によって自動支配されていることは、紛れもない事実さ。きみたちは【gom】が起動する限り吐き続けるログの一部というわけだ。【gom】が止まれば、きみたちも消えてしまう。そして、【gom】によって自動生成された存在であるきみたちは、この世界から【gom】を取り去った本当の姿を見ることはできない。けれど、つまらないことをあまり考えないことだね。たしかに、わたしはGOMの中間幹部だよ。しかし、わたしだって【gom】機能は無いんだ。きみと同じなのさ。命令とあらば【gom】を搭載した造反分子を消しに行くし、そのため武器も上から持たせられている。ただ、それだけの人間さ。わたしもまた【gom】の幻影世界に依存して生きる、一つの幻影に過ぎないのだよ」

と、ラブリエは憊むように笑った。

その妖しい笑みは、何か後ろ暗いものにも見えた。



何もかも、半分ぐらい面白くなくなった感じがした。それと全く同じに、自分自身、スカスカしていつまらなく感じた。変な所に迷い込んだような気持ちだった。ゲームで言うと、バグがずうっとループするような所に嵌った感じた。

見かけは同じだが、一番大事な何かが抜け落ちた世界。

いや、一時の気の迷いだろう。これは、伽末のせいだ。ラブリエのせいとも言える。GOMとやらが実施している世界のカラクリを聞いたせいか、なんとなく疲れてしまった。

野球場を出て、ラブリエが屋台を置いているグラウンドに戻った。日は傾き、グラウンドはほどよく焼けたお好み焼きのような色をしていた。

ラブリエは屋台からドライバーとか工具を出し、メガネを直し始めた。

屋台は、開いていた。そういえば虫干しをしていると言っていた。トタンの覆いは剥がされ、カウンターや棚などの内装が露わになっている。見たところふつうの屋台と大差ない。

紳は何気なく屋台を見ながら、その裏側に回った。

普通の屋台ではなかった。

地面に広げたブルーシート、そこに所狭しと広げられ、重ねられている物。

大量の書籍だった。

ラブリエが引いていたのは、「本屋の屋台」だったのである。

一見して、あまり見ない印象の本が多かった。派手な表紙や帯のついたものは殆どなく、寒色系の地味な表紙が多い。布を張った大判のハードカバーもあるが、もっとも多いのは文庫サイズの本だ。光沢のある新しい本も混じるが、だいたいは古めかしく、紙束を表紙で綴じたような殺風景なものだ。背表紙にだけ、タイトルと著者名が記されている。

紳が知っている本はほとんどなかった。

一タイトルだけ、知っている作品があった。それは『魔王の教室

掃除』という、ラブリエから聞いたシリーズの本だった。ちなみにシリーズの二巻は『勇者の学校破壊』というタイトルのようだ。ともかく、紳が読んだことがある本は一つも無かった。もともと本は読まないほうである。手にとって、めくってみた。当たり前だが活字ばかりだ。たまにイラストページがある。

「虫干しって、このことか」

本ならば太陽に当てるのも分かる。

「本屋の屋台だったんだな。ラーメンでも売ってるかと思ってた」「うん、本屋だよ」

時間をおいて、返答があった。ラブリエは反対側で作業している。影になっていて涼しいらしい。

「ただし、ライトノベル特化型の本屋だよ。棚が限られる屋台では、特色を出さないとね。けれど、屋台はのんびりとやっているよ。この世界では副業に過ぎないし……。読書感想文のタネに買っていく子供が多いね。今までは三冊ほど売れたよ」

三冊で利益が出るのだろうか。いや、出ないから副業ということか。

ん？ 今のラブリエのセリフ、何か違和感がある。だが、何処なのか判明しない。

「ラブリエは本が好きなんだな？」

紳は、屋根ごしに声を投げ掛ける。

「好きというわけではないよ。読むことも全然ないね。そもそもわたしは忙しくて読む時間など無いに等しいからね。ただ、捨てるのは忍びないから、売れるなら売ろうというわけさ」

ラブリエは独白する。

「品揃えは豊富なつもりだよ。古本が多いけれど、新しい本もある。それから、存在しない本。存在してもすぐに消える本。未来では存在している本。表紙を開いたら消えるから読むことができない本。ほかに揃っている。気に入った本はあったかい？」

クツクツと囁くように笑いながら、ラブリエは言った。

「何か、おかしい本が置いてあるような説明だな？ それは冗談か？」

「冗談？ わたしは冗談を言ったことはないよ。わたしは、この世界ではちよつと特殊な、ライトノベル屋台引きなんだ。普通の書店に無いような本も、少しは扱っているんだよ」

紳は、ハツとした。「この世界」という言葉。以前、同じ「セカイ」という言葉を多用した奴が居た。戸沢萌映という、脳がいかれた女である。その意味で、お馴染みの言葉。しかし、この世界で常識的に生きる限り、馴染みがない言葉でもある。だが、今日は、紳は常識とは対極にある経験をしていた。

そして、たしかに、ラブリエは冗談を言ったことはないと思う。

紳は、深い意味もなく、心臓が急ぐのを覚えた。

戸沢萌映は、ある『物語』というか、『台本』を探していた。

もしかして、ラブリエの本屋にその本があるとしたら。

どうしてそう考えたのかは分からない。

ラブリエがちよつと不思議な奴だから、だろう。この屋台も、ちよつと不思議な本屋かもしれぬ。

とあって、戸沢萌映の探す『物語』が都合よく置かれているとは思えない。だいたい『物語』が実在するのがまず怪しい。その前に、IW云々という戸沢萌映の話自体、信じてはいないのだ。それに戸沢萌映は消えた。もうあの女に関する事は終了した。蒸し返す利益などない。まったくない。

「なあ、ラブリエ、ちよつと訊くが」

そう、とりあえず訊くだけだ。何の目的もなく、安直に訊いてみるだけだ。

「この屋台に、……なんとかっていう本はあるか？」

「なんていうタイトルだい？ ここの本の情報は全部網羅しているから、タイトルを聞けば分かるよ」

「えつとな、『最高セカイがどうたら』、とかいう本なんだが」

紳は首筋を掻き、言う。恥ずかしかった。

ラブリエの声がした。

「うーん。そんな本は、置いていないな」

「ああ、そうだよな。あるわけねえよな。悪い悪い。おれの勘違いだったわ」

紳は、屋台の建物に向かって、早口で弁明した。

「……」

ひょっこりと、ラブリエが屋根の上に顔を出した。

「……その本は、探し物なのかね？」

ラブリエは訊いてきた。

「いや、そういうわけでもないんだ。なんつーか、知り合いが探してる本なんだ」

「なるほど」

屋根の上、ラブリエは腕を組み、あぐらをかいて座った。

黙って考え込んでいる。

「よし。きょうはきみのおかげで、『カミカミ』の情報をたくさん引き出すことができた。きみにはとても感謝しているから、役に立つことを教えよう」

ラブリエは切り出した。

「いつだったか、きみたちがデートをした時、昼食のお金が足りなくなっただけがあったらどう？ あの時にお金を払ったのはわたしだ。きみにあげたフィギュアを、ふたたび忘れて行ったので、きみの家へこっそり届けたのもわたしだ。そして、きみの同級生のトザワ・モエを、この世界に最初から存在しているように工作したのもわたしだ。世界構成を上書きしておいた……まあ、そのへんの詳細はどうでもいい」

ラブリエは髪をいじりながら、何気ない口調で語っていく。

そして、結論した。

「要するに、わたしは、この世界の外からきた」

ラブリエは立ち上がった。

「とと、わ、わわっ」

立った勢いでバランスを崩し、屋根から滑り落ちた。

「お、おい、大丈夫か」

紳は駆け寄ったが、ラブリエは手をかざし、紳を制する。尻を押さえているが、大事なようだ。

頭が混乱していた。

かつてないほどと言ってもいい。

冗談は言わないはずじゃなかったのか。ラブリエ。

ラブリエの不思議な力は認めよう。「カミカミ」の力も認める。自分で経験したばかりだ。

しかし、ラブリエの口から戸沢萌映という名前が出るとは思わなかった。

とびきりの悪夢を見ている気分だ。

どう考えても、二人に接点が見当たらないわけだが？

というか、同じ星の生物とすら思えないわけだが？

紳は、不思議でならなかった。何がとって、ラブリエという人間の不思議ささえ、戸沢萌映という概念に接触した途端、その圧倒的な醜悪さに覆い隠されてしまったことだ。これはやはり、悪夢だ。気持ちいい夢から覚めたという、悪夢。

「……なんで、だ？」

紳は口ごもった。

これ以上訊くのを恐れている自分を感じた。

「戸沢萌映って、言ったのか？ あいつのことを知ってるのか？  
なんでだ！」

恐れてもいたが、怒ってもいるらしい。自分の口調から分かった。怒っている？ どうしてだろう。

「なんでと言われても、知り合いだからという他には、答えようがないな」

「知り合いだと……？ いや、いやいやちょっとまで。ありえないだろ」

戸沢萌映の顔面を思い浮かべる。あいつと、ラブリエ。やっぱり、どう見ても、知り合いではない。世界が違う。

ん、世界……？

「トザワ・モエは、『別の世界から来た』と、きみに言わなかったかな？ つまり、それが答えなんだ。わたしと彼女は、向こうの世

界での知り合いだということだ」

ラブリエは淡々と述べた。

「そんな、バカな」

紳は言葉がなかった。今の自分がアホ面をしていることは想像に難くない。

まさか、ラブリエが戸沢萌映と同じ説を語るとは、予想だにできなかった。しかし、紳は、ラブリエの話は信じざるを得ない。紳はラブリエを信じていたからだ。

世界が違う。そういうことだ。ラブリエとは世界が違う。

そして、ラブリエと戸沢萌映は、世界が同じだというのか。

もしかすると、無性に苛立つのは、二人が一緒の世界だということへの嫉妬なのか。もちろん、嫉妬もあった。だが一番は、そういうセカイが本当にあると認める羽目になったことだ。

つまり、戸沢萌映のくだくだしい演説は、正しかった。

「IWとやらは、あつたつてわけか」

思わず呟いた。まるで、敗北した悪役だ。

「IW? …… ああ、トザワ・モエの用語だね? 彼女は『向こう』をそう言っているのか」

ラブリエは顎に拳を当て、クスリと笑う。

「彼女の用語を借りれば、わたしは『IW』でのトザワ・モエの間<sup>イケ</sup>だった。だが、それだけではない。トザワ・モエは、『IW』でのわたしたちのかけがえのない仲間でもあった。わたしはトザワ・モエを見守るためにこの世界に来た」

と、ラブリエは目的を明らかにする。

たしかに、萌映は言っていた。IWでは素晴らしい仲間たちが居たと。

「信じらんねえ」

紳は繰り返した。だって信じられないからだ。

ラブリエが見守るほどの価値など、あいつには無い。あの顔。あの無能。信じられない。

「信じなくて構わないとも」

ラブリエは、わざと感情を抑えたような声で言った。

「この世界でIWのことを語っても、空疎に聞こえるのは無理もない。この世界では、IWの因果は断ち切られている。わたしたちの間にあつた燃えるような情熱も、冷たい楔のような信頼も、この世界には持つて来ることはできない。そればかりか、突発的な世界間の移動にはダメージが伴う。トザワ・モエの場合も例外ではない。IWでの彼女の姿は見る影もないという有り様さ。わたしは入念に準備をして、飛ばされた彼女を追つて来たわけだが、彼女を見た時は落胆を隠せなかつたよ。正直、見なかつたことにして、とんぼ返りしようかと思つたね。この世界での彼女の劣化ぶりは目を覆うものがある」

戸沢萌映の「真の姿」は別にある、と言いたいのだろうか。

ラブリエは嘆きながらも、楽しそうだった。意外と毒舌家らしい。「この世界でIWのことを説明するのは構造的に無理なのだよ。空疎な言葉が踊るだけさ。だから、そろそろやめよう。無理に信じろとは言わない。きみには、信じてもらいたい」

ラブリエは話を終え、紳の反応を待った。

ラブリエは、真つすぐに紳を見た。

紳は溜め息をついた。

この世界の人間として、眉唾な話に辟易したポーズを取らなくてはならないからだ。

「……あいつを連れて帰るのが、目的なのか？」

「できるものなら、そうしているさ。しかし、世界間の移動というのは、簡単ではないんだ。わたしには、トザワ・モエを連れて帰る余力は無い。わたしができるのは、トザワ・モエを見守ることだけだ。トザワ・モエが帰れるかどうかは、彼女自身にかかっている。帰れなければ、それまでの人間ということさ。彼女がこの世界の塵と消えるならば、わたしはそれを見届け、仲間に報告するまでだよ。残念だがね」

ラブリエは乾いた口調で言った。

「ラブリエ。どうやってたらIWとやらに帰れるのか、方法は知っているのか？」

「トザワ・モエに関しては、知らない。わたしのように世界間移動の術が使用可能ならば別だが、彼女はそういう術は身に付けていないはずだ。もつとも、この術が使えるのはIWでもわたしを含め数えるほどののだが」

ラブリエは胸を張り、どや顔する。

残念だが、この世界でその自慢に意味があるとは思えない。

「トザワ・モエは、この世界からIWに行ける方法を、自力で見つけるしかない。勿論、その方法は、わたしも分からない。しかし、『仲間』として、トザワ・モエの行動が停滞しないよう、裏からケアはさせてもらっている。最初に述べたようなケアをね。ちなみに、きみのフィギュアの宅配については、ただのサービスだ」

「そいつはありがとうと言っておくか」

あのフィギュアのおかげで、戸沢萌映に罵倒されたが。

「どういたしまして」

ラブリエは足を揃え、深々とお辞儀をした。

「って、それは置いといて、あのな」

言いにくいことだが、言わなければならぬ。二日前、紳と戸沢萌映の間にあった事件を。

「もう、あいつは居なくなつた。死んでしまつたかもしれない」

「いや、心配は無い。わたしには分かる。IWの人間の気配を探知する術は心得ていてね。トザワ・モエの反応は消えていない。この世界の何処かで無事に生きているよ」

「そうか……」

紳は溜め息をついた。安堵する一方、いらつく。

「そういえば、なんであいつの前に出て行かない？ 二人で協力すれば帰りやすいんじゃないのか？」

「それは得策ではない。言つたらう。IWでの因果は断ち切られて

いる。トザワ・モエにとって、こちらの世界はIWのようにはいかないはずだ。トザワ・モエはわたしが『仲間』だと分らない可能性が高い。無理に言い聞かせるのは却って逆効果だ。むしろ、押し付けることで完全に拒否される恐れもある。そうなれば元も子もない。だからわたしの正体を明かすことはできんよ」  
なるほど。

それを聞き、思い当たるフシがあった。

「ラブリエ。萌映あいつがお前の写真を持ってたことは、知ってるか？」

「いや、初耳だね」

「その写真を見て、あいつは、お前が自分を殺しに来た『刺客』だと言っていた」

「『刺客』？ ……ふ、ふふふ。ふははははははは。そうか、『刺客』か。こいつは傑作だ。『仲間』を『刺客』と認定させるなんて。ますますトザワ・モエが帰るのは一筋縄ではいかないな」

「どういうわけなんだ？」

「トザワ・モエは、『とある存在』により、強制的にこちらへ飛ばされた事情があるんだ。その存在は、トザワ・モエを敵視し、こちらの世界に閉じ込めたがっていた。そのため、トザワ・モエを劣化させる術を掛け、IWに帰るためのサインを見落とすように仕向けたのだろう。だが、『仲間』を『刺客』認定するところを見ると、現状は悪いと言えるな。サインを見落とすどころか、拒否反応が出るまでとは」

ラブリエは困った様子で、腕組みをして、屋台の周りをぐるぐると回り始めた。

「だけど、すぐにやめた。」

「ま、いいか。自己解決した」

ラブリエは手を叩く。

「なるようになるだろう。わたしは今までどおり見守るさ。現状、それ以上は動けんしな。ということ、話は終わったようだ。わたしはもう少し、この世界で屋台これを引くことになりそうだ」

ラブリエは屋台を仕舞い始めた。

外の世界から来た不可思議な人種。この世界では本を売り歩く屋台引き。それでいてGOMの暗殺者。

ラブリエには三つの顔がある。だが、紳は矛盾を感じた。ラブリエがこちらに来たのが戸沢萌映と同時期だったとすれば、つい最近である。それに対して、屋台引きはまあいいとして、「GOMの暗殺者」という地位は前からあるものはずだ。こちらに来たラブリエが急にその地位に収まるのは矛盾している。

「ラブリエ、お前はGOMの暗殺者なんだろう？」

紳は言った。

この不可思議な少女を普通にお前よばわりするほど、自分もおかしい世界に接近してしまった。「カミカミ」やラブリエは、「色」が違う。少なくとも、大川や小山とギャンブル話に興じたり、毎朝の定例行事として櫛棗の容姿を一瞥したり、という生活とは違う。紳は、自分では普通の生活を続けていたつもりだが、今までとは色の違う世界が、すぐ隣にある。というか、もしかすると、普通の生活の中に点描画のように紛れ込んでいる。

「『GOMの暗殺者』は、元々居るはずだ。外から来たというお前が、暗殺者を名乗るのはおかしい」

「嘘ではないよ。『両方とも本当』なんだ。この世界では、『GOMの暗殺者』がわたしの『顔』さ。同時に、『IWからの来訪者』という『顔』も持っている。きみが自分の肉体を持って生まれて来たように、わたしがこの世界に来た時、『GOMの暗殺者』というキャラクターを与えられた。端的に言えば、わたしがこの世界に来た時、エウガナヲサロルヒムラステイン ELLMという人間が存在していることになった。『設定』の違う世界どうしが関わると、『設定』の書き換えは頻繁に起こるよ」

ラブリエは口笛を吹くように簡単に言う。だから多分本当なのだろう。だが、信じられない。そんな奇妙な事を信じなきゃいけないことが、信じられない。

さらに、一切を信じるとすると、そんなお手軽な手品マジックのような仕掛けで世界が運営されていることに愕然である。腹話術のコミカルな人形にでもなっちまった気分だ。シリウスとギャグがこの世界ではぐるぐると循環している。

「しかしまあ、この世界に來たのも何かの縁。GOMの暗殺者という『顔』をエンジョイしなければ、損というものだな。しばらく居ると、愛着も湧く」

ラブリエは、のろのろと片付けをしている。

「これは蛇足だが、われわれの本質は、魂だ。人間は、一つの世界に一つの『顔』を定められて生まれる。一度の人生というのは、一つの衣装のようなものだ。魂は永遠であり、もつと奥深い使命のもと、さまざまな人生を渡り歩いている。ところが、人間は死ぬと記憶を失うから、死んだら全てが終わりだと勘違いをしている……。わたしにはきみたちと違う点が一つある。それは、前世の記憶を保持していることだ。われわれは、死んだらそのつど別の容れ物を得て生まれ変わるのだが、それが事実であることを、わたしは知っている。なぜなら、前の人生での記憶を持ち続けているからだ。一般に、前世のことは死んだら忘れるらしいが、わたしはその忘却機能が無い突然変異体だ。だから、わたしは最初の生から今の一つ前の生まで、全部の『人生』の記憶を覚えている。この先わたしが死ぬば、ラブリエという個体の記憶も加算されるだろう。もつとも、信じるか信じないかは、自由だ。わたしとしては事実なのだし、きみたちとは生きる仕組みが違うというわけだから、納得させることは難しい。ああ、もう一つ、わたしには違いがあったな。それは、生まれ変わりの幅が狭いことだ。いつも同じような素質、資質、気質、形質の容れ物に生まれ変わる特徴があつてね。要は、細かい差異はあるが、おおむね、今のような可愛い娘にばかり転生してしまうんだ。わたしとしては、石ころとか雑草とかフンコロガシとかに生まれ変わっても、全くいいのだがね。そういった選択は利かないようだ。まあ、転生後の適応が楽だという点ではいいがね」

ぶつぶつと、ラブリエは談話を垂れ流す。

きつと、ラブリエは片付けが嫌いな性格なのだろう。すぐく嫌いに違いない。

紳は、なんでもありだなと呆れるのを過ぎ、なんともなれと思ってきた。脳が、麻痺してきた。正直なところ、驚きすぎてリアクションも浮かばないのだろう。だから今は何気なくふるまえているが、あとでどおつと疲れが出ないか不安すぎる。

「ちなみに、ここにあるライトノベルだけどね」

ラブリエは屋台をポンと叩く。

「ヒロインは、全員、わたしだ。古いラノベも、新しいラノベもね。もちろん、本ごとにヒロインのキャラクターは違うよ。しかし、今言った事情から、全員わたしと言えるんだ。ここにあるライトノベルは、わたしの行動記録集とも言えるんだよ」

ちなみに、本は屋台が自動生成してくれるんだが、云々、ラブリエは説明を続けた。が、情報過多のため、頭には入ってこない。

「というか、ラブリエが言ってることって、別に普通じゃね？ と思う瞬間が、あったりなかったり。とりあえず一言、紳は答えておいた。」

「なるほど」

そのあと、ラブリエから修理したメガネを受け取り、たがいの電話番号を交換した。

「わたしは、GOMの暗殺者という、この世界での『顔』も疎かにしないつもりだ」

ラブリエは言った。

「一両日中にも、わたしは『カミカミ』を殺すだろう。向こうもわたしを警戒してくる。応戦の準備をされんうちに叩くさ。だが、万一『カミカミ』に襲われたりしたら、すぐに連絡してくれ」

ラブリエは、自分の連絡先を入れ、紳に携帯電話を返した。

それから、紳は先に帰ることにした。ラブリエの片付けは、まだ、

まだまだ、かかりそうであった。

ふと、ラブリエは、思い出したように言った。

「そつえば、きみがさっき言った最高世界何某なにがしという本だが、何処かで見えた気がするんだ」

地元の駅を出ると、昏くらくなっていた。もう夕方と夜の境目ぐらいだ。オレンジと黒の騙し絵のような、うすら寂しい景色が広がる。

それにしても、参ったな……

I Wとかいう、空想としか思えない世界が、本当にあるなんてな……

もしかすると、おれは一言ぐらい戸沢萌映に詫びを入れないといけないのか？

てか、あいつ、どこに行っただのか分かんねえし……

ぼんやりと歩きながら、そんなことを考えた。

コンクリートで覆われた宅地は、ひとけのない墓地のように、静まり返っていた。どこからともなく、風鈴の音が聞こえる。どこかの家のラジオが、聞こえる。

「~~~~三丁目の　さん、四丁目の××さん、六丁目の　さん、以上の方は、滅ぼしました。」

プツツ、音は途切れ、聞こえなくなった。

……何？

驚いて、立ち止まる。もう、聞こえない。ふつつのラジオと思っ  
て聞き流してしまった。五、六秒くらい流れた、異常なアナウンス。  
町内放送であろうか。いや、町内にはラジオ局などない。

しばらく聞き耳をたてていたが、二度と聞こえては来なかった。

「……ただいまー」

もちろん、家には誰も居ない。なんとなく言っただけだ。

二階に上って行く。

部屋は薄暗い。明かりをつけようか迷う。

紳は、自分で開けたドアに頭をぶつけ、転んだ。

肩に広がる鈍い痛み。足元に落下した、重い四角の物体。それが、ぶつかったのだ。見慣れない物体であった。これは……ラジカセ？

「ナイトメア・トゥ・リメンバー」

くぐもった声がした。

ハツとして目を凝らす。

コタツにて待っている、長髪の少女の影。

「遅えじゃねえか童貞。神を待たせるもんじゃねえよなあ」

「カミカミ」が居た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9522u/>

---

『最高世界の台本』はどこの本屋にあるか

2011年10月28日16時08分発行